

# 京都府遺跡調査概報

## 第 48 冊

1. 天 若 遺 跡
2. 池 尻 遺 跡
3. 鹿 谷 遺 跡
4. 史 跡 教 王 護 国 寺
5. 平安京・烏丸町遺跡隣接地
6. 燈籠寺遺跡第5次
7. 樋ノ口遺跡

1 9 9 2

財団法人 京都府埋蔵文化財調査研究センター

## 序

財団法人京都府埋蔵文化財調査研究センターは、昨年開設から満10年を迎えました。当センターでは、これを記念し、特別展覧会や特別講演会の開催及び論文集の刊行等の事業を実施してきたところでありますが、これらの諸事業の遂行にあたりまして皆様方の御協力を賜りましたことを、厚くお礼申し上げます。ふりかえりますと、当センターの設立以後10年間に、公共事業は年々増加の一途をたどり、それに伴い、発掘調査は単に件数の増加だけでなく、近年は特に大規模化する傾向にあります。こうした状況に対応するため、徐々にではありますが、組織・体制の強化を進め、調査・研究を図ってまいりました。このような発掘調査成果については、『京都府遺跡調査報告書』をはじめ、『京都府遺跡調査概報』・『京都府埋蔵文化財情報』等の各種印刷物を逐次刊行してまいりました。また、毎年、「小さな展覧会」・「研修会」を開催し、出土遺物や調査の概要を広く府民に紹介して、一般への普及・啓発活動にも意を注いでいるところであります。

本書は、平成3年度に実施した発掘調査のうち、水資源開発公団・京都府土木建築部・京都府亀岡土地改良事務所・京都府警察本部・京都府労働部・京都府教育委員会・日本道路公団大阪建設局の依頼を受けて実施した、天若遺跡、池尻遺跡、鹿谷遺跡、史跡教王護国寺境内、平安京・烏丸町遺跡、燈籠寺遺跡第5次、樋ノ口遺跡の各発掘調査を収めたものであります。本書が、学術研究の資料として、また、埋蔵文化財を理解する上で、なにがしかの役にたつところがあれば幸いです。

おわりに、発掘調査を依頼された上記の諸機関をはじめ、京都府教育委員会・日吉町教育委員会・亀岡市教育委員会・京都市文化観光局・木津町教育委員会・精華町教育委員会などの関係諸機関、並びに調査に直接参加・協力いただいた多くの方々に厚く御礼申し上げます。

平成4年3月

財団法人 京都府埋蔵文化財調査研究センター

理事長 福山敏男

## 凡 例

1. 本書に収めた概要は、下記のとおりである。
  1. 天若遺跡    2. 池尻遺跡    3. 鹿谷遺跡    4. 史跡教王護国寺境内
  5. 平安京・烏丸町遺跡隣接地    6. 燈籠寺遺跡第5次    7. 樋ノ口遺跡
2. 各遺跡の所在地、調査期間、経費負担者及び概要の執筆者は下表のとおりである。
3. 本冊の編集には、調査第1課資料係が当たった。

遺跡名	所在地	調査期間	経費負担者	執筆者
1. 天若遺跡	船井郡日吉町天若小字森形	平3.4.15～ 平4.2.7	水資源開発公団	三好博喜
2. 池尻遺跡	亀岡市馬路町池尻	平3.8.19～ 平4.2.27	京都府土木建築部	田代 弘
3. 鹿谷遺跡	亀岡市藪田野町鹿谷	平3.7.23～ 10.15	京都府亀岡土地改良事務所	鶴島三壽
4. 史跡教王護国寺境内	京都市南区九条町339	平3.6.10～ 7.15	京都府警察本部	引原茂治
5. 平安京・烏丸町遺跡隣接地	京都市南区東九条下殿田町70	平3.8.19～ 11.15	京都府労働部	引原茂治
6. 燈籠寺遺跡第5次	相楽郡木津町大字燈籠寺小字内田山	平3.6.4～ 7.20	京都府教育委員会	竹井治雄
7. 樋ノ口遺跡	相楽郡木津町大字山田小字樋ノ口	平3.3.4～ 9.26	日本道路公団大阪建設局	伊野近富

# 目 次

1. 天若遺跡平成3年度発掘調査概要-----	1
2. 池尻遺跡発掘調査概要-----	15
3. 鹿谷遺跡平成3年度発掘調査概要-----	37
4. 史跡教王護国寺境内発掘調査概要-----	49
5. 平安京・烏丸町遺跡隣接地発掘調査概要-----	55
6. 燈籠寺遺跡第5次発掘調査概要-----	61
7. 樋ノ口遺跡発掘調査概要-----	67



# 挿 図 目 次

## 1. 天若遺跡

第1図	調査地位置図	1
第2図	調査トレンチ配置図	3
第3図	条里状水田地割調査トレンチ平面図及び断面図	4
第4図	検出遺構平面実測図	7
第5図	出土遺物実測図(須恵器)	9
第6図	出土遺物実測図(土師器)	10
第7図	出土遺物実測図(石製品)	11

## 2. 池尻遺跡

第8図	調査地位置図	15
第9図	トレンチ配置図	16
第10図	第1調査地区東壁断面図	17
第11図	第1調査地区平面実測図	18
第12図	S D 01出土遺物実測図	19
第13図	第2調査地区東壁断面図	19
第14図	第2調査地区平面実測図	19
第15図	第2調査地区検出土坑実測図	20
第16図	S K 01出土遺物実測図	20
第17図	第3調査地区北壁断面図	21
第18図	第3調査地区平面実測図	21
第19図	S B 01実測図	22
第20図	S X 01実測図	22
第21図	S X 01遺物出土状況	23
第22図	S X 01出土遺物実測図(1)	24
第23図	S X 01出土遺物実測図(2)	25
第24図	S X 01出土遺物実測図(3)	26
第25図	S X 01出土遺物実測図(4)	27
第26図	S X 01出土長頸瓶の高台各種	28

第27図	S B01出土遺物実測図	29
第28図	各トレンチ出土遺物実測図	29
第29図	第22トレンチ溝1出土瓦(1)	30
第30図	第22トレンチ溝1出土瓦(2)	31

### 3. 鹿谷遺跡

第31図	調査地周辺遺跡分布図	38
第32図	調査区配置図	40
第33図	3区南壁土層断面図	41
第34図	調査地遺構平面図	42
第35図	竪穴式住居跡S H06実測図	43
第36図	竪穴式住居跡S H08実測図	43
第37図	竪穴式住居跡S H10実測図	44
第38図	竪穴式住居跡S H11実測図	44
第39図	掘立柱建物跡S B01実測図	45
第40図	掘立柱建物跡S B03実測図	45
第41図	掘立柱建物跡S B04実測図	46
第42図	掘立柱建物跡S B05実測図	46
第43図	出土遺物実測図	47

### 4. 史跡教王護国寺境内

第44図	調査地位置図	49
第45図	平安京条坊図	49
第46図	調査地実測図	50
第47図	出土遺物実測図(1)	52
第48図	出土遺物実測図(2)	53

### 5. 平安京・烏丸町遺跡隣接地

第49図	調査地位置図	55
第50図	平安京条坊図	55
第51図	トレンチ配置図	56
第52図	A・Bトレンチ断面図	57
第53図	Cトレンチ断面図	58
第54図	出土遺物実測図	59

## 6. 燈籠寺遺跡第5次

第55図	トレンチ配置図	61
第56図	土坑SK01	62
第57図	遺構配置図	63
第58図	濠SD02平面実測図	64
第59図	濠SD02断面実測図	64
第60図	出土遺物実測図	65

## 7. 樋ノ口遺跡

第61図	調査地周辺遺跡分布図	68
第62図	トレンチ配置図	70
第63図	第1～6トレンチ土層断面図	71
第64図	SB12実測図(部分)	72
第65図	第3・第3南トレンチ平面・断面図	73
第66図	出土遺物実測図	75
第67図	出土遺物実測図(第1トレンチ・第2トレンチ・第3トレンチ)	76
第68図	出土遺物実測図(第13トレンチSD14・41、 SD93とSD41との境、SD93)	77
第69図	出土遺物実測図(第3トレンチ・包含層など)	78
第70図	出土遺物実測図(彩釉陶器)	79
第71図	出土遺物実測図(軒丸瓦)	80
第72図	出土遺物実測図(軒平瓦・鬼瓦・平瓦)	81
第73図	出土遺物実測図	83
第74図	遺構変遷図	85
第75図	出土遺物ドット図	87

# 図 版 目 次

## 1. 天若遺跡

- 図版第 1 空中写真(右上が北方向)
- 図版第 2 (1)調査地遠景(北から)  
(2)竪穴式住居跡 S H9116(南東から)
- 図版第 3 (1)竪穴式住居跡 S H9106(南西から)  
(2)竪穴式住居跡 S H9106竈(南西から)
- 図版第 4 (1)竪穴式住居跡 S H9113・S H9115(南西から)  
(2)竪穴式住居跡 S H9115竈(南から)
- 図版第 5 (1)竪穴式住居跡 S H9122(南から)  
(2)竪穴式住居跡 S H9122竈(南から)
- 図版第 6 (1)竪穴式住居跡 S H9111竈(北西から)  
(2)竪穴式住居跡 S H9140(南から)
- 図版第 7 出土遺物

## 2. 池尻遺跡

- 図版第 8 (1)調査地近景  
(2)第 1 調査地区 S D01 検出状況
- 図版第 9 (1)第 1 調査地区 S D02 検出状況  
(2)第 1 調査地区 S D01 埋土の状況
- 図版第 10 (1)第 2 調査地区 S K01 検出状況  
(2)第 2 調査地区 S K03 検出状況
- 図版第 11 (1)第 2 調査地区 S K01 土器出土状況  
(2)第 3 調査地区全景
- 図版第 12 (1)第 3 調査地区 S B01 検出状況  
(2)第 3 調査地区 S B01 柱穴検出状況
- 図版第 13 (1)第 3 調査地区 S X01 遺物検出状況  
(2)同上(細部)
- 図版第 14 (1)第 4 調査地区全景  
(2)第 22 トレンチ平瓦出土状況

図版第15 第3調査地区S X01出土遺物(1)

図版第16 第3調査地区S X01出土遺物(2)

図版第17 第3調査地区S X01出土遺物(3)

図版第18 第3調査地区S X01出土遺物(4)

### 3. 鹿谷遺跡

図版第19 (1)調査地遠景(北から)

(2)1区調査風景(北から)

図版第20 (1)1区掘立柱建物跡S B01・02(北から)

(2)2区竪穴式住居跡S H06(北から)

図版第21 (1)3区全景(西から)

(2)3・4区全景(西から)

図版第22 (1)4区竪穴式住居跡S H10(東から)

(2)4区竪穴式住居跡S H11(北から)

### 4. 史跡教王護国寺境内

図版第23 (1)調査地全景(北から)

(2)溝S D3(北から)

図版第24 (1)溝S D5・基壇状遺構S X6(東から)

(2)出土遺物

### 5. 平安京・烏丸町遺跡隣接地

図版第25 (1)Aトレンチ全景(北から)

(2)Bトレンチ全景(北から)

図版第26 (1)Cトレンチ全景(西から)

(2)Cトレンチ断面(南から)

### 6. 燈籠寺遺跡第5次

図版第27 (1)調査前風景(北から)

(2)トレンチ全景(北から)

図版第28 (1)土坑S K01、濠S D02(西から)

(2)土坑S K01(北から)

図版第29 (1)溝S D02(北から)

(2)溝S D02の断面(西から)

### 7. 樋ノ口遺跡

図版第30 (1)調査前風景(南から)

- (2)調査前風景(南東から)
- 図版第31 (1)第1トレンチ試掘状況(南東から)  
 (2)第2トレンチ試掘状況(南東から)  
 (3)第4トレンチ試掘状況(東から)  
 (4)第5トレンチ試掘状況(東から)
- 図版第32 (1)第3トレンチ試掘状況(南東から)  
 (2)第6トレンチ試掘状況(東から)  
 (3)第3トレンチ南部(東から)  
 (4)S B 8柱穴検出状況(東から)
- 図版第33 (1)瓦・灰釉出土状況(東から)  
 (2)三彩出土状況(東から)  
 (3)三彩小壺出土状況(西から)  
 (4)二彩蓋出土状況(南から)
- 図版第34 (1)第3トレンチ北部(北から)  
 (2)暗渠 S X 154検出状況(東から)  
 (3)S B 12検出状況(東から)
- 図版第35 (1)第7トレンチ発掘状況(北西から)  
 (2)第7トレンチ山際発掘状況(西から)  
 (3)S B 12柱痕検出状況(北西から)  
 (4)現地説明会風景(北東から)
- 図版第36 (1)築地周辺検出状況(南から)  
 (2)南部遺構検出状況(東から)
- 図版第37 (1)西壁土層断面(南東から)  
 (2)調査地全景(東から)  
 (3)調査地全景(南東から)  
 (4)調査地全景(北東から)
- 図版第38 出土遺物(1)
- 図版第39 出土遺物(2)
- 図版第40 出土遺物(3)
- 図版第41 出土遺物(4)

## 付 表 目 次

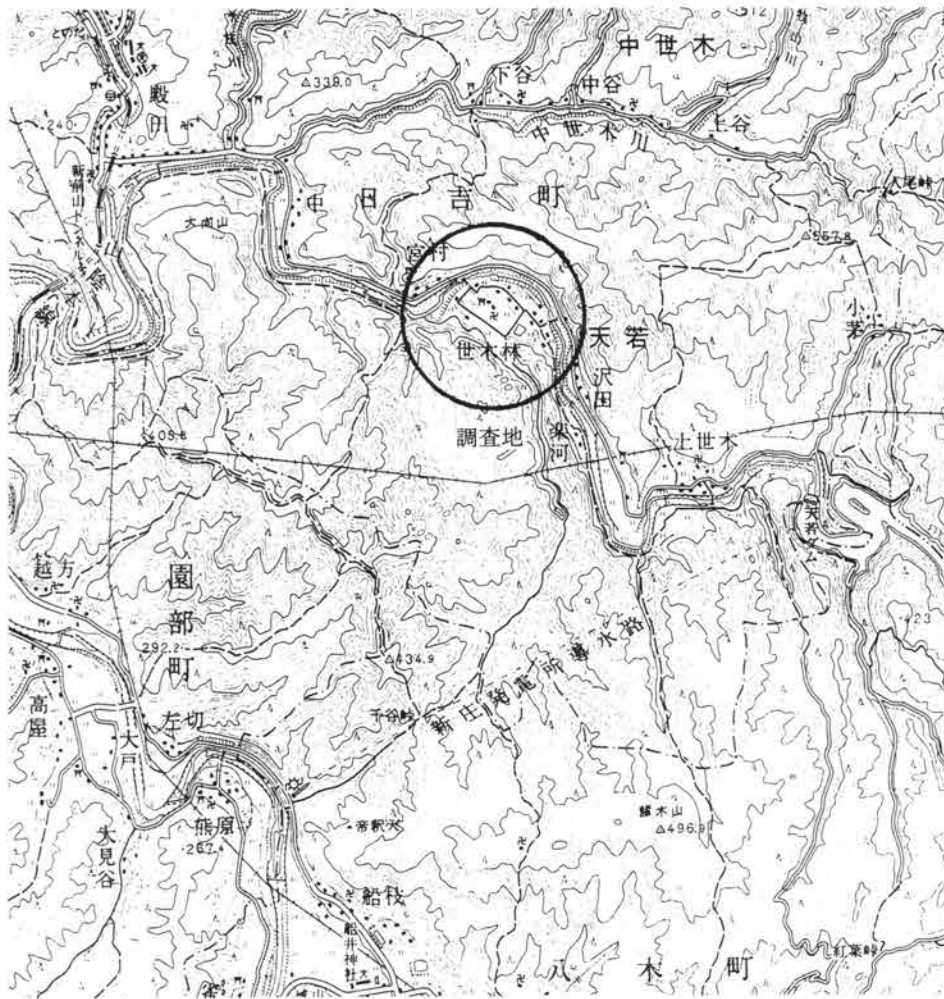
1. 天若遺跡	
付表1 検出竪穴式住居跡規模一覧表-----	5
2. 池尻遺跡	
付表2 第3調査地区SH01出土遺物観察表-----	35
3. 樋ノ口遺跡	
付表3 主要遺物観察表-----	82
付表4 軒瓦点数表-----	89
付表5 平城薬師寺と同范関係-----	90

# 1. 天若遺跡平成3年度発掘調査概要

## 1. はじめに

天若遺跡の調査は、日吉ダムの建設が計画され水没地となることから、水資源開発公団の依頼を受けて、(財)京都府埋蔵文化財調査研究センターが平成元年度から行っている。

平成3年度の現地調査は、平成3年4月15日から平成4年2月7日まで行った。掘削面積は約6,900㎡で、当センター調査第2課調査第2係長奥村清一郎、同調査員三好博喜・



第1図 調査地位置図(1/50,000 京都西北部)



柴 暁彦・野島 永が担当した。本概要の執筆は三好・柴・野島が行い、文末に明記した。現地での調査及び整理作業にあたっては、地元有志ならびに学生諸氏<sup>(註1)</sup>、日吉町教育委員会・世木財産区管理委員会をはじめ、多くの方々の協力を得た。記して謝意を表したい。

なお、調査に係る費用は、全額、水資源開発公団が負担した。

(三好博喜)

## 2. 調査の経過

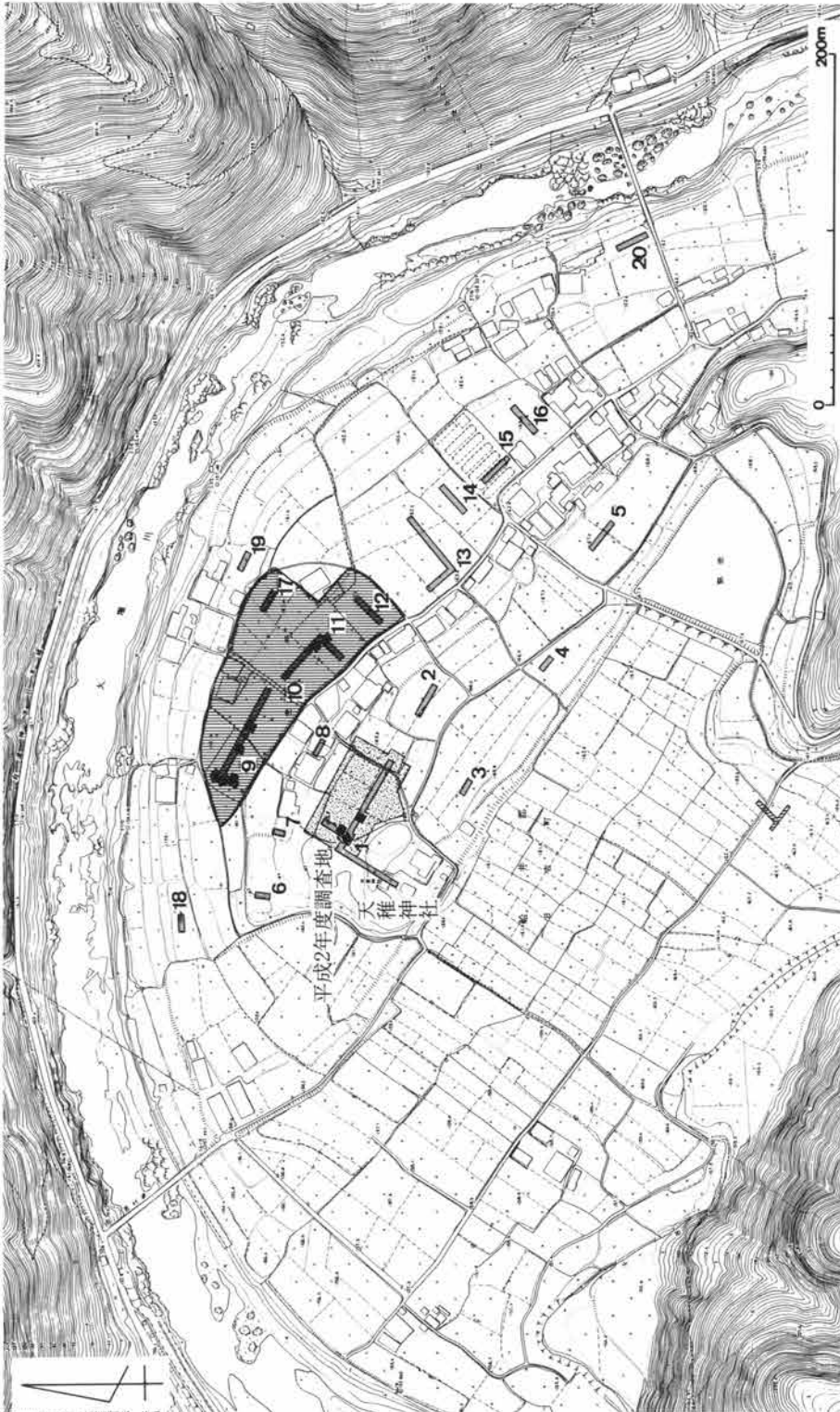
昭和47年、「淀川水系における水資源開発基本計画」が公示され、日吉ダムの建設計画が明らかにされた。その後、水没地域には天若遺跡が存在することが明らかとなり<sup>(註2)</sup>、平成元年度から発掘調査を実施することとなった。

天若遺跡は、京都府船井郡日吉町天若小字森形ほかにあり、遺跡の範囲は旧世木林集落の地域にあたる。遺跡は、丹波山地を流れる桂川が形成した河岸段丘上に立地しており、調査地での標高は、162m程度を測る。天若遺跡の周辺地域での埋蔵文化財の分布密度は希薄であり、古代の状況は明らかではない地域であった。中世以後、文献史料に散見するようになるものの、史料が豊富となるのは近世以後である。

平成元年度の試掘調査は、約20,000㎡の調査対象地内に20か所のトレンチを設定した。この試掘調査で、天若遺跡が古墳時代から江戸時代まで断続的に形成された集落遺跡であることを確認した。平成2年度は、元年度試掘調査の1トレンチ周辺を約2,000㎡にわたって拡張した。調査の結果、竪穴式住居跡5棟、掘立柱建物跡6棟以上、井戸跡1基をはじめ土坑・ピットなどを多数検出した<sup>(註3)</sup>。

平成3年度は第3次調査として、元年度試掘調査の9～12トレンチ及び17トレンチ周辺を約6,900㎡にわたって拡張した。また、条里状の水田地割の残る地域についても、調査の可能な地点にトレンチを設け、調査を行った。

重機掘削は、平成3年4月15日から5月24日までのうちの21日間で行い、その後人力で掘削を行った。基本的な層位は、耕作土・床土・茶褐色土・黄褐色土・礫層の順であり、遺構は、ほぼ全域で耕作土・床土を除去した時点で現われた。ただし、茶褐色の存在しない部分も多かった。茶褐色土の存在する部分では、竪穴式住居跡の埋土も茶褐色に近い土色を呈しているため、明確に住居跡として判断できたのは黄褐色土地上面まで掘削した時点である。本来の住居跡は、茶褐色土層中から掘り込まれているものと思われる。調査の結果、竪穴式住居跡28棟をはじめ土坑・ピットなどを多数検出した。これら人力による掘削作業は、平成4年2月6日に終了した。写真撮影、測量・実測作業はその都度行い、平成4年2月7日にはすべての現地作業を終了し、撤収した。なお、平成3年11月1日に



第2図 調査トレンチ配置図  
■印；試掘調査時検出竪穴式住居跡

現地説明会を実施している。

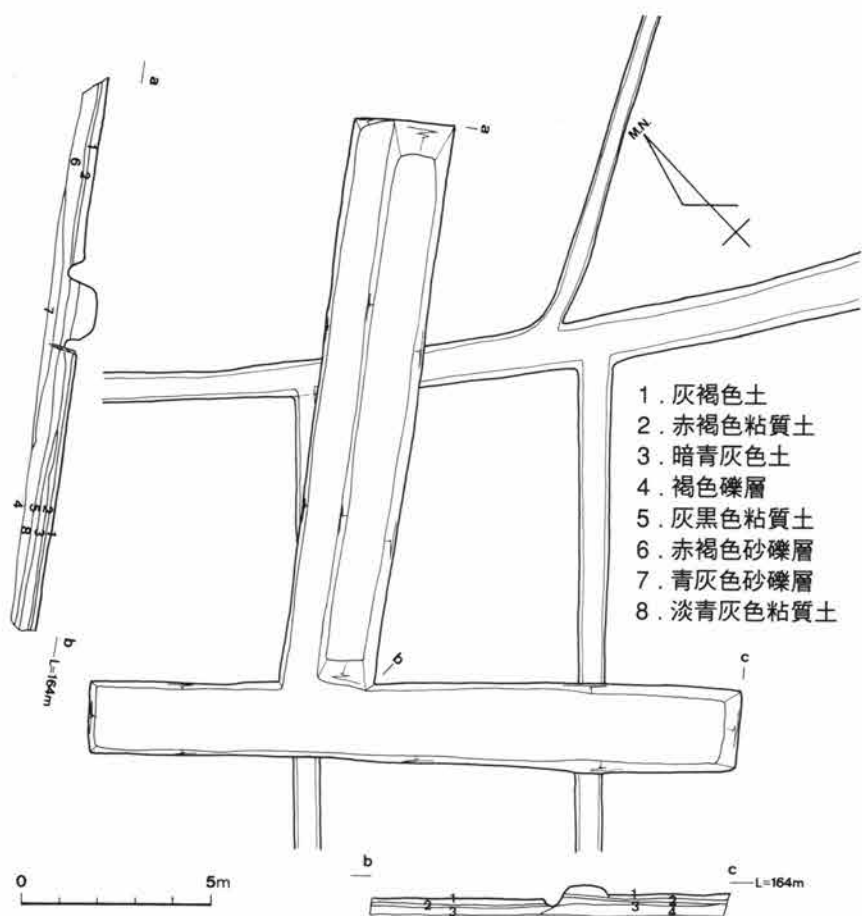
また、今回の調査地の地区割は、1 a 杭を起点とした任意の5m方眼を用いた。ラインの名称は、縦軸に算用数字を、横軸にアルファベットを付した。地区名称は、東側交点を地区名とした。なお、31 d 杭の座標値は、 $X = -95,029.523$ ・ $Y = -42,172.600$ である。

(三好博喜)

### 3. 条里状水田地割の調査

今年度、調査地からはほぼ280m南方に「T」字形のトレンチを設定した。おもに条里地割の遺存状況を調べるために、重機によって表土を剥いだ後に精査を行ったが、明確な条里地割の遺構を検出するには至らなかった。遺物の包含層も認められず、二枚の耕作土層の下層には青灰色の粘質土や砂礫層が堆積していた(第3図)。

(野島 永)



第3図 条里状水田地割調査トレンチ平面図及び断面図

付表1 検出竪穴式住居跡規模一覧表

遺構番号	形状	規模			竈			主柱穴	施設	備考
		長辺	短辺	深さ	方向	位置	構造			
SH 9101	方形	5.5	4.9	0.1	—	—	—	4		大半攪乱 一部トレンチ外
SH 9102	方形	2.8	2.6	0.2	南東	南寄り	焚口に立石	不明		東側壁不明
SH 9103	方形	5	—	0.2	—	—	—	4		西側攪乱
SH 9104	方形	4m程度		0.1	北東	中央付近	焼土のみ	不明		北半部不明
SH 9105	不明	—	—		北西	中央付近	焼土のみ	4	住居内土坑	全体削平
SH 9106	方形	7.5	6.8	0.2	北東	中央付近	焚口に立石 支脚に置石	4	住居内土坑 部分的に周壁溝	北東壁中央部に2m× 0.5mの張り出し
SH 9111	方形	5	5	0.3	北西	中央付近	焚口に立石 支脚に置石	4		
SH 9112	方形	4m程度		0.3	北東	中央付近	支脚に置石	4	住居内土坑	
SH 9113	方形	5.8	4.7	0.2	北	中央付近	支脚に置石	不明		S H9115と重複 S H9115に後続
SH 9114	方形	3.8	3.4	0.1	北西	中央付近	支脚に置石	4		
SH 9115	方形	3.8	3.2	0.2	北東	中央付近	支脚に置石	不明		S H9113と重複 S H9113に先行
SH 9116	方形	7.1	6.5	0.3	北西	中央付近	焼土のみ	4	住居内土坑	
SH 9117	方形	3.9	3.7	0.2	—	—	—	4		南西側攪乱
SH 9118	方形	6.3	5.6	0.2	北東	中央付近	支脚に置石	不明	住居内土坑	
SH 9119	方形	4	3.7	0.1	北西	中央付近	焼土のみ	不明		
SH 9120	方形	4.5	4.4	0.1	北西	中央付近	焼土のみ	4		
SH 9121	方形	8.2	8	0.4	北西	中央付近	焼土のみ	4	住居内土坑	
SH 9122	方形	6	5.9	0.3	北西	中央付近	焼土のみ	4	住居内土坑	
SH 9123	方形	5.8	—	0.1	北西	中央付近	焼土のみ	4		南西側削平
SH 9124	方形	4.5	4.3	0.1	南東	北寄り	焼土のみ	不明		南西側削平
SH 9125	不整形方形	5.2	4.5	0.1	南東	中央付近	焼土のみ	不明		
SH 9126	不整形方形	5	4.2	0.1	北西	中央付近	焼土のみ	4		
SH 9127	方形	6.9	6.6	0.2	西	中央付近	支脚に置石	4		
SH 9128	方形	6.8	6.3	0.2	西	中央付近	支脚に置石	不明		一部攪乱 一部トレンチ外
SH 9130	方形	4.5	4.1	0.2	北西	中央付近	焚口に立石 支脚に置石	4	住居内土坑	
SH 9131	方形	4.5	—	0.2	—	—	—	不明	住居内土坑	大半トレンチ外
SH 9140	方形	5.2	4.5	0.5	北東	中央付近	支脚に置石	4	住居内土坑	
SH 9141	方形	未	掘		北西	中央付近		未	掘	

#### 4. 平成3年度検出遺構

今回検出した遺構には竪穴式住居跡28棟(付表1)をはじめ掘立柱建物跡・土坑・柱穴などがある(第4図)。竪穴式住居跡のうちSH9141は輪郭を検出をした段階である。

竪穴式住居跡は、竈をもつものがほとんどである。竈は、良好な状態では検出できた例はごくわずかで、大半は焼土を検出しただけである。竈には立石を設けたものや、支脚として川原石を置いたものが数例ある。焚口部の立石は、SH9102やSH9106・SH9111のようにチャート系の石材2石を並立させるものや、SH9130のように川原石2石を並立させるものがある。チャート系の石材2石を用いるものは、SH9102のように板状の石材を「ハ」の字状に配置したものや、SH9106やSH9111のように直方体の石材を並置したものがある。竈内の支脚には、SH9106やSH9111・SH9114・SH9127のようにチャート系の石材を置いたものや、SH9112やSH9113・SH9115・SH9118・SH9128・SH9130・SH9140のように川原石を置いたものがある。

重複する竪穴式住居跡にはSH9113とSH9115とがある。両者の前後関係は、SH9115がある程度埋まってからSH9113が造られたものと考えられる。このことは、SH9113の竈と考えられる焼土がSH9115との境界上に存在するにもかかわらず、SH9115によって削り取られていないことから裏付けられる。

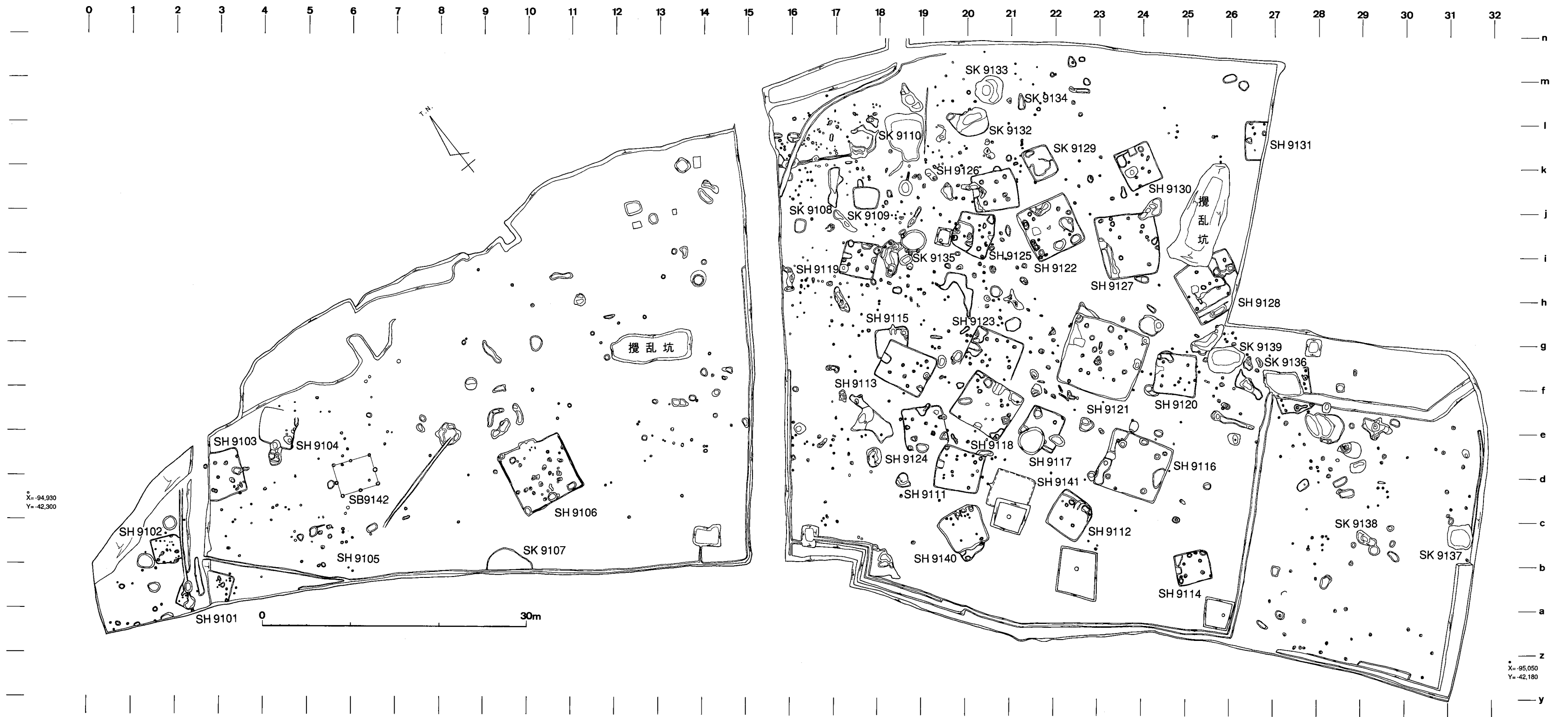
SH9115の竈は、崩壊した壁体も遺存しており、支脚として用いられたと考えられる川原石や煙出し部も検出できた。壁体はよく焼け締まっている。他の竈をもつと考えられる住居跡で、壁体がよく焼け締まった竈もしくは崩壊した竈の壁体が遺存する例はない。竈の使用頻度の差によるものか、竈の廃棄の際の行為に係わるものか、もしくは、移動式の竈を使用していたのか、問題を残す点である。

SH9105は、6c地区付近で検出した削平された竪穴式住居跡である。造り付けの竈の痕跡と思われる焼土があり、焼土の北側では住居跡の北側隅に位置すると考えられる部分に土坑があり、支柱穴になると思われる柱穴4本を検出した。このため、規模などは全く確認できなかったものの、北西側壁中央部に造り付けの竈をもつ方形の竪穴式住居跡と推定した。北側隅の土坑内からは須恵器の杯身が出土している。

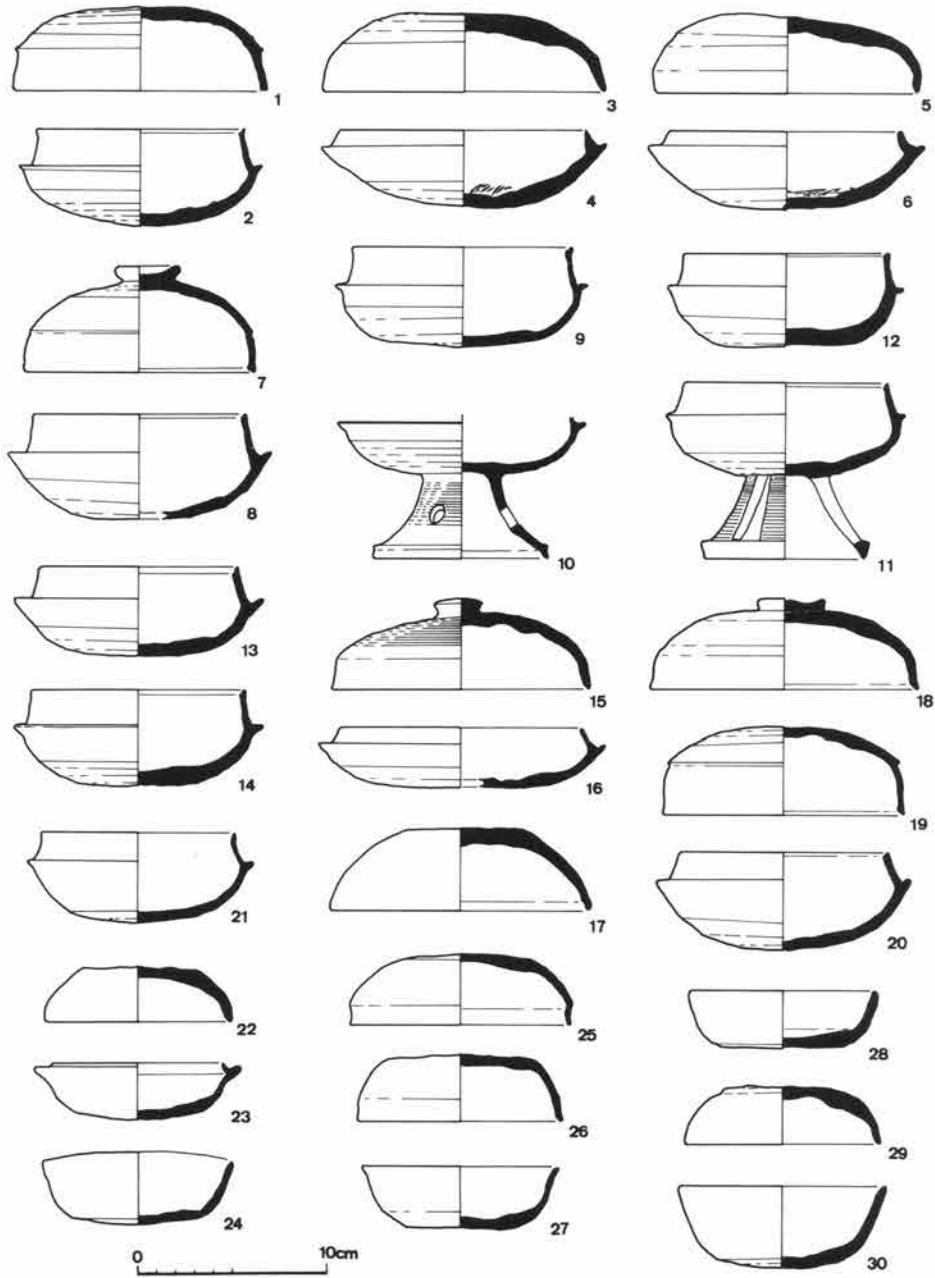
土坑は、各所で検出しているが、時期を特定できるものは少ない。

21m地区で検出した土坑SK9133は、直径約1.5m・深さ約1.1mを測る比較的大型の土坑であり、上層から縄文時代後期の土器片が数点出土した。また、20g地区で検出した20g-pit1は、長径1.5m×短辺0.8m・深さ0.7mを測る土坑で、縄文時代後期の土器片が20数点出土した。なお、包含層からも数点の縄文時代後期の土器片が出土している。

柱穴のうち建物跡を復原できたものは、今のところ6d杭付近地区で検出した1棟だけ



第4図 検出遺構平面実測図



第5図 出土遺物実測図(須恵器)

- |               |             |               |               |
|---------------|-------------|---------------|---------------|
| 1・2.S H9122   | 3・4.S H9117 | 5・6.S H9128   | 7・8.S H9113   |
| 9～11.S H9121  | 12.S H9131  | 13・14.S H9112 | 15・16.S H9116 |
| 17～20.S H9118 | 21.S H9130  | 22～24.S H9104 | 25.S H9102    |
| 26・27.S H9124 | 28.S H9101  | 29.S H9106    | 30.S H9105    |

である。2間(3.6m)×2間(4.3m)の建物跡で、柱間寸法は、梁間1.98m(約6尺)・1.65m(約5尺)、桁行2.15m(約6.5尺)を測る。

(三好博喜)

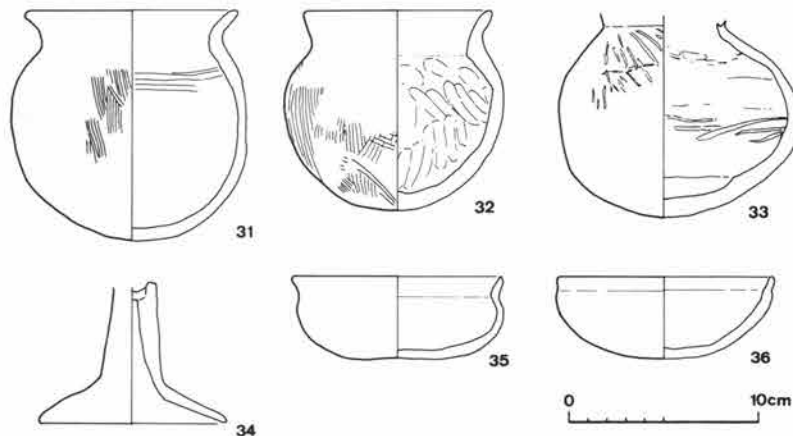
## 5. 出土遺物

第3次調査での出土遺物の総量は、整理箱19箱程度である。ほとんどが古墳時代の土師器と須恵器とである。ここでは、整理の進んだ住居跡出土の一部の遺物(第5～7図)について記述し、詳細については最終年度に改めて報告を行う予定である。

S H9101出土遺物(第5図28) 28は、須恵器の杯蓋である。復原口径9.8cm・器高3.1cmを測る。端部は丸くおさめ、天井部はヘラ切り痕を明瞭に残す。内外面ともにナデ調整を施している。外面には自然釉がかかっている。

S H9102出土遺物(第5図25) 25は、須恵器の杯蓋である。口径12.2cm・器高3.6cmを測る。口縁端部にやや焼け歪みを生じている。口縁端部は、薄く尖り気味におさめる。口縁に沿って、指頭で強く押さえて鈍い段をつくり出している。内外面ともていねいにナデ調整されている。焼成は堅緻である。

S H9104出土遺物(第5図22～24) 22は、口径10cm・器高2.9cmを測る須恵器の杯蓋である。全体に粗雑な作りである。外面のケズリによる稜線は不明瞭である。内面はナデている。23は、焼け歪みが生じている須恵器の杯身である。口径9cm・器高3.1cmを測る。底部から緩やかに立ち上がり、底部から2/3ほどの部分で「く」字状に屈曲し外反する。



第6図 出土遺物実測図(土師器)

31. S H9112    32・33. S H9128    34. S H9106    35. S H9112    36. S H9118

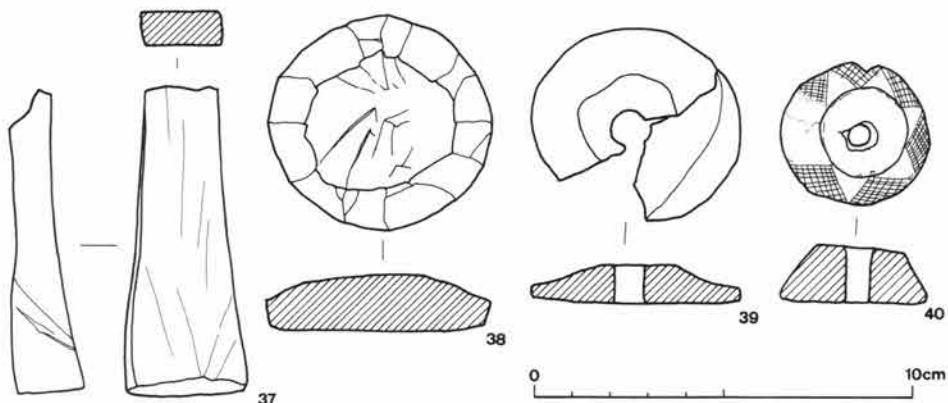


受け部は折り返しにより、内傾するわずかな立ち上がりがつく。口縁端部は尖り気味におさめる。内外面ともナデにより仕上げられている。24は、須恵器の杯身あるいは盃と思われる個体である。最大口径10cm・器高3.8cmを測る。焼け歪みが激しく、楕円形を呈している。底部からほぼ真っ直ぐに立ち上がり端部を指で押さえてやや外反させ、口縁端部は尖り気味におさめる。外面のケズリは不明瞭でケズリののちナデている。内面もロクロナデを施しているが、見込み部分のみロクロを静止し直線的にナデている。

S H9105出土遺物(第5図30) 30は、須恵器の杯身である。口径10.4cm・器高4.3cmを測る。底部からやや内傾しつつ立ち上がり、端部は尖り気味におさめる。外面はケズリののちナデて仕上げる。内面もナデ調整を施す。全体に作りは粗雑であり、焼成もやや甘い。

S H9106出土遺物(第5図29・第6図34) 34は、底径10cm・器高7.6cmを測る土師器の高杯脚部である。杯部と脚部を別に作り、接合は粘土の充填によると思われる。器面は荒れており、調整は不明である。29は、口径10.4cm・器高3.1cmを測る須恵器の杯蓋である。外面はケズリののちナデ、内面はナデで仕上げている。肩部には円形の打撃痕が残る。他に、土師器の手づくねの小型壺がある。

S H9112出土遺物(第5図13・14、第6図31・35) 35は、口径11cm・器高4.5cmを測る土師器の杯である。底部から緩やかに立ち上がり、やや内傾させ、しぼり込んだのち、「く」字状に外反する。器面調整は、表面が剝落しているため不明である。底部中央は指頭分だけわずかに盛り上がる。31は、口径10.8cm・器高11.2cmを測る土師器の甕である。体部は球形を呈し、中央付近に最大径をもつ。外面はハケ調整、内面はナデを施す。13は、口径11.1cm・器高4.7cmを測る須恵器の杯身である。外面はヘラ削りをし、受け部はやや上方を向く。立ち上がりは直線的に内傾し、端部は尖り気味におさめる。端部内面に一条



第7図 出土遺物実測図(石製品)

37. S H9118 38・39. S H9122 40. S H9116

の沈線がめぐる。内面はナデにより仕上げる。14は、外面のケズリによる稜線が不明瞭であり、受け部がほぼ水平につく須恵器の杯身である。

S H9113出土遺物(第5図7・8) 8は、口径11.1cm・器高5.7cmを測る須恵器の杯身である。底部から受け部までケズリによる明瞭な稜線が残る。立ち上がりをやや内傾させ、端部内面を押さえることにより尖り気味におさめている。内面はていねいなナデ仕上げである。底部にはヘラ記号が刻まれている。7は、中央部が窪んだ扁平なつまみがつく有蓋高杯の杯蓋である。肩部にヘラ状工具による凹線を施し、ケズリとナデとを区分している。端部内面には凹線をめぐらせている。

S H9116出土遺物(第5図15・16、第7図40) 15は、有蓋高杯の杯蓋である。口径は17.2cm、器高は4.9cmを測る。天井部には扁平なつまみが付く。外面は天井部から肩部にかけてカキ目がめぐる。内面はナデにより仕上げている。比較的ていねいな作りで、焼成も堅緻である。16は、復原口径12.6cm・器高3.2cmを測り、口径の割りに器高の低い扁平な感じの須恵器の杯身である。受け部の幅は狭く、立ち上がりもかなり内傾する。内外面ともナデ調整を施す。また、紡錘車が1点(40)出土している。

S H9117出土遺物(第5図3・4) 3は、須恵器の杯蓋で、口径15cm・器高4.2cmを測る。4は、須恵器の杯身で、口径13cm・器高4.2cmを測る。杯蓋・杯身とも外面はケズリ、内面はナデにより仕上げている。やや焼成不良なため内面は暗紫色を呈している。

S H9118出土遺物(第5図17~20、第6図36、第7図37) 36は口径11.3cm・器高4.4cmを測る土師器の杯である。口縁部を強くナデで、段を形成している。20は、口径11.2cm・器高5.2cmを測る須恵器の杯身である。19は、口径12cm・器高5cmを測る須恵器の杯蓋である。口縁端部内面に一条の沈線がめぐる。肩部には明瞭な段を設けている。頂部には直線的なヘラ記号が刻まれている。外面は部分的に自然釉がかかる。焼き歪みによる変形が著しい。17は、口径14cm・器高4.5cmを測る須恵器の杯身である。口縁端部内面に一条の沈線がめぐる。外面はヘラケズリののちナデ、内面はナデによる調整を施している。18は、扁平で中央部分が窪んだつまみが付く軟質の有蓋高杯の杯蓋である。これらの須恵器には時期幅が認められる。また、床面直上から砥石(37)が出土した。

S H9121出土遺物(第5図9~11) 9は、復原口径11.5cm・器高5.2cmを測る須恵器の杯身である。外面のケズリによる稜は不明瞭であるが、受け部の端部や立ち上がりの端部には凹線をめぐらせ、尖り気味におさめる。全体に器壁が薄く精緻な作りである。色調は外面が青紫色、内面が暗紫色を呈する。底部にはヘラ記号が刻まれている。10は、3方に円形透かしをもつ有蓋高杯である。杯部の上半を欠く。底径9cm・脚高4.5cmを測る。脚部には横方向のカキ目が施される。11は、3方に方形透かしをもつ有蓋高杯である。復原

口径10.9cm・底径8.2cm・器高9.3cmを測る。

S H9122出土遺物(第5図1・2、第7図38・39) 1は、口径13.4cm・器高4.4cmを測る須恵器の杯蓋である。外面は明瞭なケズリによる稜線を残す。内面は口縁部から天井部に向けてナデが施される。口唇部には凹線がめぐっている。2は、口径11cm・器高5.2cmを測る須恵器の杯身である。立ち上がり端部外面はやや不明瞭な凹線、内面も凹線をめぐらす。また、住居跡内土坑から紡錘車の未製品(38)や破損品(39)が出土している。

S H9124出土遺物(第5図26・27) 27は、須恵器杯身である。口径10.2cm・器高3.3cmを測る。底部からやや内湾しながら立ち上がり、端部を尖り気味におさめる。内外面ともにナデにより仕上げている。26は、杯蓋として扱う。口径10.6cm・器高3.5cmを測る。軟質の須恵器である。

S H9128出土遺物(第5図5・6、第6図32・33) 32・33は、体部中央部付近に最大径をもつ土師器の小型甕である。32は、口径9.7cm・器高10.6cmを測る。球形に近い体部に「く」字状に折れる口縁が付く。外面に不整方向のハケ調整を施す。内面はナデ仕上げする。33は、体部中央部付近に最大径をもつ土師器の小型壺である。頸部径6.4cm・残存器高10.3cmを測る。口縁部を欠くが、球形に近い体部に「く」字状に折れる口縁が付くと思われる。外面はヘラミガキを施すようである。5は、須恵器の杯蓋である。口径13.8cm・器高14.1cmを測る。外面はヘラケズリののち全体をナデている。内面はナデ調整である。6は、須恵器の杯身である。口径12cm・器高4.3cmを測る。立ち上がりは短く、内傾する。

S H9130出土遺物(第5図21) 21は、口径10.2cm・器高4.7cmを測る須恵器の杯身である。外面は底部から約1/2をヘラケズリし、受け部までをナデている。受け部端部はやや尖り気味におさめる。立ち上がりは内傾し、端部を丸くおさめる。内面はナデを施す。

S H9131出土遺物(第5図12) 12は、口径10.8cm・器高4.8cmを測る須恵器の杯身である。体部をかなり厚手に仕上げている。外面はヘラケズリ、内面はナデによる調整である。口縁端部内面に沈線がめぐる。

(柴 暁彦)

## 6. ま と め

今回の調査では、古墳時代後期の居住区域を面的に確認することができた。

古墳時代後期の集落を確認したことから、天若遺跡が丹波山地の谷間に位置するにもかかわらず、この地域の開発が比較的早くから行われていたことを確かめた。大堰川の最上流地域の周山盆地地域は、遅くとも弥生時代には開発が行われていたことが知られている。天若遺跡は、この周山盆地と亀岡盆地とを繋ぐ交通の要衝にあたっていたと考えられる。

縄文時代の土坑を検出し、土器片が出土したことからも、付近で住居跡などの遺構が検出される可能性が高くなった。試掘調査や今までの調査で縄文時代の遺構・遺物が検出されていないことからすれば、大規模な集落跡ではなく、キャンプ・サイトの遺跡と予想される。また、遺物のみられない土坑の中には、ピットをもつものがあり、縄文時代の落とし穴となる可能性がある。

これまでに検出した古墳時代の竪穴式住居跡は33棟にのぼる。これらの住居跡は、出土遺物からみて、6世紀初頭から7世紀半ば頃まで間断なく数棟ずつの単位で存在していたことが予測される。住居跡の規模をみると、群を抜いて大きなものが数棟存在している。一時期に一棟的なあり方らしく、詳細な検討が必要であろう。今後の調査により、竪穴式住居跡はさらに増える可能性があり、一集落内における住居の変遷や居住域内での住居の構成などがある程度理解できそうである。

条里状地割を残す水田跡の調査は、期待した成果を挙げることができなかった。しかし、周囲の状況から判断すると、古墳時代以降主たる水田耕作地は、居住域の南側を流れる千谷川を利用した谷水田であったものと思われる。

これまでの調査で、縄文時代の土坑、6世紀から7世紀前半期にかけての竪穴式住居跡33棟、7世紀後半期の土坑、8世紀前半期の井戸跡、及び奈良時代から平安時代にかけてと思われる掘立柱建物跡数棟を検出した。また、遺物には、縄文時代の土器及び石器・石片や、弥生時代及び古墳時代前半期の石器、古墳時代の土師器・須恵器、中世の瓦器や陶器・磁器などがある。このことから古くから人々の営みがあり、古墳時代後期には集落が形成されていたことが確認できた。しかし、古代から中世にかけての時期の墓域や農耕域については不明な点が多い。今後の調査に期待したい。

(三好博喜)

注1 平成3年度調査参加者

橋本 稔・寺田昌文・浅井義久・中川美津枝・中川幸三・和田 豊・中川亀三・近藤久雄・俣野加代子・谷 春子・山本則子・上手安一・野瀬 弘・中野久子・松本久美子・山口春夫・土井正文・田村末雄・湯浅義雄・明田安男・広瀬辰次・広瀬作二・石橋愛子・山田きん子・西村寿子・村上政子・片山八重子・中川君代・平野すまゑ・山本祐樹・吉田 靖・吉田八重子・水谷幸子

注2 日吉ダム水没地区文化財等調査委員会『日吉ダム水没地区文化財調査報告書』 日吉町  
1988

注3 三好博喜・鍋田 勇「天若遺跡平成元・2年度発掘調査概要」(『京都府遺跡調査概報』第42冊 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 1991

## 2. 池尻遺跡発掘調査概要

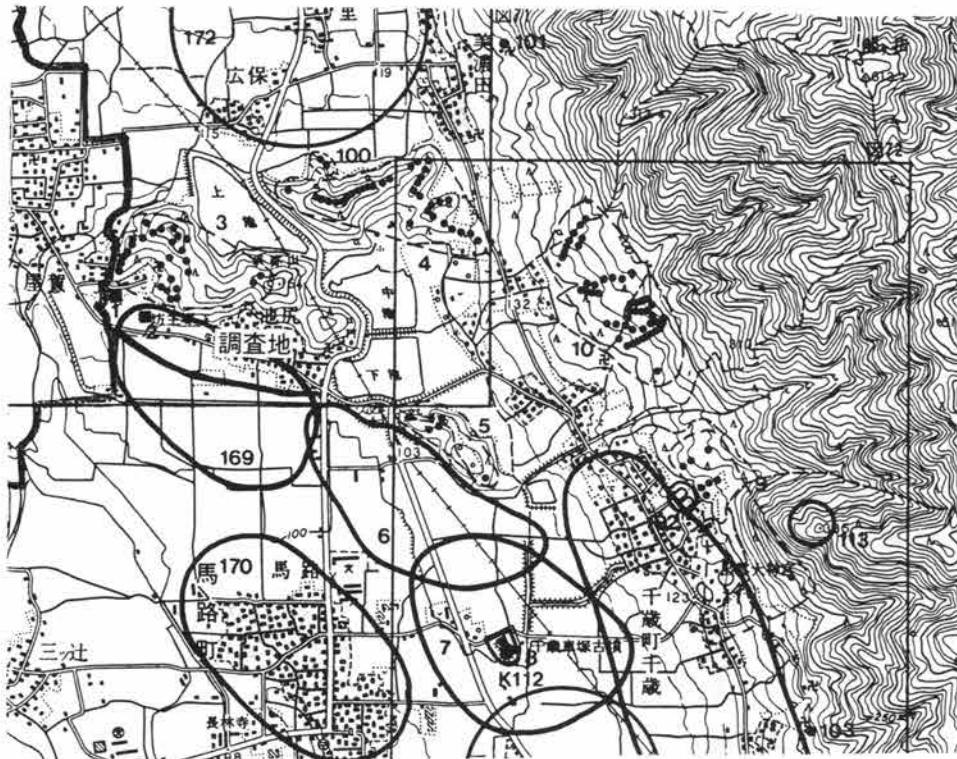
### 1. はじめに

池尻遺跡は、京都府亀岡市馬路町池尻に所在する集落遺跡である。東西750m・南北400mの範囲に土師器や須恵器の散布が認められ、周知の遺跡となっている。

今回、遺跡内で府道建設工事が計画されたため、当センターでは京都府土木建築部の依頼を受け、遺構確認のための試掘調査及び発掘調査を実施した。

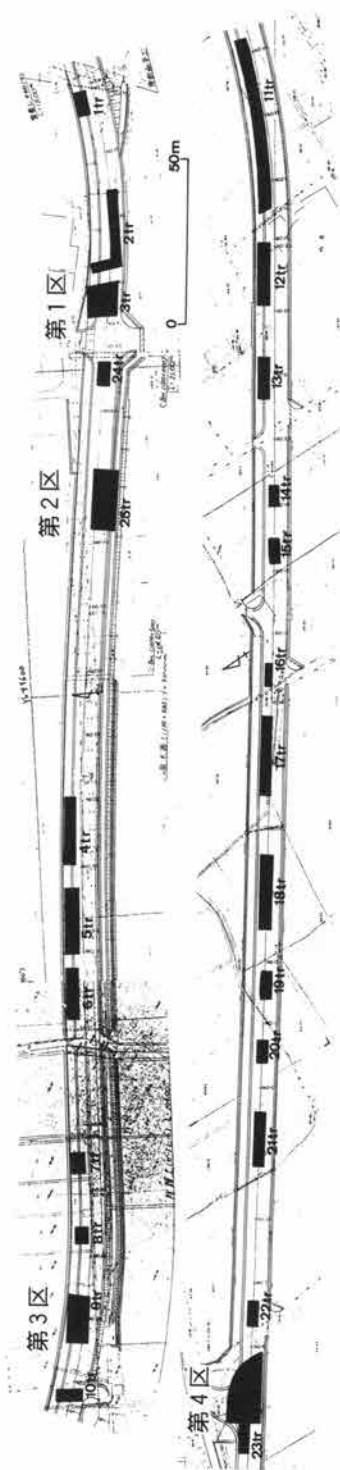
調査は、1991年8月19日に開始し、1992年2月27日に終了した。調査面積は約1,100m<sup>2</sup>である。

なお、発掘調査にあたり地元自治会役員、担当課職員の協力を得た。また、現地調査・整理作業に参加していただいた方々には多大な協力を得た。記して感謝の意を表します。



第8図 調査地位置図(1/25,000)

池尻遺跡:169    池尻古墳群:3    時塚遺跡:6    天神塚古墳:1    坊主塚古墳:2  
 稲葉山古墳群:5    平野古墳群:10    馬路遺跡:170



第9図 トレンチ配置図

## 2. 遺跡の位置と環境

池尻遺跡は、馬路町の北郊にある呉弥山の南裾に広がる段丘上に立地している。この段丘は、南面する標高100～101m前後の低位段丘で、日当たりもよく盆地を広く眺望できる。周辺には、集落遺跡や古墳など数多くの遺跡が分布している(第8図)。集落遺跡は、土師器・須恵器の散布地である馬路遺跡、弥生時代中期頃から始まる時塚遺跡や土師器・須恵器の散布地として知られる車塚遺跡、縄文土器や奈良時代の布目瓦が採集されている三日市遺跡、弥生時代から中世にかけての遺跡群である出雲遺跡などがある。古墳は、天神塚古墳・坊主塚古墳や千歳車塚古墳、池尻古墳群、美濃田古墳群・平野古墳群などが主なものである。天神塚古墳・坊主塚古墳は古墳時代中期後半の方墳である。坊主塚古墳は1956年に発掘調査され、四獣鏡・鉄刀・鉄剣・鉄鏃・甲冑などが出土している。千歳車塚古墳は中期末の前方後円墳で、この時期の首長の墓である。池尻古墳群は中期末の古墳群、美濃田古墳群・平野古墳群は横穴式石室を内部主体とする後期群集墳である。南東約3kmには丹波国分僧寺・尼寺がある。なお、池尻遺跡の西側には、丹波国府推定地の八木町屋賀地区がある。

## 3. 調査の経過

調査にあたってはまず、遺構の有無・遺物の包含状況を確認するため対象地内に25か所の試掘トレンチを設定し開掘した(第9図)。その結果、以下のような結果をえた。

第1・6～8・11・13～15・24トレンチ 遺構・遺物なし。

- 第2トレンチ 遺構は確認できなかったが、縄文時代晩期の土器細片が出土。
- 第3トレンチ 弥生時代後期頃の幅約60cm前後の水路状の遺構と落ち込みを確認。弥生土器細片出土。
- 第4・5・12トレンチ 時期不明の小規模な溝・土坑を確認。遺物なし。
- 第9トレンチ 奈良時代の土坑を確認。奈良時代の須恵器・土師器多数出土。
- 第10トレンチ 時期不明の柱穴を確認。遺物なし。
- 第17トレンチ 奈良時代の土坑・柱穴を確認。奈良時代の須恵器・土師器・鉄滓出土。
- 第18～21トレンチ 溝・柱穴を確認。奈良時代の須恵器・布目瓦出土。
- 第22トレンチ 幅約3mのほぼ真北の溝。奈良～平安時代の須恵器・布目瓦多数出土。
- 第23トレンチ 遺構なし。布目瓦出土。
- 第25トレンチ 弥生時代の土坑を確認。弥生土器出土。

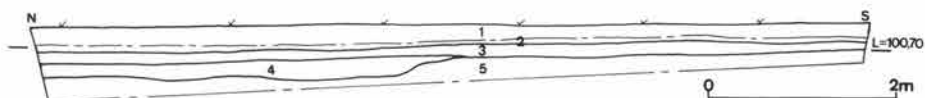
試掘調査の結果、第3・第25トレンチ周辺には弥生時代の遺構・遺物、第9トレンチ周辺には奈良時代初頭の遺構・遺物、第17～22トレンチには奈良時代初頭～平安時代の遺構・遺物が広がることが確認された。なかでも、第22トレンチで検出した溝からは奈良時代初頭から平安時代にかけての布目瓦が多数出土し、瓦葺き建物の存在が予想された。そのため、これらのトレンチの周辺を拡張して面的な発掘調査を実施することにした。対象地内に未買収地を含んでいるため、今年度は第3トレンチ(第1調査地区)・第25トレンチ(第2調査地区)、第9トレンチ(第3調査地区)、第23トレンチ周辺(第4調査地区)を対象として面的調査を実施した。なお、第17～22トレンチについては来年度以降に調査が計画されている。

#### 4. 調査概要

##### (1)第1調査地区の調査

層位(第10図) 上から耕作土(第1層)・床土(第2層)・灰色砂礫土(第3層)・黒色粘質土(第4層)・青灰色粘質土(第5層)の順に堆積している。青灰色粘質土は遺構のベースである。第4層の黒色粘質土はSX01の埋土である。

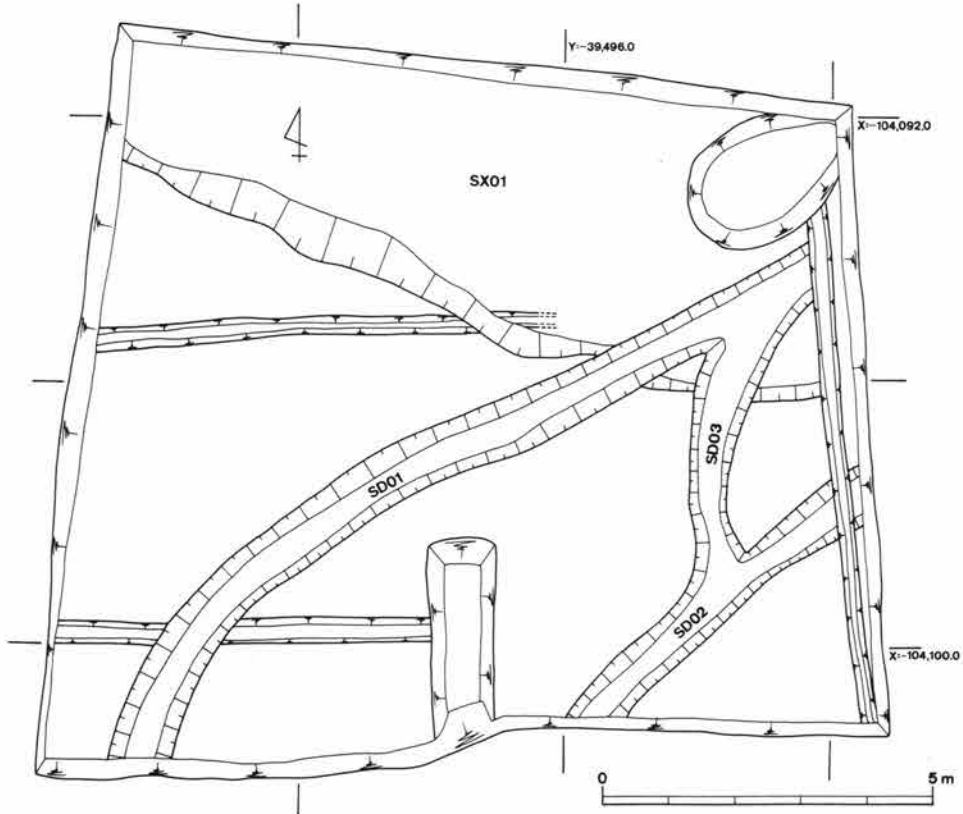
第3層の砂礫層は河川氾濫に伴う堆積層とみられる。遺構は、この層の堆積に伴って削



第10図 第1調査地区東壁断面図

1.耕作土 2.床土 3.灰色砂礫土 4.黒色粘質土 5.青灰色粘質土





第11図 第1調査地区平面実測図

平され残存状態はよくない。第1層上面から第5層までの深さは30～50cmである。

**検出遺構** 第5層上面で溝と溜り状の落ち込みを検出した(第11図)。

**S D 01** 幅約80cm・深さ約30cm・検出長約13mである。断面「U」字形の溝である。

S D 02との合流付近で弥生時代前期の壺破片が出土した。

**S D 02** 幅約70cm・深さ約30cm・検出長約5mである。断面「U」字形の溝である。

**S D 03** 幅50～70cm・深さ約30cm・長さ約3.5mである。断面「U」字形の溝である。

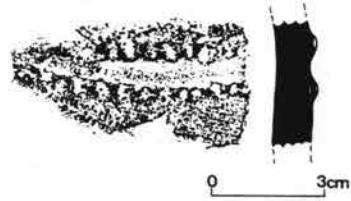
S D 01・02は、ほぼ平行で、南側が高く北側が低い(南端と北端の比高差は約30cm)。北流する溝である。S D 03は、S D 02から分岐してS D 01と合流する。切り合い関係は認められないので、同時に機能していたと考えられる。

**S X 01** 黒色粘質土を埋土とする落ち込みである。S D 01・03に切られており、これらの溝以前から存在していたと思われる。ただし、S D 01の北端はS X 01に流れこむようにして消滅しており、溝の機能した時期には共存していたと考えられる。埋土中から壺体部破片が出土した。S D 01との関係から、この遺構は、弥生時代前期以前のものであることがわかる。



## 出土遺物

S D01(第12図) 広口壺の頸部破片である。二条以上の貼付凸帯を巡らす。凸帯には篋による刻みがある。弥生時代前期新段階のものである。



## (2)第2調査地区の調査

第12図 S D01出土遺物実測図

**層位(第13図)** この地区の層位は、上から耕作土(第1層)、床土(第2層)、灰色砂礫層(第3層)、黒色粘質土(第4層)、青灰色粘質土(第5層)であり、第1拡張地区と同じである。遺構は黒色粘質土から掘り込まれており、この層が遺物包含層になっている。黒色粘質土は直上層の砂礫土によって大きく削平されているので、遺構の残りはよくない。

**検出遺構** この地区では弥生時代前期の溝・土坑などを検出した(第14図)。

弥生時代前期の遺物が出土した遺構にはS K01・S D01がある。S K02・03は遺物がなく時期が明らかではないが、土層堆積状況や埋土の状況から前期に属すると考えられる。

S K01 隅丸方形の土坑で、主軸はほぼ東西である。長軸約2.65m・短軸約1.5m、検出面からの深さ約10cmを測る。第4層と同じ黒色粘質土を埋土としている。土坑底面付近で土器が出土した。土器には壺と甕があり、土坑西寄りの地点で甕、東寄りの地点で壺が出土した。土器は破片となって出土したが、甕は完形に近く、現位置に置かれたものが破損したものと考えられる状況であった。この土坑には木棺痕跡などはみられなかったが、定型的な形態を持つこと、土器が供献されたような状況で出土していることなどから、墓坑である可能性を指摘したい。

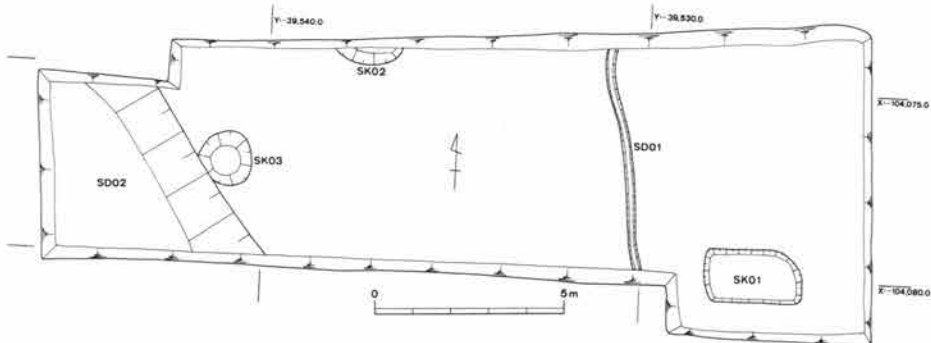


第13図 第2調査地区東壁断面図

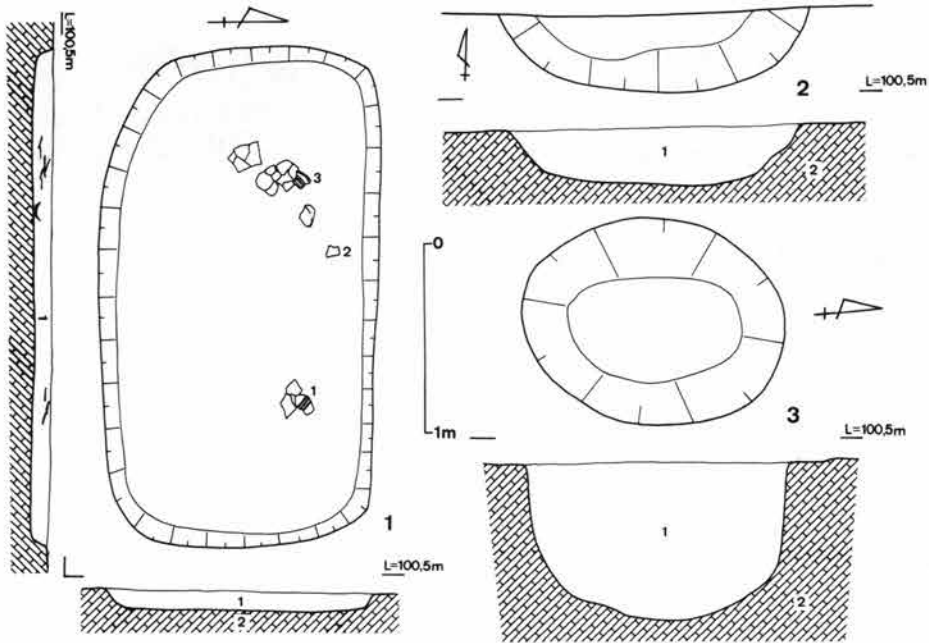
- 1.耕作土
- 2.床土
- 3.灰色砂礫層
- 4.黒色粘質土
- 5.青灰色粘質土

## S D01(第15図1)

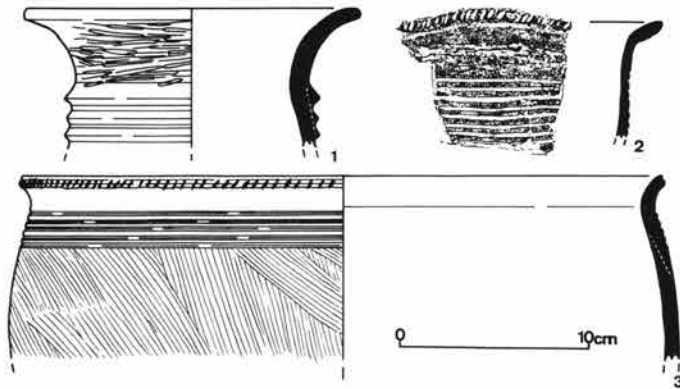
約6mを検出した。幅25～



第14図 第2調査地区平面実測図



第15図 第2調査地区検出土坑実測図  
1. S K01 2. S K02 3. S K03



第16図 S K01出土遺物実測図

30cm・深さ約20cmである。北側がやや深く、レベルも低い。壁面は垂直に近く底面も比較的平らである。弥生時代前期甕の細片が出土した。埋土は黒色粘質土である。

S K 02(第15図2)

部分的に確認した。長軸約1.6m・短軸約40cm、検出面からの深さ約30cmの長楕円形土坑である。埋土は黒色粘質土の単一層である。出土遺物はない。

S K 03(第15図3) 楕円形の土坑である。長軸約1.3m・短軸約1.1m、検出面からの深さ約80cmである。黒色粘質土中から掘り込まれており、湧水層である砂礫層を穿っている。埋土は黒色粘質土である。この遺構は素掘りの井戸と考えられる。

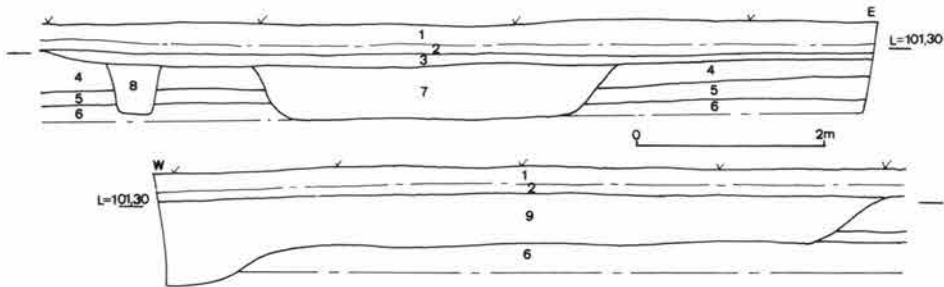
出土遺物

S K01(第16図1~3) 1は、広口壺形土器である。大きく開く口縁をもち、頸部に3条

以上の貼付凸帯をめぐる。凸帯の断面は三角形である。調整は、口縁部外面磨き、内面ナデである。口径17.7cmを測る。2・3は、如意形の口縁をもつ甕形土器である。いずれも口縁部端面に篋による刻み目、頸・胴部に沈線文が施されている。沈線は、2は8条、3は5条である。3は、体部外面刷毛目、内面ナデ調整、口径34.2cmを測る。これらの土器は、壺に断面三角形貼り付け凸帯が発達していること、甕の頸胴間の沈線が多条化していることなどから、弥生時代前期新段階に属するものと考えられる。

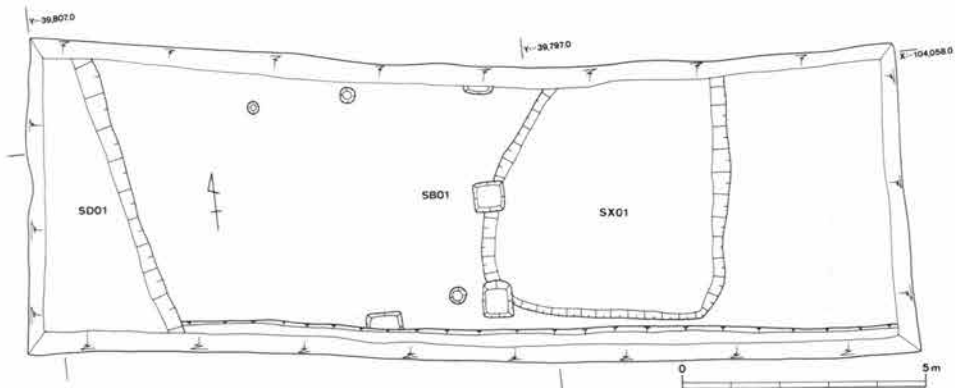
### (3)第3 拡張地区の調査

層位(第17図) 基本層位は、上から耕作土(第1層)、床土(第2層)、黄褐色粘砂土(第3層)、黒褐色土(第4層)、黒色粘質土(第5層)、黄色粘土(第6層)である。第6層が遺構のベースとなる無遺物層である。遺構(第7・8層)は第4層上面から掘り込まれている。第3層は河川氾濫に伴う堆積物とみられ、トレンチ西方で検出した旧河道(S D01)と関連する土層であろう。遺構上面はこの礫層によって削平されているようである。



第17図 第3調査地区北壁断面図

- |                 |           |                  |        |         |         |
|-----------------|-----------|------------------|--------|---------|---------|
| 1.耕作土           | 2.床土      | 3.黄褐色粘砂土         | 4.黒褐色土 | 5.黒色粘質土 | 6.黄色粘質土 |
| 7.茶褐色土(S X01埋土) | 8.S B01埋土 | 9.灰色砂礫土(S D01埋土) |        |         |         |



第18図 第3調査地区平面実測図

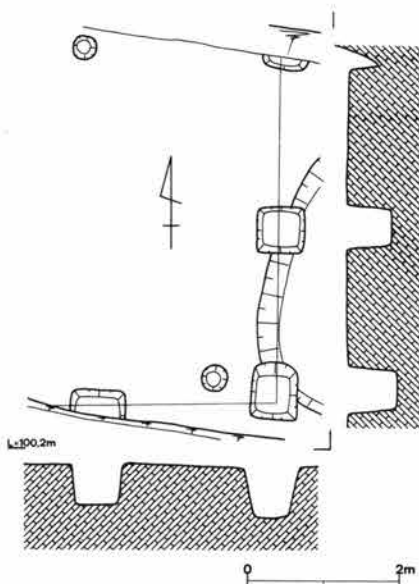
**検出遺構** 竪穴状の性格不明の土坑(S X01)、掘立柱建物跡(S B01)、自然流路(S D01)を検出した(第18図)。

**S B01** S X01を切って造られている。東西1間×南北2間分を検出した(第19図)。建物跡はさらに北側にのびると思われる。柱穴は一辺約60~70cmの方形で、検出面からの深さは40~80cmである。埋土は黄褐色粘土ブロック混じりの黒色粘質土である。柱痕跡は確認できなかった。柱穴内から須恵器破片(長頸瓶底部・体部)が出土している。

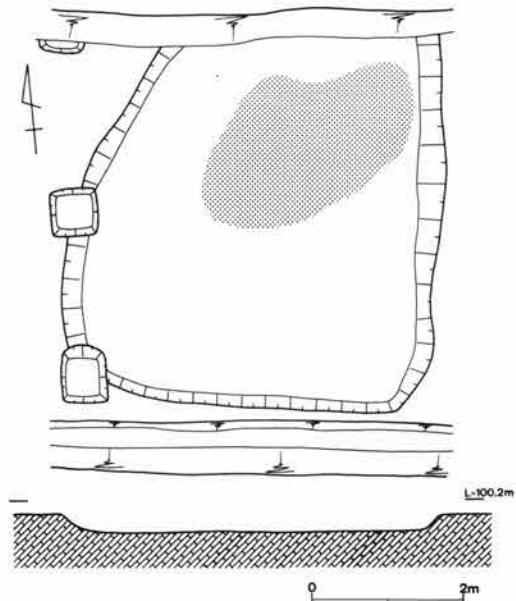
**S X01** 竪穴状の不定形土坑である(第20図)。検出長約5m×5mである。南辺と東辺は直線的であるが、西辺は東に向かってすぼまる。この遺構はトレンチのさらに北側にのびる。この遺構からは須恵器を中心とする多数の遺物が一括して出土した。

遺物は、遺構底から20~30cmのレベルに集中し、やや北東寄りの地点を中心に分布していた。出土遺物には須恵器(杯身・蓋、長頸瓶、埴、甕、蓋形土器)、土師器(皿、高杯、甕)、鉄製品(刀子、不明鉄器)、石製品(盃状穴、不明磨製石製品)など多様であるが、大半が長頸瓶で占められ、その他の器種はそれぞれ数片である。

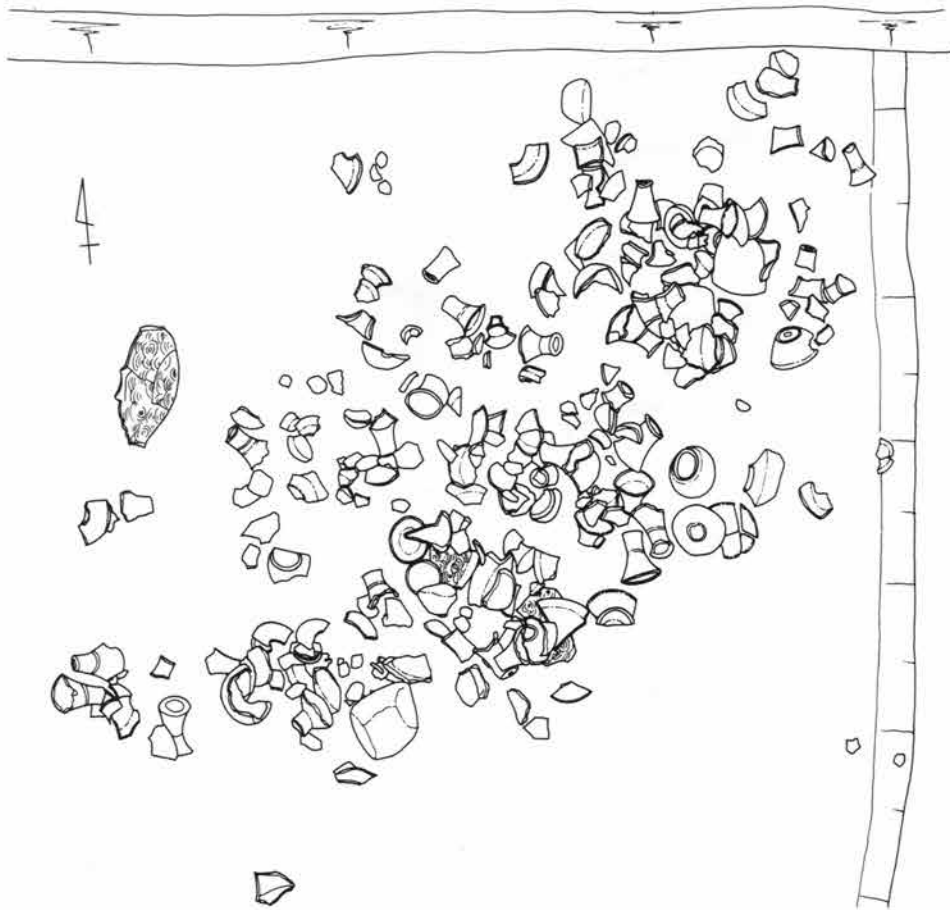
長頸瓶は、完形に復原できるものが多く、一括して投棄された状況がうかがえる(第21図)。長頸瓶はすべて破片となって出土しており、ほとんどが頸部と体部の接合部分で破損していた。その接合状況を検討したところ、頸部と体部破片は必ずしも近接してあるわけではなく、多くの場合不規則に散在していることが確認された。このことは、完形あるいはそれに近い固体がそのまま投棄され土圧で壊れたのではなく、すでに破損した固体を



第19図 S B01実測図



第20図 S X01実測図



第21図 S X 01遺物出土状況

任意に廃棄したか、ほぼ完形の固体を破砕・一括投棄した可能性を示唆している。

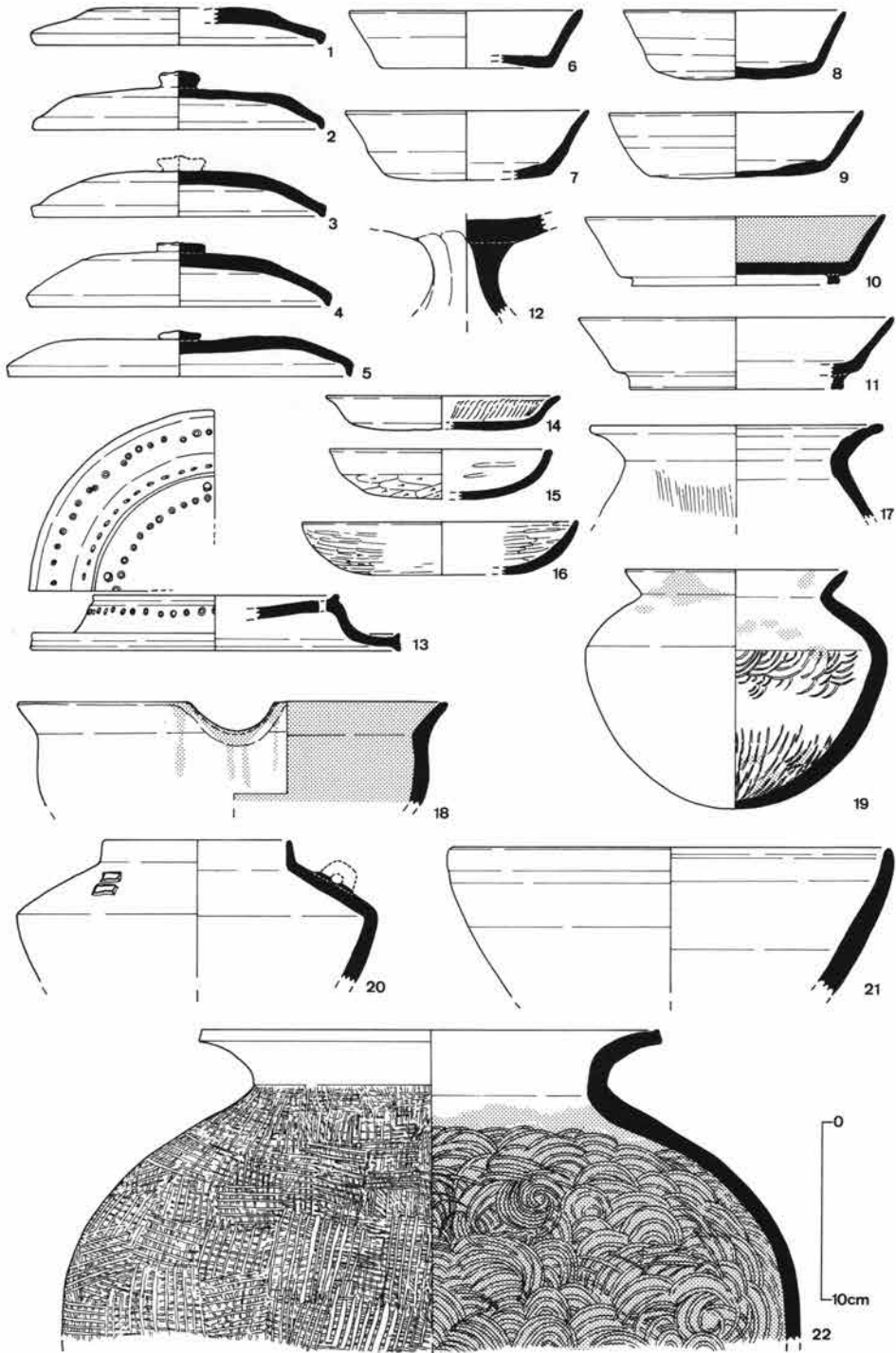
須恵器杯身・甕・長頸瓶・土師器鉢には内面に漆の付着が認められた。長頸瓶はそのほとんどに漆が付着しており、破断面や器体外面に付着するものも少なくない。

#### 出土遺物

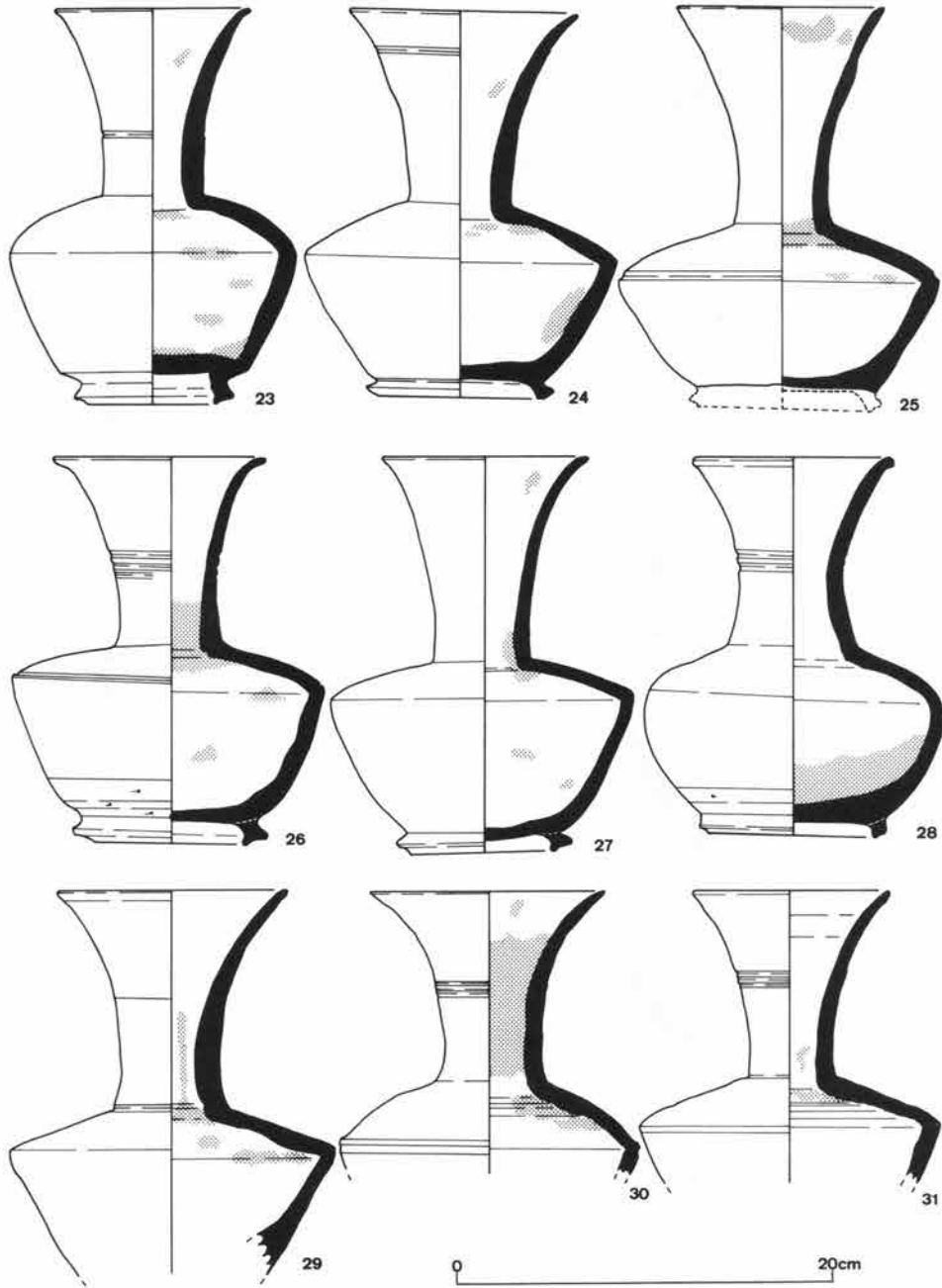
① S X 01(第22～25図) 1～5は、須恵器杯蓋である。口縁が屈曲するもの(1・2)と丸く終わるもの(3～5)とがある。4は、内面に墨痕があり、転用硯とみられる。口径17.2cm・器高3.6cmを測る。

6～11は、須恵器杯身である。6～9は高台のないもの、10・11は高台を有するものである。9は口径14.4cm・器高3.4cm、10は口径16.8cm・器高3.8cmを測る。内面に漆が付着するものが認められる。

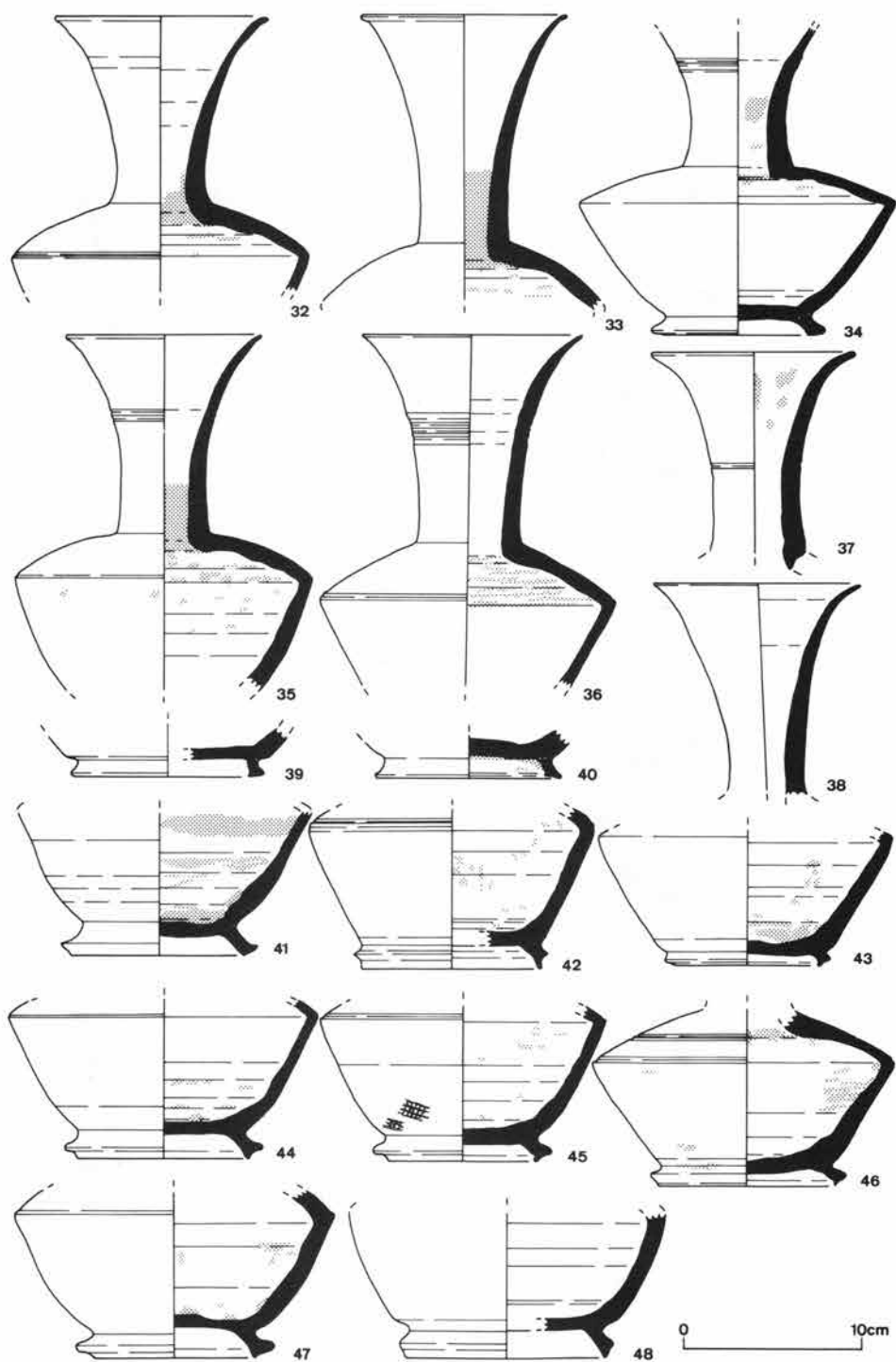
12は、土師器高杯である。脚部に面をもつ。赤褐色を呈し、胎土は精良である。杯部内面に篋磨きを施す。



第22図 S X01出土遺物実測図(1) (網は漆)

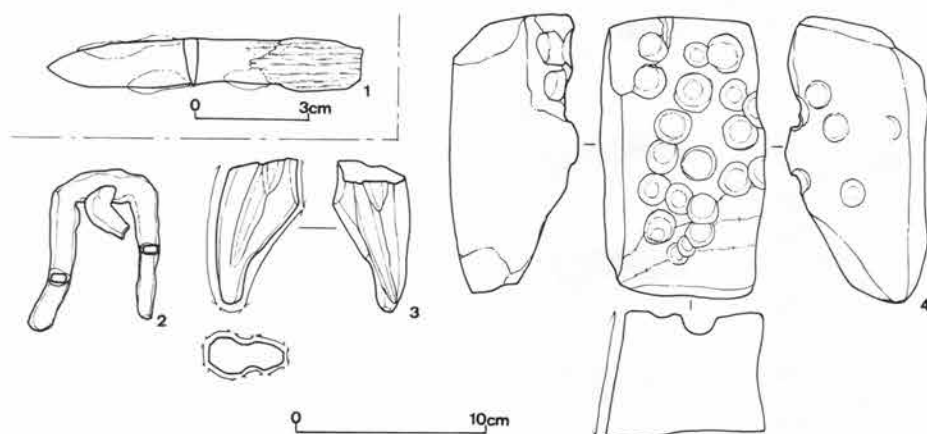


第23図 S X01出土遺物実測図(2) (網は漆)



第24図 S X01出土遺物実測図(3) (網は漆)





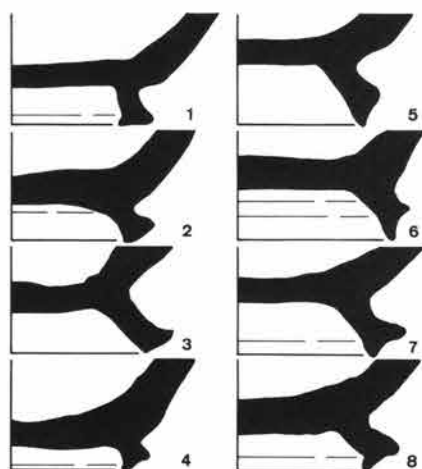
第25図 S X01出土遺物実測図(4)

13は、須恵器蓋である。天井部に環状凸帯がめぐる。天井上面・側縁・口縁上面に竹管による刺突文を各一列施している。天井には数か所に穿孔があり、天井部中央には宝珠つまみがあったと思われる。胎土精良、焼成堅緻である。壺の蓋だろう。口径約20.7cm・器高約3.1cmを測る。この種の須恵器蓋形土器は、生産遺跡では大阪府和泉市陶邑母第55号窯・64号窯・70号窯跡<sup>(注3)</sup>、京都府精華町煤谷川窯跡<sup>(注4)</sup>、消費地では京都府大原野南春日町遺跡<sup>(注5)</sup>・長岡京跡右京第363次等<sup>(注6)</sup>に出土例がある。これを模した土師器製品が京都府大宮町大田鼻28号横穴から出土している<sup>(注7)</sup>。いずれも8世紀初頭頃の遺物に伴出している。

14～16は、土師器皿である。内面に暗文がある。口径約13cmである。赤褐色を呈し、胎土精良である。15は、外面下半を筥削り後、筥磨き。16は、内外面に筥磨きを施す。15は、口径12.4cm・器高2.8cmである。

17は、土師器甕である。口縁がゆるやかに外反する。口縁内面に強い横ナデによる段がみられ、特徴的である。胎土は暗茶褐色を呈する。口径16.4cmである。この甕は、綾部市青野遺跡<sup>(注8)</sup>・綾中遺跡<sup>(注9)</sup>、大江町高川原遺跡<sup>(注10)</sup>、舞鶴市志高遺跡<sup>(注11)</sup>・桑飼上遺跡<sup>(注12)</sup>、宮津市荒木野遺跡<sup>(注13)</sup>、加悦町須代遺跡<sup>(注14)</sup>など丹波・丹後地域で多数確認されており、但馬にもみられる。7世紀中頃から8世紀中頃にかけて盛行するようである。口丹波地域では園部町町田遺跡<sup>(注15)</sup>・八木町八木嶋遺跡<sup>(注16)</sup>に出土例があるが散発的である。本例は、供伴遺物との関係で時期を明らかにできる資料として注意しておきたい。

18は、土師器鉢である。注口部がある。内面と注口部外面に漆が付着している。漆は内面に顕著で、注口部外面には流れ落ちたような状態がみられる。内面に漆痕跡がみられる。土師器には、漆を内面に塗布して防水性を高めた漆塗り土師器などがあるが、この場合、注口部の漆の付着状況からみて、漆容器として使われたものと考えられる。



第26図 S X 01出土長頸瓶の高台各種

19は、須恵器罎である。口縁部から体部内面にかけて微量であるが、漆の付着が認められた。口径12.6cm・器高13cmを測る。

20は、須恵器短頸壺である。肩部に耳をもつ。

21は、土師器鉢である。鉄鉢形を呈するもので、胎土は白色を呈し精良である。口径24.7cmを測る。

22は、須恵器甕である。内面に漆の付着が著しい。口径約52cm・残存高約37cmを測る。

23～31は、須恵器長頸瓶である。50個体以上が出土している。長頸瓶の大半には内面に漆の付着が認められる。長頸瓶には肩部が屈曲して稜をなすAタイプ(23～27・29～31)と肩部を丸く作るBタイプ(29)とがある。Aタイプには肩部に丸みをもつもの(23)、直線につくるもの(29)などがあるが、24～27などその中間のタイプが中心をなす。また、造りが大振りなもの、小振りなものがある。高台の断面形も各種認められる(第26図)。胎土は、砂粒の混入が目立つものから精良なものまで様々であり、画一的ではない。色調は灰白色～暗灰色系が主流である。複数の生産地から供給されたのだろう。肉眼観察によるかぎり陶邑窯跡群産は認められない。<sup>(注17)</sup>

長頸瓶の文様は沈線のみで、波状文等はみられない。沈線を頸部にのみ施すもの(23・24・28・29・34)、屈曲部のみに施すもの(25)、頸部と屈曲部の両者に施すもの(26・30・31・32・35・36)などがある。法量は、23が口径10.4cm・器高20.7cm、26が口径11.4cm・器高20.4cm、28が口径10.8cm・器高20.0cmを測る。

第25図1は、鉄製刀子である。全長8.3cm・幅1.2cmである。基部に木質が残る。

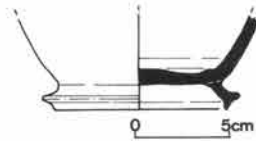
第25図2は、鏃状を呈する不明鉄製品である。断面方形である。

第25図3は、砂岩製の磨製石製品である。全面に研磨痕があり、両面に槌状の研磨面が作られている。砥石であろう。残存長8cm・厚さ1.9cmである。

第25図4は、砂岩製の不明石製品である。a面に研磨面があり、石皿を転用したものと思われる。折損面に回転研磨によってくぼみを穿っている。くぼみはb面に20個と顕著である。くぼみは切り合いをもち、深さはまちまちである。最も深いもので1.5cm、浅いもので約2mmを測る。c面は、b面形成後の折損面である。c面にもくぼみがみられるが浅く小さい。全長約15cm・幅約8cm・厚さ約6.5cmを測る。この石製品は盃状穴と呼ばれ

るものに類似しているが、用途は明らかでない。

②S B01(第27図) 長頸瓶の底部である。形態はS X 01出土長頸瓶に類似しており、同一時期のものであろう。



第27図 S B01出土遺物実測図

#### (4)第4 拡張地区

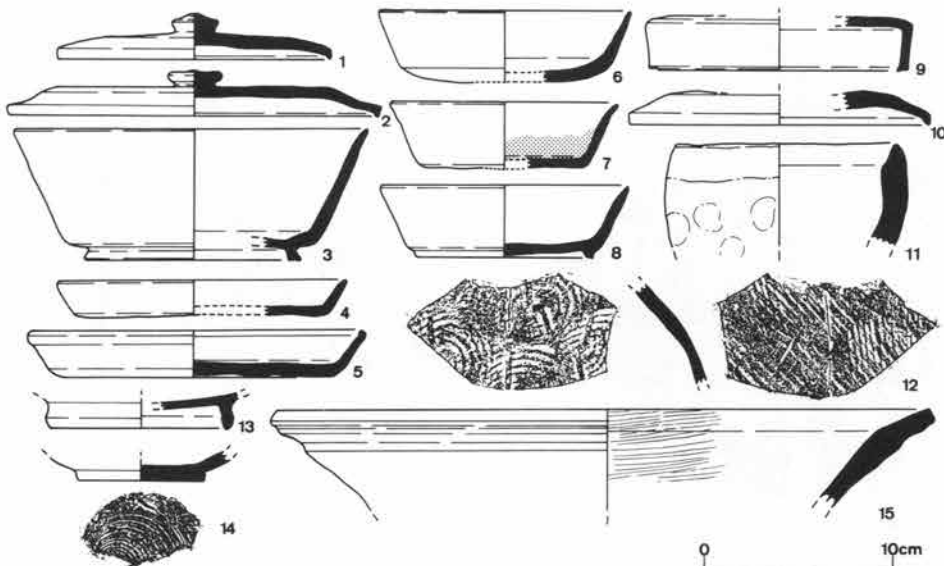
東に接するトレンチ(第22トレンチ)で白鳳時代～奈良時代の瓦・須恵器を多数含む溝を検出したため、遺構の広がりを確認する目的で設定した拡張地区である。

この地区は試掘で布目瓦などが出土しており、当初遺構の存在が予想された。しかし、掘削の結果は、自然流路と近年の攪乱土坑が検出されたのみで、遺構面は流路形成に伴って大きく削りとられていることが明らかになった。

耕作土中から須恵器蓋(第28図9・10)、布目瓦の細片が出土したのみである。

#### (5)各トレンチ出土遺物(第28～30図)

①土器 1・2・10は、須恵器杯身である。9は、須恵器壺蓋である。3・6・7・8は、須恵器杯身である。3は、高台が踏張るように外方に開き、口径約18.8cm・器高約7.8cmと大形である。7の内面には漆とみられる有機質の付着がみられる。4・5は、須恵器皿である。5は、端部を肥厚させている。11は、砲弾形の製塩土器である。橙褐色で、粗砂を多く含む。12は、須恵器甕の体部破片である。内面の当具痕跡には軸がみられ特徴的である。13



第28図 各トレンチ出土遺物実測図 (網は漆)

第2トレンチ:1~8・12 第4調査地区:9・10 第19トレンチ:13~15

は、灰釉陶器である。14は、須恵器椀である。15は、土師器鍋である。1～11・15は奈良時代、13・14は平安時代のものである。

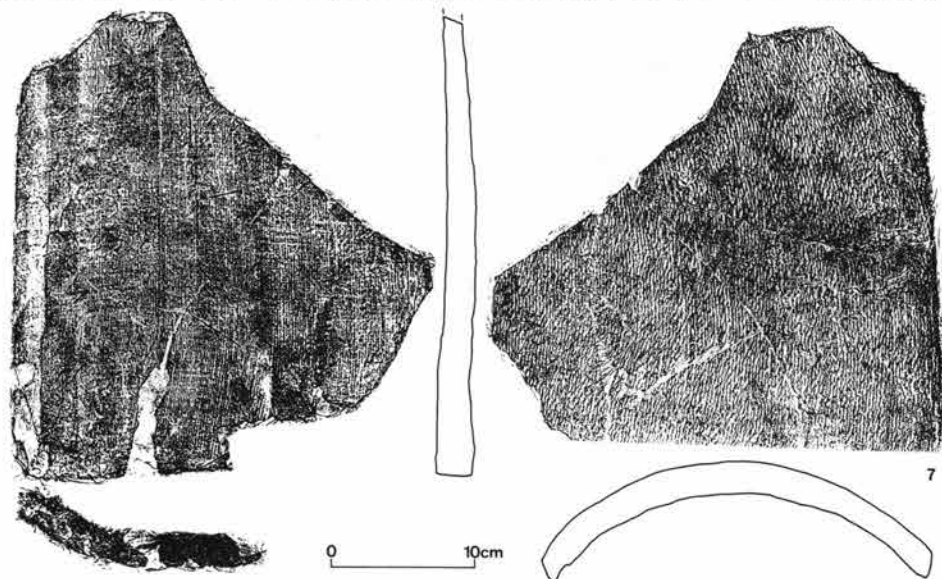
②瓦 第22トレンチで検出した溝に伴うものである。この溝は主軸をほぼ南北にとり、幅2m前後の規模である。溝内からは須恵器・平瓦・丸瓦などの遺物が数多く埋没していた。この地点は、来年度以降に調査が計画されているので詳細は後日報告する。出土瓦のうち、平瓦の一部について報告する。

出土瓦はいずれも平瓦で、凹面には布目がある。凸面に格子叩き目があるもの(1～3)、縄叩き目があるもの(4・5・7)、ナデ調整するもの(6)などがある。凹面に桶枠の痕跡がみられ桶巻造りの可能性が考えられるもの(1～3・7)と、明らかに一枚造りとみられるもの(4)などがある。1は、軒平瓦である。無顎であり、瓦当には四重弧文がある。凹面には桶枠の痕跡、凸面には斜格子の叩き目が認められる。2は凸面に正格子、3は斜格子の叩き目がある。縄叩き目には、縄目が細かく弧を描くように施されているもの(7)と、やや粗く平行に施されるもの(4・5)とがある。

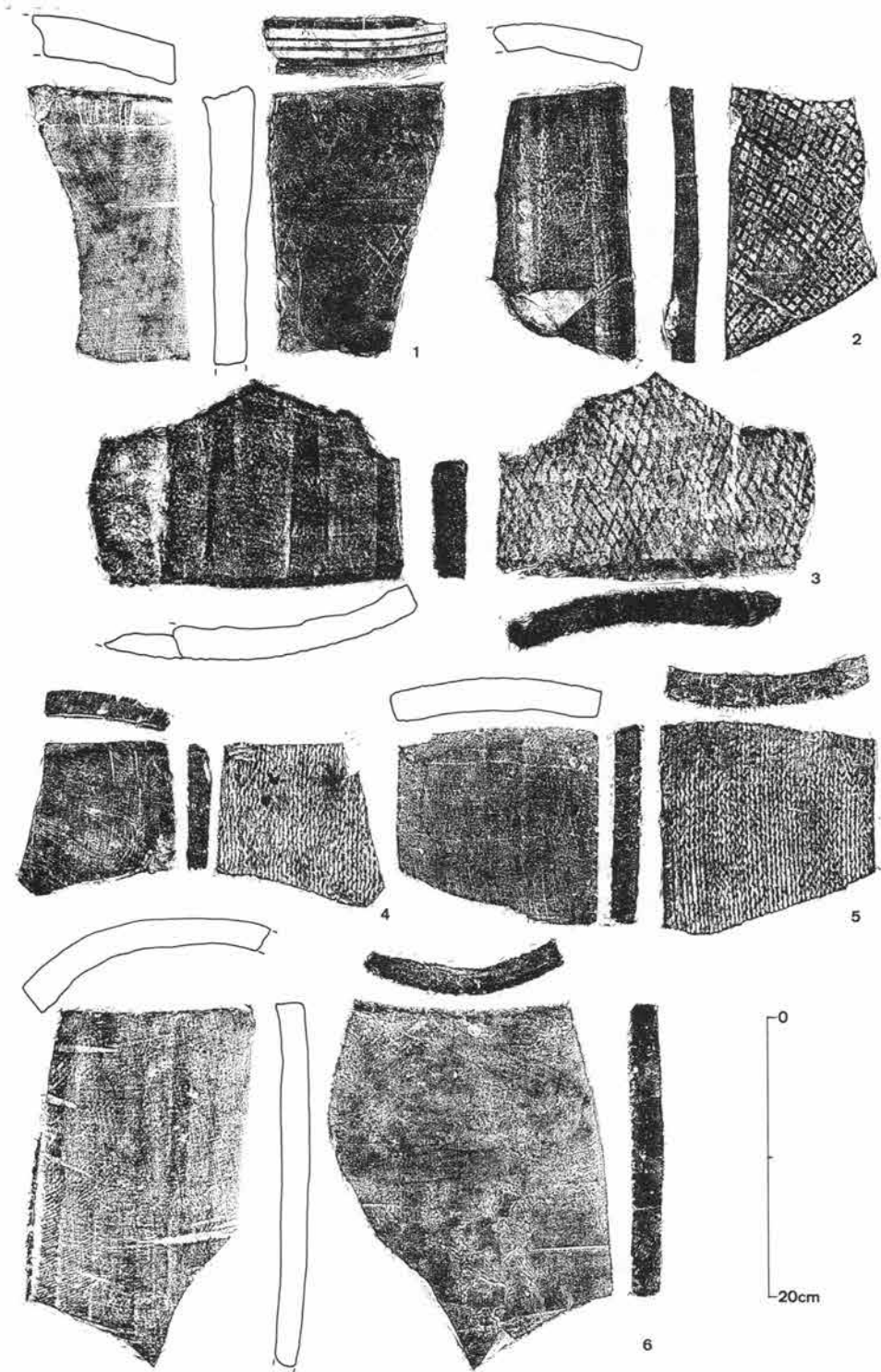
## 5. ま と め

調査概要は以上のとおりである。調査成果で問題となる事柄をまとめ、結びとしたい。

①第1・2調査地区で弥生時代前期の溝・土坑を検出したことにより、この周辺に弥生時代前期の集落が存在することが明らかになった。遺構に伴って出土した土器はいずれも前期新段階に属するものである。第1調査地区の東に接する第2トレンチでは、縄文時代



第29図 第22トレンチ溝1出土瓦(1)



第30図 第22トレンチ溝 1 出土瓦(2)

晩期の土器も出土しており、縄文時代晩期集落の存在も予想される。

第1・2調査地区は、池尻遺跡推定範囲の東端に位置し、弥生時代遺跡として周知されている時塚遺跡と接する場所にあたる。第1・2調査地区周辺に存在が予想される弥生時代前期集落は、位置・内容からみて、時塚遺跡に含めて考えるべきであろう。時塚遺跡からは、打製石鏃や磨製石斧などの石器類が数多く採取されているものの、これまで土器類は確認されておらず時期を限定するには至っていない<sup>(注18)</sup>。今回の調査成果によって、この遺跡の継続年代の一端を明らかにすることができた。

亀岡盆地の弥生時代前期の遺跡は、大堰川右岸地域では太田遺跡・南金岐遺跡・千代川遺跡、左岸地域では御上人林遺跡などが知られているが、数少ない。太田遺跡では環濠と多数の土壌墓が確認されたが、他の遺跡では遺物が散発的に出土しているにすぎず、集落構造などは明らかにされていない<sup>(注19)</sup>。今回確認した遺構は断片的な内容であるが、大堰川左岸地域における弥生時代前期集落遺跡のあらたな追加事例となった。

②第3調査地区では土坑と掘立柱建物跡を検出した。土坑(S X01)からは長頸瓶を主体とする多量の遺物が一括して出土した。長頸瓶は完形に復元できるものが多く、時期的にもまとまりがある。この土器群は須恵器の形態・器種構成などからみて、平城宮I期(8世紀初頭)に並行すると考えられる。亀岡盆地では、この時期の土器資料は、千代川遺跡23区包含層<sup>(注20)</sup>や観音芝麿寺など<sup>(注21)</sup>に出土例があるが、断片的であり様相が明らかでない。今回の検出例は、器種に偏りはあるものの8世紀初頭の一括資料として貴重な事例となった。

③第3調査地区S X01から出土した土器の特徴は、須恵器長頸瓶が圧倒的に多いことと、表面に漆が付着するものが多いことが挙げられる。漆が付着する土器には須恵器長頸瓶・埴・杯身・甕、土師器鉢などがある。長頸瓶はほとんどに漆の付着が認められ、すべて割られて破片となって出土している。このような遺物出土状況を示す事例として紀寺跡、平城京右京八条一坊十四坪で検出された漆工に関連する土坑資料が知られている。

藤原京左京八条二坊に所在する紀寺跡の発掘調査では、7世紀後半代の寺院造営に関する遺物が多量に廃棄された土坑群が検出され、そのうちの1つの土坑から多量の漆容器壺の出土が確認されている。漆容器として用いられた壺類には須恵器平瓶・長頸瓶・短頸壺・横瓶などの器種があり、いずれも口縁部及び体部上半で打ち割って、なかの漆を掻き出した痕跡が明瞭であるという<sup>(注22)</sup>。

平城京右京八条一坊十四坪の発掘調査で検出された土坑(S K2001)からは、漆工に関する多量の遺物が出土している。出土土器には土師器・須恵器があり、食器・貯蔵器・煮沸具などで構成されているが、須恵器貯蔵器が卓越するのが特徴である。須恵器貯蔵器のほとんどに漆の付着が確認されている。なかでも、壺K・P・L・Xといった狭口の壺の割合

が高く、漆の付着率も95～100%と高率である。壺K・P・L・Xなど狭口の壺の出土状況は二、三を除き、他はすべて破片となって出土している。この破損状況について報告者は、肩部付近の割れ口断面の外表面縁辺に打撃が加えられたものがあること、破片断面に漆が付着しているものが少なくないこと、器体内面の漆膜に同じ土器の破片が固着する例があることなどから、「中にいれてある漆が完全に固化していない時点で打ち割られた」と判断した。そして「それは、おそらく口の狭い壺から、広口の甕などの大きな容器に漆液をいれ替えたときに、壺の中に残っている漆液を取り出すために、容器を打ち割って内壁面に付着していた液をかき取ったもの」と考え、壺K・P・L・Xの用途を、漆産産地で採取された漆液を平城京に運搬するための運搬用容器と推論した。また、各器種の漆の付着状況から、「須恵器壺Aや須恵器・土師器甕に貯えた漆を、漆工の際に土師器壺Bに小出しにし、須恵器の杯・皿をパレットとして作業を行っていた」という工房での具体的なようすを想定している<sup>(注1)</sup>。

S X01出土遺物は、これらの資料ほど充実したものではないが、器種構成・出土状況から漆工に関する遺物とみることができよう。なかでも長頸瓶は、平城京S K2001での破損状況・漆付着状況と同一様相を示しており、漆運搬容器と考えられる。漆液を取り出す際に破碎・投棄されてS X01に集積したのだろう。長頸瓶の形態差は、注22文献で指摘されるように、漆産産地に供給された窯の違いを反映したものと考えられる。第3調査地区付近に漆工関係の工房が存在していたと考えられる。

この調査地区の西方にある第22トレンチでは、S X01と同時期とみられる須恵器や平瓦が出土しており、相互の関係が注目される。

④第17～22トレンチでは、奈良時代の布目瓦が出土し、この付近に瓦葺建物が存在していたことが明らかになった。特に、第22トレンチでは主軸を南北にとる溝を確認し、8世紀初頭から平安時代にかけての瓦・須恵器多数を検出している。四重弧文軒平瓦や格子目叩きを有する平瓦など白鳳期に属すると考えられる瓦などもあり、白鳳期創建の瓦葺き建物が存在した可能性も考えられる。第17～22トレンチは来年度以降調査が計画されており、成果が期待される場所である。

(田代 弘)

注1 調査にあたっては次の方々のお世話になった。

明田安男・浅田フミエ・浅田ミヨ・大槻益子・川勝貞夫・黒田美代子・田中寛治・谷口明子・田村末雄・土井正文・中川とし江・中川英子・中川ひさ江・林 梅野・広瀬作治・広瀬辰次・松本末野・湯浅義雄・高田由美子・高田えみ子・高田真由美・佐々木理・吉岡孝博



- 注2 『京都府遺跡地図』第3分冊 京都府教育委員会 1986
- 注3 『陶邑』Ⅱ 大阪府教育委員会 1980、以下、当センター小池 寛調査員の教示による。
- 注4 『精華ニュータウン予定地遺跡発掘調査報告書』(財)古代学協会 1987
- 注5 『京都市内遺跡試掘立会調査概報』京都市文化観光局 1985
- 注6 「長岡京跡右京第363次発掘調査概要」(『京都府遺跡調査概報』第43冊 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 1991
- 注7 『埋蔵文化財発掘調査概報(1987)』京都府教育委員会 1987
- 注8 「青野遺跡第5次発掘調査概報」(『綾部市文化財調査報告』第9集 綾部市教育委員会) 1982
- 注9 「綾中遺跡発掘調査概報」(『綾部市文化財調査報告』第9集 綾部市教育委員会) 1982
- 注10 『高川原遺跡発掘調査報告書』大江町教育委員会 1975
- 注11 「志高遺跡」『京都府遺跡調査報告書』第12冊 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター 1989
- 注12 「桑飼上遺跡平成元年度発掘調査概要」(『京都府遺跡調査概報』第40冊 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 1990
- 注13 宮津市教育委員会中馬陽太郎氏御教示。包含層中より多数出土。
- 注14 加悦町教育委員会佐藤晃一氏御教示。
- 注15 京都府教育委員会森下 衛氏御教示。包含層中から2・3点出土したという。
- 注16 包含層から少量出土。当調査研究センター1991年度調査。
- 注17 当調査研究センター松井忠春主任調査員の教示による。
- 注18 田代 弘「亀岡市時塚遺跡採集の石製品類」(『京都府埋蔵文化財情報』第26号 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 1987
- 注19 「太田遺跡」『京都府遺跡調査報告書』第6冊 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター 1986
- 注20 「千代川遺跡」『京都府遺跡調査報告書』第16冊 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター 1992
- 注21 『観音芝麿寺発掘調査報告書』亀岡市教育委員会 1988
- 注22 奈良国立文化財研究所『平城京右京八条一坊十三・十四坪発掘調査報告書』1989 78頁注。  
奈良国立文化財研究所『飛鳥・藤原宮発掘調査概報』18 1988
- 注23 注22と同じ 105～108頁。



付表2 第3調査地区SX01出土遺物観察表

番号	器種	法量			胎土	焼成	色調	備考
		口径	器高	腹径				
第22図1	須恵器杯蓋	16.3	2	—	微細砂多く含む	良好	暗灰色	
2	須恵器杯蓋	16.4	3	—	密	良好	暗灰色	
3	須恵器杯蓋	(16.5)	2.4	—	やや砂質	良好	灰色	
4	須恵器杯蓋	17.1	3.6	—	密	やや軟	暗灰色	内面に墨痕あり、転用硯か
5	須恵器杯蓋	19.3	2.7	—	密	良好	暗灰色	
6	須恵器杯身	13	3.2	—	砂質	良好	暗青灰色	底部ヘラ切り
7	須恵器杯身	13.7	3.7	—	密	軟	灰色	底部ヘラ切り
8	須恵器杯身	12.4	3.7	—	密	やや軟	暗灰色	底部ヘラ切り
9	須恵器杯身	14.3	3.4	—	密	やや軟	暗青灰色	底部ヘラ切り
10	須恵器杯身	16.8	3.8	—	密	やや軟	暗灰色	内面に漆付着
11	須恵器杯身	17.7	2.9	—	微細砂多く含む	やや軟	暗灰色	
12	土師器高杯	—	(6.0)	—	精良	良好	赤褐色	脚部外面ヘラ削り
13	須恵器蓋形土器	20.7	(3.2)	—	微細砂多く含む	良好	暗灰色	天井部に竹管文がめぐる
14	土師器皿	13.2	1.8	—	精良	良好	赤褐色	内面に暗文
15	土師器皿	12.6	2.8	—	砂粒含む	やや軟	暗茶褐色	
16	土師器皿	15.5	3	—	微細砂多く含む	良好	赤褐色	
17	土師器甕	16.5	(5.0)	—	細砂を多く含む やや粗	良好	暗褐色	口縁内面を強くナデ、段状を呈する
18	土師器鉢	24.1	(5.5)	21.5	径1~2mmの砂を含む、良	やや軟	黄灰色	内面と注口部外面に漆の付着あり
19	須恵器埴	10.6	(8.0)	20.1	径1~2mmの砂を含む	良好	暗灰色	内外面に漆の付着あり
20	須恵器短頸壺	12.4	13.3	16.8	砂粒やや含む	良好	灰色	肩部に耳がつく
21	土師器鉢	24.8	(8.0)	—	精良	良好	黄白色	
22	須恵器甕	25.9	(18.0)	41	微細砂多く含む	良好	暗青灰色	内面に漆付着
第23図23	須恵器長頸瓶	10.7	20.9	15.2	微細砂含む	良好	灰色	内面に漆付着
24	須恵器長頸瓶	12.2	19.6	16.7	微細砂含む	良好	灰色	内面に漆付着
25	須恵器長頸瓶	11.1	(20.1)	17.1	微細砂含む	良好	暗灰色	内面に漆付着
26	須恵器長頸瓶	11.4	20.6	16.7	微細砂含む	良好	灰色	内面に漆付着
27	須恵器長頸瓶	11	21.1	16.2	微細砂含む	良好	暗灰色	内面に漆付着
28	須恵器長頸瓶	10.7	20.2	15.8	やや砂質	やや軟	暗灰色	内面に漆付着
29	須恵器長頸瓶	12.3	(20.4)	17.4	微細砂含む	良好	暗灰色	内面に漆付着

30	須恵器長頸瓶	12.5	(15.0)	16.1	砂粒多く含む	堅緻	暗青灰色	内面に漆附着
31	須恵器長頸瓶	10.6	(15.6)	16.1	微細砂多く含む	良好		内面に漆附着
第24図32	須恵器長頸瓶	12	(16.1)	16.7	径1mm前後の砂粒多く含む	堅緻	暗灰色	内面に漆附着
33	須恵器長頸瓶	11.6	(15.9)	—	微細砂多く含む	堅緻	灰色	内面に漆附着 ・破断面
34	須恵器長頸瓶	—	(16.9)	17.8	微細砂多く含む	良好	暗灰色	内面に漆附着
35	須恵器長頸瓶	11	(19.9)	16.7	砂粒多く含む	堅緻	暗灰色	内面に漆附着
36	須恵器長頸瓶	12.4	(19.6)	16.6	砂粒多く含む		暗青灰色	内面に漆附着
37	須恵器長頸瓶	11.5	(11.1)	—	微細砂多く、やや砂質	やや軟	灰色	内面に漆附着
38	須恵器長頸瓶	11.7	(11.6)	—	微細砂多く含む	やや軟	暗青灰色	
39	須恵器長頸瓶	—	(2.9)	—	微細砂含む、やや砂質	やや軟	灰白色	
40	須恵器長頸瓶	—	(2.4)	—	微細砂多く含む	良好	青灰色	底部外面に漆附着
41	須恵器長頸瓶	—	(8.2)	16.5	径1～2mmの砂粒含む、良好	堅緻	暗灰色	内面・破断面に漆附着
42	須恵器長頸瓶	—	(9.2)	16	良好	堅緻	暗灰色	内面に漆附着
43	須恵器長頸瓶	—	(7.7)	16.5	微細砂多く、やや砂質	やや軟	灰色	内面・破断面に漆附着
44	須恵器長頸瓶	—	(8.8)	17.4	微細砂多く、やや砂質	やや軟	暗灰色	内面・破断面に漆附着
45	須恵器長頸瓶	—	(8.6)	16.1	やや砂質	良好	暗灰色	内面に漆附着
46	須恵器長頸瓶	—	(9.9)	17	良好	やや軟	灰白色	内面・破断面に漆附着
47	須恵器長頸瓶	—	(9.3)	18	良好	やや軟	暗灰色	内面・破断面に漆附着
48	須恵器長頸瓶	—	(8.1)	17.8	径1～2mmの砂粒わずかに含む	堅緻	暗灰色	破断面に漆附着

### 3. 鹿谷遺跡平成3年度発掘調査概要

#### 1. はじめに

京都府亀岡市鹿谷地区は、戦前のアルミニウム採掘事業により、公害に汚染されたところがある。このため、今回の発掘調査は、京都府亀岡土地改良事務所の依頼を受けて、府営公害防除特別改良事業に先立って実施した。

鹿谷遺跡は、『京都府遺跡地図』によれば、散布地として知られた遺跡である。周辺の山間部には、鹿谷古墳群・鹿谷池田古墳群・葺田野西山古墳群が存在する。鹿谷古墳群は、明治年間にウィリアム＝ゴerlandが調査し報告を行った石棚付の横穴式石室を持つ古墳があることでも有名である。<sup>(注1)</sup>

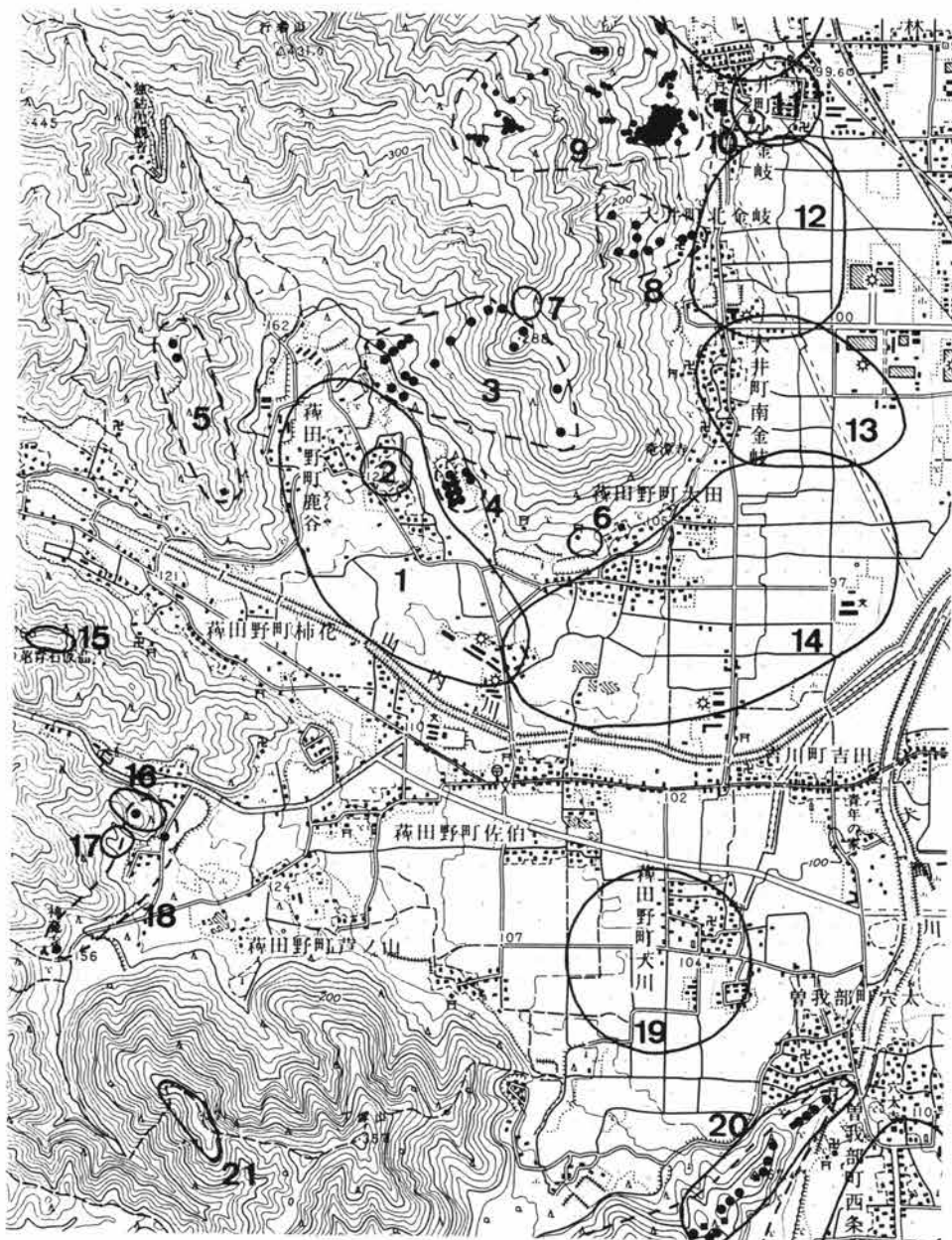
現地調査は、まずはじめに、京都府教育委員会が遺構・遺物の有無を確認するため、試掘調査を行った。試掘調査は、工事により削られる予定の2地点で行われた(第32図)。その結果、A地点では、古墳時代～鎌倉時代の竪穴式住居跡や溝、B地点では古墳時代の掘立柱建物跡を確認した。この成果をもとに、協議を行ったところ、B地区は、工事計画の変更により、保存することになった。そこで、やむを得ないA地点のみ、面的調査を(財)京都府埋蔵文化財調査研究センターが実施することになった。現地調査は、当調査研究センター調査第2課調査第2係長奥村清一郎、同調査員鶴島三壽が担当した。調査期間は、平成3年7月23日から10月15日である。

発掘調査に当たっては、京都府教育庁指導部文化財保護課・亀岡市教育委員会・京都府南丹教育局をはじめとする各関係諸機関、地元地区の方々や学生諸氏には、種々の御協力を賜わった。<sup>(注2)</sup>ここに記して感謝する。

#### 2. 位置と環境

亀岡盆地は、口丹波とも呼ばれ、山陰道が通る交通の要衝として、古くから発達してきた。亀岡盆地は、京都盆地に隣接するという地理的要因のため、近年国道9号バイパス・都市計画道路・宅地開発などに伴う発掘調査が増大し、それに伴い、古代の様相も次第に明らかになりつつある。

縄文時代の遺跡では、以前から三日市遺跡が知られていたが、発掘調査の回数が増えるたび各地点で報告されている。千代川遺跡丹波国府推定地では、有舌尖頭器といった草創



第31図 調査地周辺遺跡分布図

- |              |             |           |            |               |
|--------------|-------------|-----------|------------|---------------|
| 1. 鹿谷遺跡      | 2. 丸勘(鹿谷)城跡 | 3. 鹿谷古墳群  | 4. 鹿谷池田古墳群 | 5. 藤田野西山古墳群   |
| 6. 太田城跡      | 7. 東谷遺跡     | 8. 北金岐古墳群 | 9. 小金岐古墳群  | 10. 馬場ヶ崎古墳群   |
| 11. 馬場ヶ崎遺跡   | 12. 北金岐遺跡   | 13. 南金岐遺跡 | 14. 太田遺跡   | 15. 牛松山(柿花)城跡 |
| 16. 丸山(茶屋)城跡 | 17. 佐伯遺跡    | 18. 佐伯古墳群 | 19. 天川遺跡   | 20. 穴太古墳群     |
| 21. 高岳城跡     |             |           |            |               |

期に遡るものや、押型文土器など縄文時代早期の遺物も確認されている。国府推定地南辺部の千代川遺跡10次及び16次調査や南約500mの11次調査地点から、縄文時代晩期の土器が出土し、千代川遺跡以外でも、北金岐遺跡や太田遺跡で縄文時代晩期の土器がまとまって確認され、行者山の沿辺部には縄文時代後期・晩期の集落があったと考えられる。

弥生時代になると、亀岡盆地周辺に遺跡が散在する。その中でも主要なものは、蕨田野町太田遺跡・大井町北金岐遺跡・千代川町千代川遺跡などである。

太田遺跡は、弥生時代前・中期の遺跡として重要である。鹿谷遺跡は、この太田遺跡に隣接するため、弥生時代にも注目しておく必要がある。遺構としては、推定直径160mを測る環濠や溝・土坑などが確認されている。出土遺物には、土器・石器・木器などが大量に出土している。土器では第Ⅰ～第Ⅱ様式の摂津、播磨の影響を受けたものが顕著であり、地域間交流を考える上で貴重である。北金岐遺跡は後期～布留式併行期の遺跡である。遺構として、竪穴式住居跡・掘立柱建物跡・溝・土坑などが確認されている。この時期の遺物の80%は、溝内からの出土である。土器や木器が大量に出土し、土器では、近江系土器の出土が顕著であることから近江地域の影響が考えられている。千代川遺跡は、府道の拡幅に伴う6次調査で、弥生時代中期第Ⅲ～第Ⅳ様式の方形周溝墓、溝状遺構などが検出された。出土した土器は外面に叩き目を残す壺・甕が主体をなし、太田遺跡と同様、摂津地域との関連性が窺える。

古墳時代になると、丹波地域の盟主墳と考えられる全長80mの前方後円墳である千歳車塚古墳をはじめとして、多くの前方後円墳が築かれる。古墳時代前期のものは、はっきりしないが、古墳時代中期になると千歳車塚古墳や野条古墳・保津車塚古墳・案察使古墳などの前方後円墳が盆地内に点在して造営される。古墳時代後期になると、多いところで100基を越える府内でも有数の群集墳地帯となる。大半の古墳は、横穴式石室を内部主体に持つもので、石材の豊富な行者山一帯は、花崗岩の巨石を利用した古墳が多い。小金岐古墳群は100基を越える古墳群であるが、76・77号墳は石棚を持つ古墳として特徴的である。同様な古墳として、全長40mの前方後円墳の拝田16号墳や鹿谷遺跡の背後に存在する鹿谷18号墳などがある。こういった意味からも、鹿谷遺跡・鹿谷古墳群は重要であり、行者山周辺に存在するこれらの古墳群との関係は注目されるものであろう。

奈良時代の遺跡としては、千代川町の丹波国府推定地、河原林町の丹波国分寺や国分尼寺(御上人林庵寺)が重要である。こういった律令国家による重要遺跡のみならず篠町観音芝庵寺・曾我部町与能庵寺・千代川町桑寺庵寺など白鳳期に入る古寺も亀岡市内に所在している。特に、古道関係では、鹿谷遺跡の南端に山陰道が想定されており、注目される。

また、この鹿谷遺跡の範囲内には、丸勘城(鹿谷城)が存在する。この城は、独立丘陵端

部に位置し、範囲は東西120m×南北180m、本丸・郭・堀が確認でき南北朝時代の城である。鹿谷遺跡は、この城の平地部に存在するため、この点からも発掘調査に期待された。

### 3. 調査概要

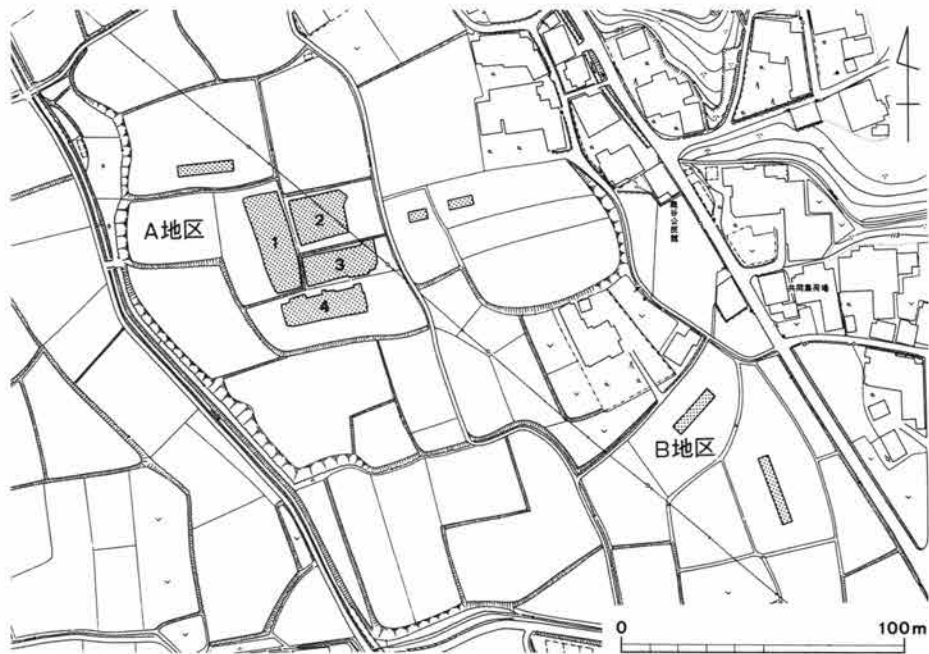
#### (1) 調査区の設定

面的調査は、京都府教育庁文化財保護課が行ったA地点の試掘トレンチを拡張する形で実施した。調査区は、工事計画の関係もあって、田の畦畔をそのまま残し、耕作土とその下層の土が混じらないように土置き場を確保しながら進めた。

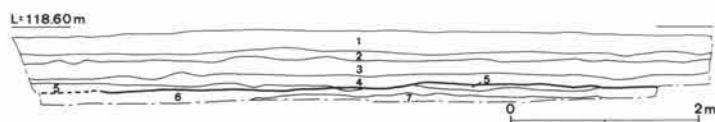
文化財保護課が行った試掘調査では、古墳時代の竪穴式住居跡が確認されたトレンチを2区として拡張した。また、鎌倉時代の掘立柱建物跡を検出したトレンチを1区として設定した。1・2区の遺構の検出状況から、周辺にも遺構・遺物の広がりが見込まれたので、3・4区として面的調査を進めた。

#### (2) 層序

調査区の層序は、基本的に、耕作土・淡茶褐色土(床土)・黒褐色土・黄灰色砂質土(地山)に分けられる。黒褐色土は、場所により、淡褐色土・黒褐色土・黒色粘質土の三層に細分することができる。黒褐色土は、遺物包含層であるが、三層に細分しようところでも、層ごとに出土遺物の年代が特定できるといったものではなく、各時代の遺物が混じって出



第32図 調査区配置図



第33図 3区南壁土層断面図

- |        |               |              |               |
|--------|---------------|--------------|---------------|
| 1.耕作土  | 2.淡茶褐色土(砂を含む) | 3.黒褐色土(砂を含む) | 4.暗黒褐色土(砂を含む) |
| 5.淡黒色土 | 6.黒色砂質土       | 7.暗茶色砂       |               |

土した。土層の厚さは、いずれの調査区でもほぼ同じであり、著しい削平を受けたところは認められなかった。調査地の土層は、砂分が多いためか水はけがよく、調査を順調に進めることができた。

#### 4. 検出遺構

検出遺構には、竪穴式住居跡・掘立柱建物跡・土坑・溝などがある。これらの遺構は、黒褐色土を切り込んで作られており、その遺構の埋土も黒褐色土であるため、検出が困難であった。したがって、かなり精査を繰り返したことや、ベース面で検出したものもあるため、遺構の深さは、いずれもかなり浅いものとなっている。

以下、各調査区ごとに遺構の概要について述べる。

1区 ここからは、掘立柱建物跡2棟をはじめ、多くの柱穴、中世素掘り溝、土坑を検出した。掘立柱建物跡S B02は、柱穴から瓦器や土師器の細片が出土していることから、鎌倉時代のもと考えられる。包含層を掘削していく段階で、奈良・平安時代の須恵器の蓋杯をはじめとして、鎌倉時代の瓦器碗・羽釜・土師器皿などが出土した。

掘立柱建物跡S B01 調査区中央部で検出した南北棟の建物跡である。建物跡の規模は、桁行3間(5.3m)×梁間2間(4.0m)である。柱穴の大きさは、円形で、直径30~40cm・深さ20~30cmを測る。柱穴から遺物などは出土していない。

掘立柱建物跡S B02 調査区西辺で検出した総柱の建物跡である。建物跡の規模は、調査地西辺のため、全容はつかめないが、桁行2間(3m)×梁間1間(1.4m)以上である。柱穴の大きさは、円形で、直径30cm・深さ20cm前後を測る。柱穴内から、摩滅した瓦器・土師器片が出土した。

2区 1区の東側に設定した。文化財保護課の試掘調査で、竪穴式住居跡の一角を検出していたので、それを拡張する形で設定した。ここで、確認した遺構には、竪穴式住居跡、掘立柱建物跡、溝などがある。

竪穴式住居跡S H06 2区の北東隅で検出した。一辺約4.4mの隅丸方形を呈し、深さ約10cmを測る。住居跡床面で、主柱穴4か所を検出した。主柱穴はやや小さく直径30cm



前後・深さ約40cmを測る。住居跡西辺部には、一部焼土とともに、土師器の甕を中心とする遺物が確認された。

**掘立柱建物跡 S B 03** 調査区南部で検出した東西棟の建物跡である。建物跡の規模は、桁行3間(4.6m)×梁間2間(3.4m)である。柱穴の大きさは、円形で、直径30cm・深さ20cmを測る。柱穴の一部から、瓦器の小片が出土した。

**溝** 建物跡 S B 03に隣接して、溝を一条検出した。この溝は、幅約20cm・深さ約20cmを測る、断面「U」字形の溝である。調査区を北東から南西方向にのびているが、この延



第34図 調査地遺構平面図



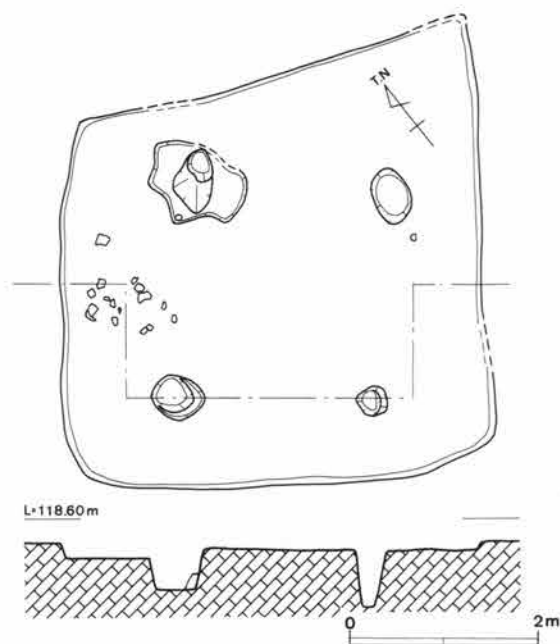
長部は1区では確認できなかったため、1・2区間で曲がる可能性が高い。建物跡の軸方向とは、やや角度を振るが、SB03に伴うものかどうかは検討を要しよう。

また、調査区北片では、この溝と平行に延び、西側で約90°の角度に曲がる溝も確認した。この溝は、幅約20cm・深さ5~15cmを測る浅いもので、断面形は、緩やかな「U」字形であり、東側ほど浅くなる。耕作に伴ういわゆる中世素掘り溝であろう。

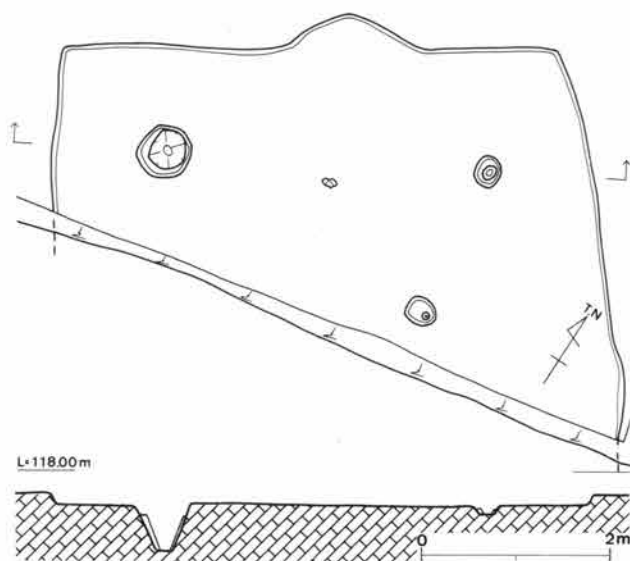
3区 試掘調査で、1・2区において掘立柱建物跡・竪穴式住居跡を確認したため、3・4区を新たに設定して調査を実施した。

この調査区では、遺物包含層中から、奈良・平安時代の須恵器や鎌倉時代の須恵器・土師器が出土する一方、調査区中央部で、建物として確認するには至らなかったが、直径30cm前後の柱穴内部に、石を敷いているものも確認した。

竪穴式住居跡SH07 3区の北東隅で検出した。平面形は、隅丸方形を呈し、東辺で約4m以上、南辺で2m以上、深さ約10cmを測る。調査区の北東隅で、焼土を確認したことから、北東側にカマドがあったものと思われる。東辺が大きく攪乱されており、遺存状況はよくない。



第35図 竪穴式住居跡SH06実測図



第36図 竪穴式住居跡SH08実測図

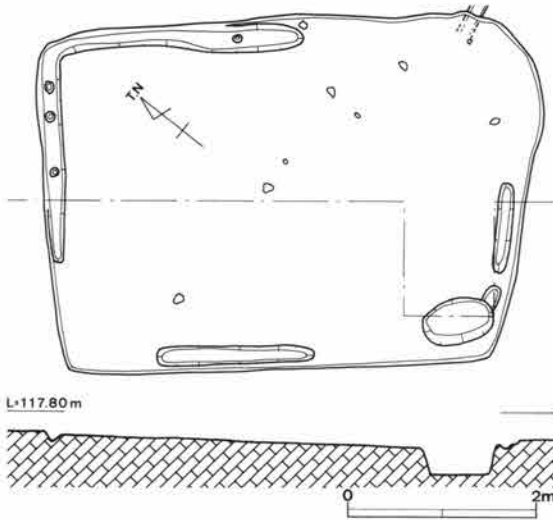
**竪穴式住居跡 S H08** 3区の南隅で検出した。平面形は、隅丸方形を呈しており、北東辺で4.5m、北西辺で4m以上、深さ約10cmを測る。調査区の北東隅に焼土が広がり、北東側にカマドがあったと思われる。住居跡床面で、支柱穴を2か所検出した。柱穴はやや小さく直径20~30cm前後・深さ約30cmを測る。柱穴間で、土師器の甕片が1点出土した。

**掘立柱建物跡 S B04** 調査区南部で検出した南北棟の建物跡である。建物跡の規模は、桁行2間(4.3m)以上×梁間1間(2.8m)である。柱穴の形状は、隅丸方形と円形のものがある。大きさは、それぞれ一辺30~40cm・直径30cm・深さ20cmを測る。柱穴から遺物など

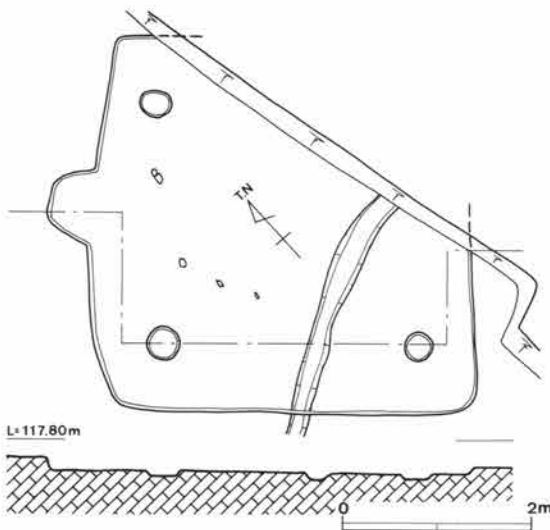
は出土していないが、瓦器・土師器片が出土したS B02・03より柱穴が一回り大きいことや、包含層出土遺物などから、平安時代頃の建物跡と考えられる。

**4区** 今回の調査地の中で、最も南側に設定した調査区である。ここから竪穴式住居跡3棟、掘立柱建物跡1棟を検出した。包含層出土遺物として、奈良・平安時代の須恵器とともに、瓦器や白磁碗なども出土した。

**竪穴式住居跡 S H09** 4区北辺で検出した。平面形は、隅丸方形を呈し、南辺で4.1m、東辺で4m以上、深さ約10cmを測る。東辺には、黄灰色土と焼土が広がっていたことから、東側にカマドがあったと思われる。住居跡に伴う柱穴は検出しえなかった。北の壁際で、8世紀初頭頃の台付長頸壺(10)とその下から田辺編年TK209期の古墳時代の杯身片が出土した。両方とも床面で検出したものではなく、断面観察によれば、



第37図 竪穴式住居跡 S H10実測図

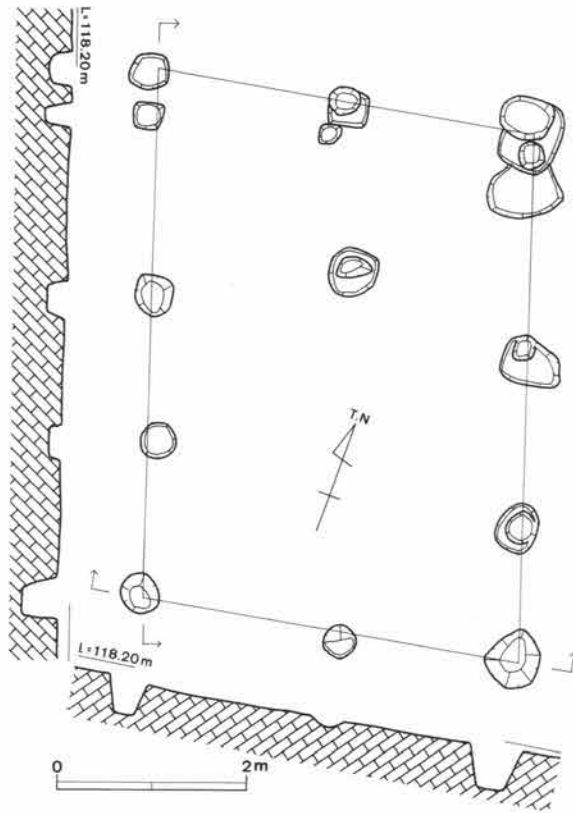


第38図 竪穴式住居跡 S H11実測図

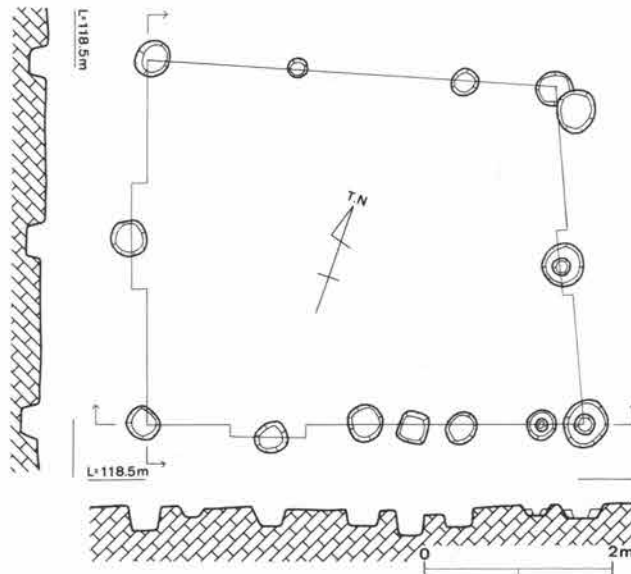
包含層との境にあたるので、この遺構の時期を示すと考えるには注意を要する。

**竪穴式住居跡SH10** 4区のはば中央で検出した。平面形は、隅丸長方形を呈し、北東辺で3.6m、北西辺で4.9m、深さ約10cmを測る。中央部には、黄灰色土が広がっていたことから、ここにカマドがあったものと思われる。住居跡床面では、周壁溝・貯蔵穴状ピットを検出した。周壁溝は、幅約15cmを測り、おおむね四壁に沿ってめぐる。貯蔵穴状ピットは、楕円形で長径80cm・短径40cm・深さ約30cmを測る。床面で、須恵器播鉢(14)・土師器杯(11)・土師器甕(12・13)が出土した。これらの遺物から、この竪穴式住居跡は奈良時代のものであることがわかる。

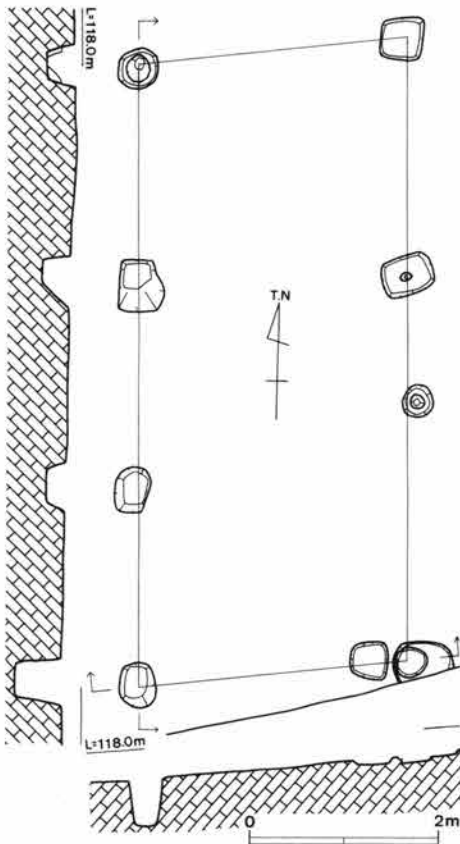
**竪穴式住居跡SH11** 4区の東辺で検出した。平面形は、隅丸方形を呈し、一辺4m・深さ約10cmを測る。床面で柱穴を3つ検出した。柱穴は、円形で約30cm・深さ約30cmを測る。床面で土師器杯(15)・土師器甕(16)・



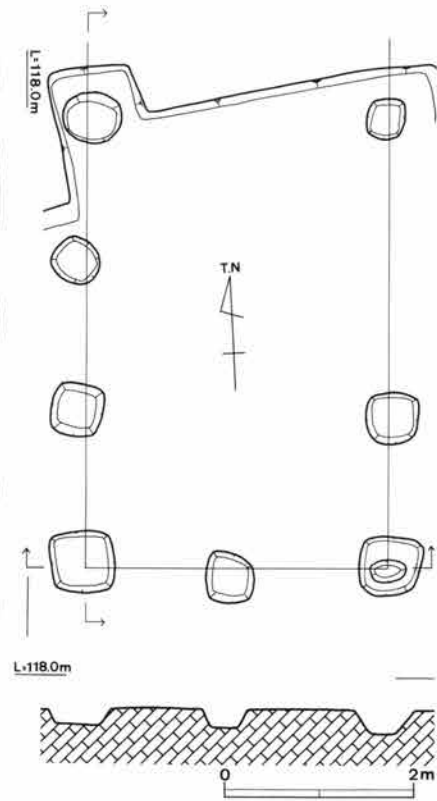
第39図 掘立柱建物跡S B01実測図



第40図 掘立柱建物跡S B03実測図



第41図 掘立柱建物跡 S B 04実測図



第42図 掘立柱建物跡 S B 05実測図

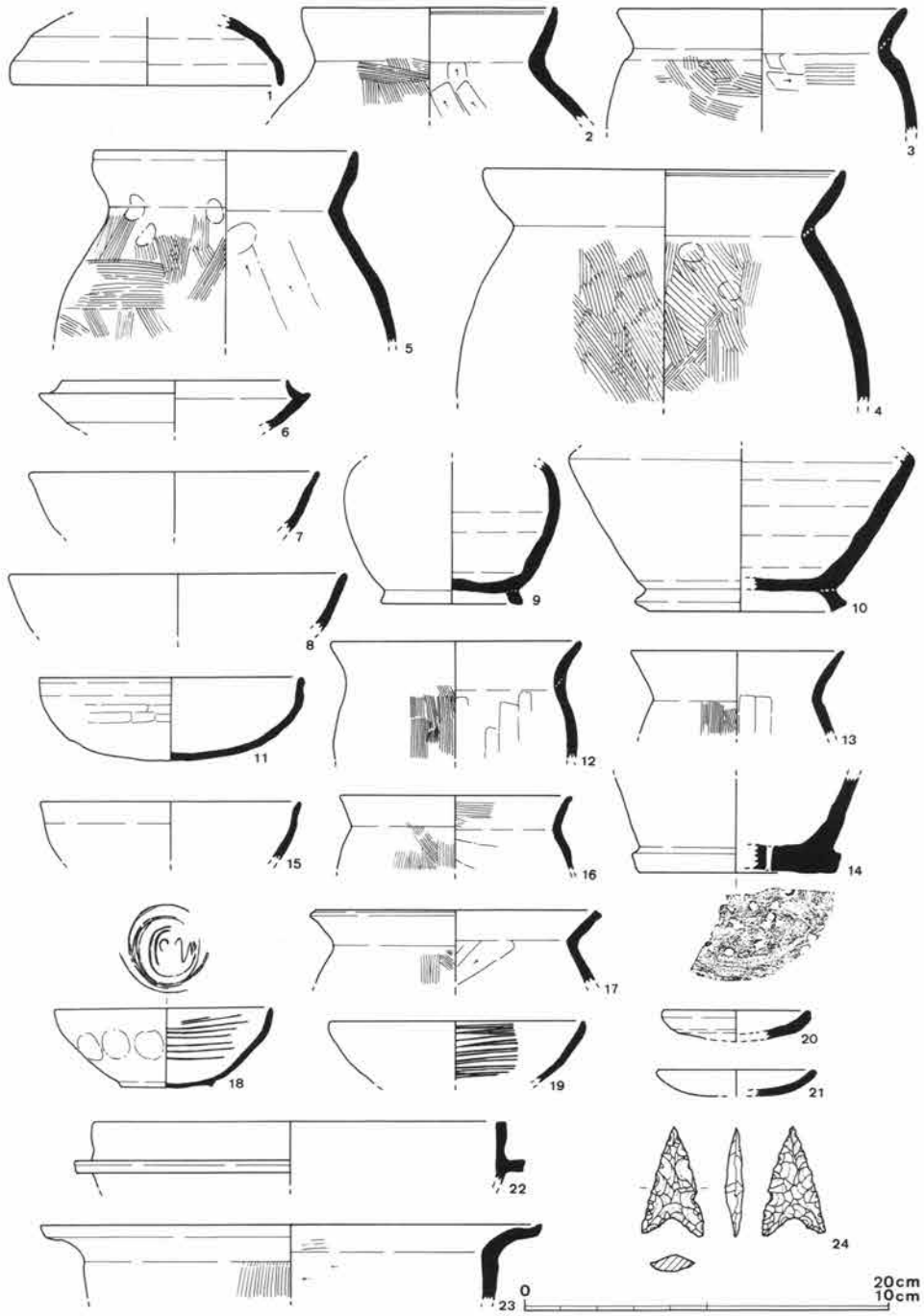
17)が出土した。これらの遺物から、この竪穴式住居跡はS H 10と同様、奈良時代のものと考えられる。S H 10と11にまたがって溝が1条走るが、この溝は住居跡に先行するもので、遺物などは出土していない。

**掘立柱建物跡 S B 05** 4区の北辺で検出したため、全体の規模は不明であるが、桁行3間(4.8m)以上×梁間2間(3.3m)である。柱穴は、隅丸方形で一辺約60cm・深さ約20cmを測る。遺物は出土していないが、柱穴の形状などから奈良時代頃の建物跡と考えられる。

## 5. 出土遺物

検出した遺構は、古墳時代の竪穴式住居跡から鎌倉時代の掘立柱建物跡であるため、包含層中から出土したのも自らこの時代のものが中心となった。遺物の多くは、瓦器・土師器の細片が多いが、図示しえたものを中心に述べる。

1～4は、S H 06、5はS H 07出土遺物である。1は、須恵器蓋である。笠形の天井部から、口縁端部は真下に下りる。口径14.7cmを測る。2～5は、土師器甕である。いずれも口縁部



第43図 出土遺物実測図

- |              |           |            |              |              |
|--------------|-----------|------------|--------------|--------------|
| 1~4. S H06   | 5. S H07  | 6~8. 4区包含層 | 9・10. S H09  | 11~14. S H10 |
| 15~17. S H11 | 18. 柱穴P48 | 19. 1区包含層  | 20・21. 2区包含層 | 22~24. 3区包含層 |

は「く」の字に外反し、体部外面はハケ、内面はケズリないしはハケ調整を施す。2・4は、口縁端部に1条の沈線がめぐる。6～8は、4区包含層出土遺物、9・10は、SH09検出面付近出土遺物である。ともに、台付壺の底部片であるが、10は、断面長台形の高台をもち、外方に張り出す。その形態より、8世紀初頭頃のものと考えられる。亀岡市内では、池尻遺跡より同型式の長頸壺片が大量に出土しており注目される。11～13は、SH10、15～17はSH11から出土した。11・15は、土師器杯である。11は、口縁端部を強く横ナデし、外面はミガキ調整を施す。12・13・16は、土師器甕である。いずれも体部外面は縦ハケ、内面は削りを施す。18・19は、瓦器椀である。18は、1区の柱穴P48より出土した。体部外面は指押さえ、内面のミガキはまばらで、内面見込の暗文は螺旋形を描く。断面三角形の小さな高台をもつ。口径11.8cm・器高4.7cmを測る。13世紀後半頃のものであろう。20・21は、土師器皿である。20は、口縁部を横ナデし、端部は尖り気味に終わる。13世紀頃のものと思われる。22は、瓦質土器羽釜である。頸を水平に張り付け、口径21.6cmを測る。23は、土師器鍋である。体部外面は縦ハケ、口縁端部は上方に尖り気味に終わる。口径27.9cmを測る。24は打製石鏃である。チャート製で、長さ2.9cm・幅1.7cmを測る。

## 5. おわりに

今回の調査は、面積は狭いながらも、古墳時代の竪穴式住居跡をはじめ、鎌倉時代までの掘立柱建物跡を確認した。竪穴式住居跡は、古墳時代から奈良時代のものが混在し、掘立柱建物跡も、奈良・平安時代頃のものと同時代の両時期のものがある。いずれの時代も集落跡としてのまとまりを確認するには至らなかった。遺物的には、縄文時代から近世に至るものが出土しており、周辺にはさらに当該期の遺構が広がっていると考えられる。

(鶴島三壽)

注1 上田宏範監修『日本古墳文化論—ゴースト考古論集—』1981 大阪

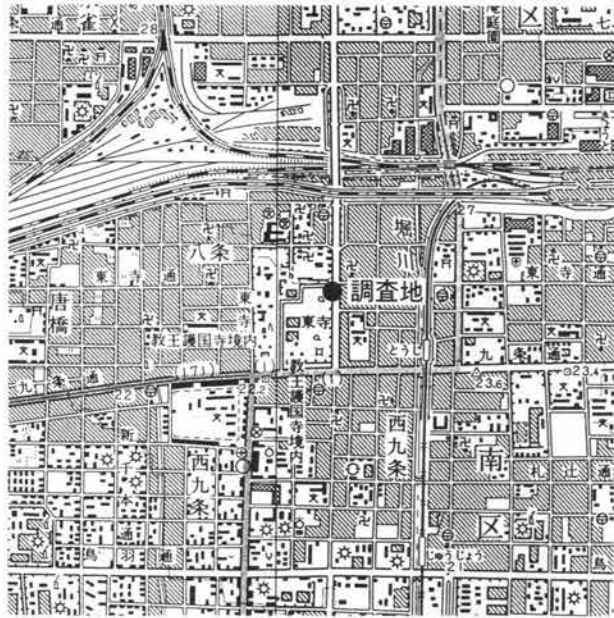
注2 豊栖 聡 齊藤津明 小瀬えり子 菊池史憲 堤 多聞 小瀬博史 荒木末子 高田真由美 高田由美子 高田えみ子 竹岡しげ子 竹岡喜代子 荒木和子 金本米子 山脇キミエ 竹岡智加代 松本芳雄 明田安男 土井正文 小瀬英子 井木久子 小瀬ちよ子 畑 欽子 竹岡奈保美 竹岡和子 三沢繁忠 見須俊介 吉田高穂 竹上美代子 竹上てる 田中寛治 宮崎紗知子 齊藤澄代 吉岡孝博 横山成己 西川悦子 正田季美枝 林 秀子

## 4. 史跡教王護国寺境内発掘調査概要

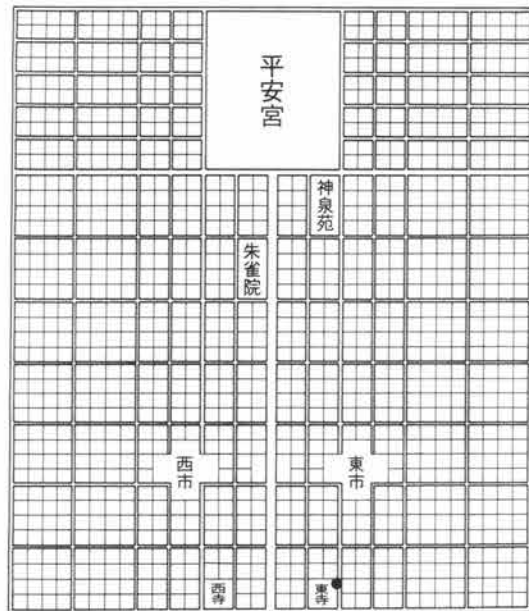
### 1. はじめに

調査地は、京都市南区九条町399に所在する。平安京左京九条一坊にあたり、平安京遷都時に官寺として建立され、弘仁14(823)年に嵯峨天皇から空海に与えられ「教王護国寺」と称した東寺の境内地に相当する。調査地の位置は、重要文化財慶賀門の南東側隣接地で、東側築地の外側である。調査地の南側に隣接する京都市消防局南消防署東寺出張所の地点が、かつて平安博物館により調査され、築地基壇や礎石・堀などが検出されている<sup>(注1)</sup>。

今回の調査は、東寺前警察官派出所の新築工事に伴うもので、京都府警察本部の依頼を受けて実施した。調査面積は約40㎡である。調査にかかわる経費は、すべて京都府警察本部が負担した。調査にあつたては、京都府警察本部・九条警察署・教育庁指導部文化財保護課をはじめ、東寺・(財)京都市埋蔵文化財研究所・京都市消防局南消防署東寺出張所などからご協力いただいた。現地調査

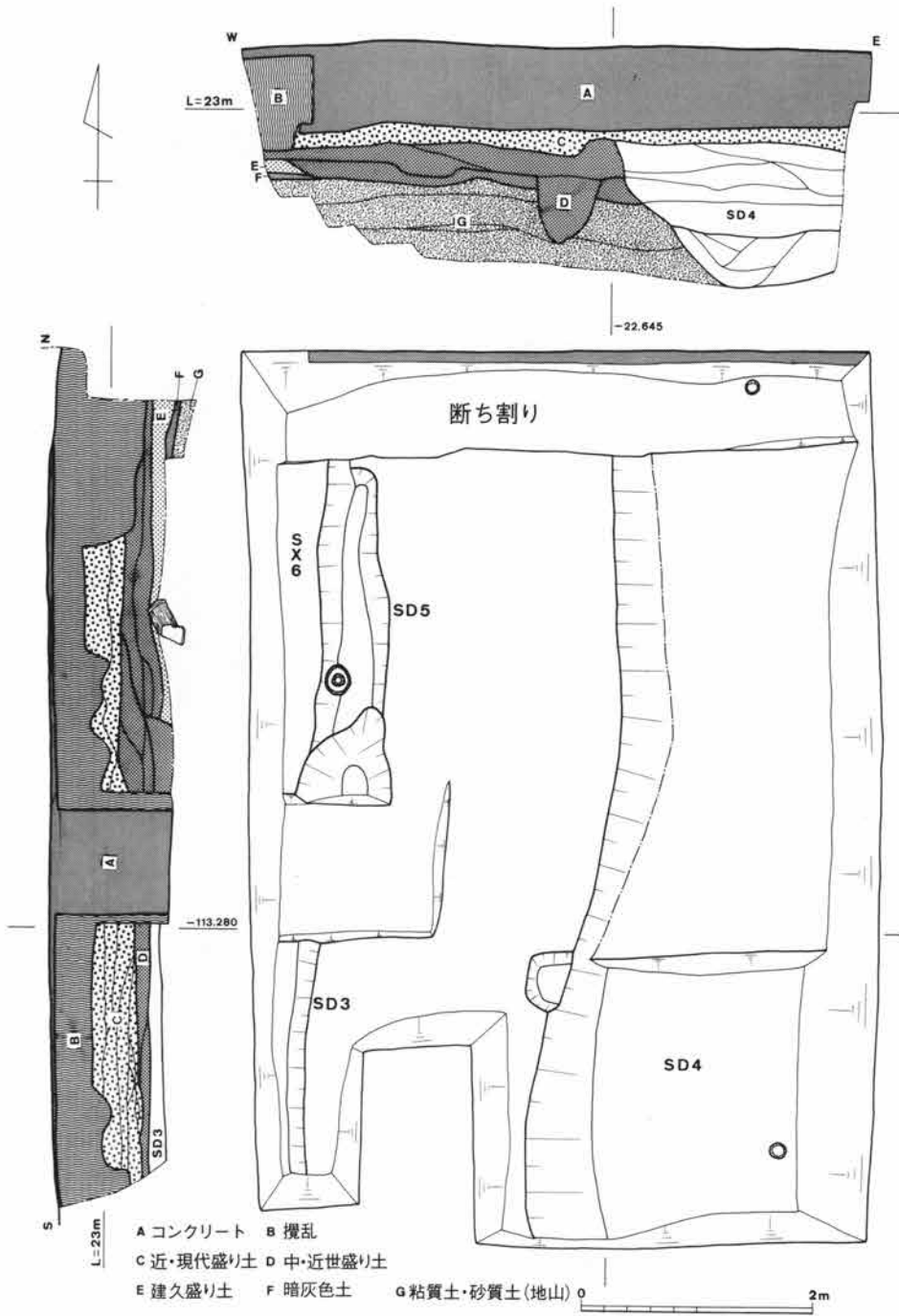


第44図 調査地位置図(1/25,000)



第45図 平安京条坊図

においては、有志の方々に協力していただいた。記して謝意を表したい。<sup>(註2)</sup>



第46図 調査地実測図



## 2. 調査内容

調査は、派出所旧建物の解体を待って、平成3年6月10日から開始した。旧建物のコンクリート基礎及び旧建物に伴う盛り土を小型重機で慎重に除去し、その後、人力で掘削・精査を行った。調査は、7月15日まで実施した。この間、7月4日に関係者説明会を行った。7月9日には、当センター理事藤井 学氏が現地を視察され、ご教示をいただいた。

調査地は、旧建物のコンクリート基礎や現代のゴミ穴などの攪乱があり、ことに、南東側で著しい。慶賀門に近い北西側及び築地に近い西側では、近世以前の盛り土が、部分的に残る。第46図の層序は、A層がコンクリート、B層が攪乱、C層が近・現代盛り土である。D層は、中・近世盛り土で、数回にわたり盛り土されている。E層から、12世紀末頃の完形の瓦器碗(第47図12)が出土した。調査地北側にある慶賀門は、建久年間(1190~99)の伽藍再興時に建立されており、この層はそれに関連すると考えられる。F層は無遺物のシルト層である。地山の一部ないしは建久年間以前の盛り土の可能性も考えられる。G層は、地山で灰青色・灰黒色のシルトと砂の互層である。今回の調査では溝状遺構などを検出したが、調査地が狭いため、性格は必ずしも明確ではない。以下、主な遺構を略述する。

**溝S D4** 調査地東側で検出した南北方向の大規模な堀状の溝である。東側肩部は調査地外になるため、幅は不明である。深さは約1.3mである。北側の断ち割りの溝底部にあたる部分から、近世陶器(第47図14)が出土している。なお、この溝は、後に深さが約0.8mになり、南側では幅が約0.8m狭くなることを確認した。

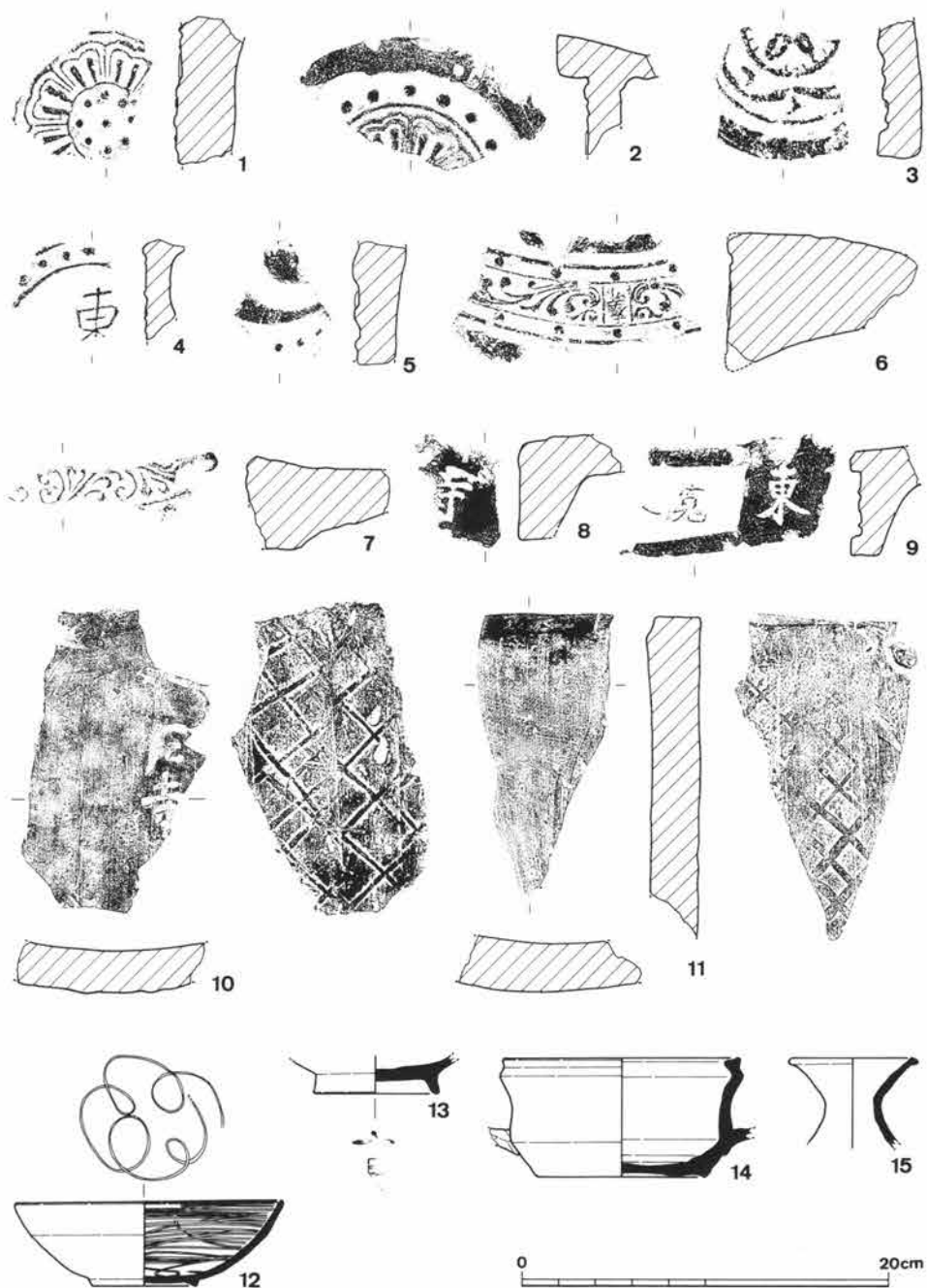
**溝S D3** 調査地南西側で検出した南北方向の溝である。検出長は約2m・深さ約10cmである。西側肩部は調査地外になるが、部分的な断面観察により、幅約50cmで西側肩部がやや高くなることを確認した。この溝は、D層中に掘り込まれている。溝埋土は礫混じりの土で、上部を叩き締められた状態であった。現在の築地の雨落位置よりわずかに東側に寄るがほぼそれに沿っており、中・近世の築地に伴う雨落溝と考えられる。

**溝S D5** 調査地北西側で検出した南北方向の溝である。検出長約2.3m・幅約40~60cm・深さ約10cmである。E層から掘り込まれている。溝S D3よりも東側に寄るが、方向はほぼ同じであり、建久年間築造の築地に伴う雨落溝の可能性はある。埋土から軒丸瓦(第47図3)が出土した。

**基壇状遺構S X6** 溝S D5西側のE層部分である。建久年間築造の築地基壇の一部もしくは基壇造成に伴う盛り土の一部とも考えられる。上面から軒平瓦(第48図16)が出土した。

## 3. 出土遺物

今回の調査では、平安時代以降の瓦・土器・陶磁器などが出土したが、近世以降のもの

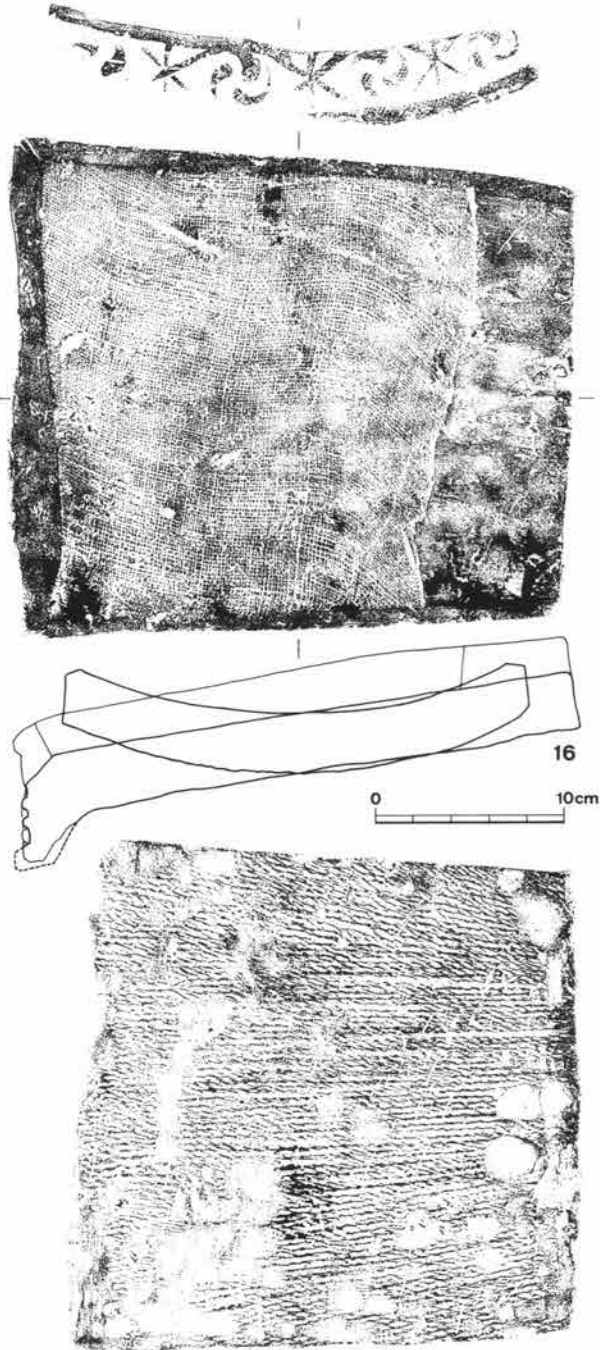


第47図 出土遺物実測図(1)

1・4・5・6・7.中・近世盛り土 2.近世土坑 3.S D5 8・9・10・11.南東側攪乱  
12.建久盛り土 13・14・15.S D4

が多い。以下、出土遺物の一部について略述するが、瓦は、『教王護国寺防災施設工事・発掘調査報告書』の番号を使用することがある。

軒丸瓦1は、中房が輪花形になるもので、上記報告書のNM65と同系のものである。鎌倉時代前期に属するものか。軒丸瓦2は、蓮弁の形状から1と同系とみられる。軒丸瓦3は、尊勝寺跡出土のものと同系とみられ、<sup>(注4)</sup>12世紀後期から13世紀初頭頃に属するものであろう。軒丸瓦4は、瓦当面に「東□」字を持つ。軒丸瓦5は、巴文である。軒平瓦6は、平安時代前期のもので、瓦当中央に天地逆の「左寺」銘がある。上記報告書のNH06-Bと同系とみられる。軒平瓦7は、上記報告書のNH60系で、鎌倉時代前期頃のものともみられる。軒平瓦14は、瓦当面に巴文と\*文を交互に配する。凹面には粗い布圧痕・凸面には縄叩き痕がある。なお、布圧痕は瓦当面にも及ぶ。軒平瓦8・9は、同種のものと考えられ、瓦当面両端に「東寺」銘をもつ。また、9の「寛」字については、



第48図 出土遺物実測図(2)  
16.建久盛り土上(S X6)

寛永・寛文などの江戸時代の元号の一部と考えられる。平瓦10は、凹面に「左寺」銘を押印する。平瓦11は、凹面にヘラ描きの痕跡がある。なお、緑釉瓦小片が1点出土しているが、図示できない。

瓦器椀12は、内面にやや密なミガキが認められるが、外面には認められない。楠葉産の12世紀末頃のものか。灰釉陶器13は、椀の底部で、高台内に墨書痕跡とみられるものがある。香炉14は、近世の信楽焼と考えられる。徳利15は、朝鮮王朝の雑釉陶器で、船徳利形のものである。

#### 4. 小 結

教王護国寺(東寺)の四周を囲む築地に開口する門のうち、蓮華門・慶賀門・北大門・東大門は、建久年間の伽藍再興期に起源をもつ。蓮華門・慶賀門は、当時の姿を良好に留めている。東大門は近世初頭の慶長期に新築に近い修理がなされ、北大門は慶長期に元の北大門・東大門などの古材を再利用して再建されたことが判明している<sup>(注5)</sup>。このような状況ではあるが、現在の寺観の起源が建久年間の伽藍再興期にあることが考えられる。

今回の調査は慶賀門の隣接地点で行い、建久年間の伽藍再興に伴うと考えられる盛り土層などを確認した。しかし、門や築地の直近までは及ばず、それらとの関連は明確でない。

堀状の溝S D3については、平安博物館の調査で検出された堀の北側延長部にあたるとみられる。近世には存在したもので、大宮通の拡張によって埋められたものと考えられる。

今回の調査地は史跡指定地内であり、京都府教育委員会の指導により遺跡保護の観点から、新築建物の基礎が確実に及ばない部分では掘削をとどめた。また、調査中には、北大門の解体修理・地下調査を担当されていた京都府教育庁指導部文化財保護課建造物係の塚原十三雄氏・森田卓朗氏及び同記念物係の山口 博氏から格別のご協力・ご教示をいただいた。文末ではあるが、記して感謝したい。

(引原茂治)

注1 上野佳也・田中勝弘「東寺東側築地外発掘調査報告」(『古代文化』第27巻第1号 (財)古代学協会) 1975

注2 塚本映子・前田暁宏・天岡昌代・丹新千晶・疋田季美子

注3 樋口隆久ほか『教王護国寺防災施設工事・発掘調査報告書』 教王護国寺 1981

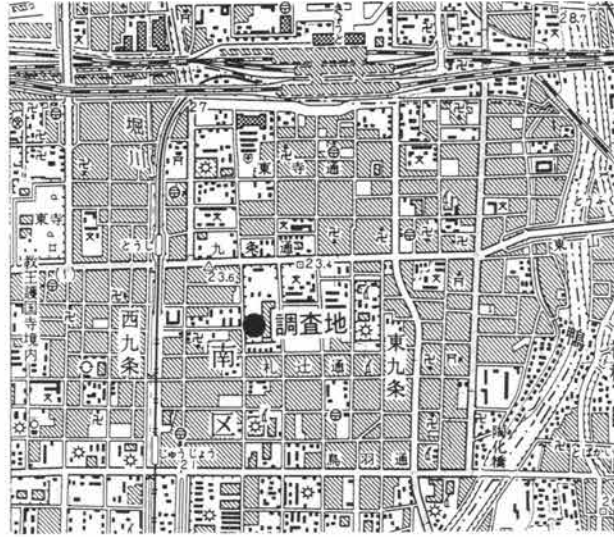
注4 竹原一彦・森下 衛「尊勝寺跡発掘調査概要」(『京都府遺跡調査概報』第23冊 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 1987

注5 京都府教育委員会「重要文化財教王護国寺(東寺)北大門解体修理に伴う調査の現地説明会資料」1991

## 5. 平安京・烏丸町遺跡隣接地発掘調査概要

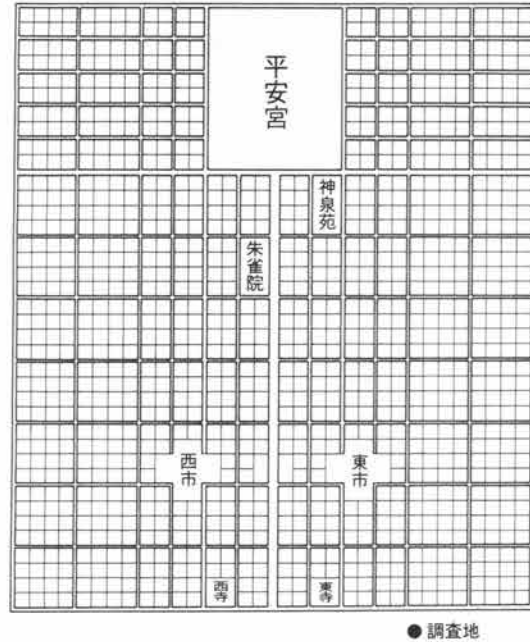
### 1. はじめに

調査地は、京都市南区東九条下殿田町70に所在する。平安京の南限である九条大路及び、縄文時代晩期から中世にかけての遺物散布地である烏丸町遺跡の南側に隣接する。現在は、京都市交通局の市バスターミナルである九条車庫となっている。以前は、市電の車庫でもあった。この九条車庫敷地の南半部が調査対象地である。

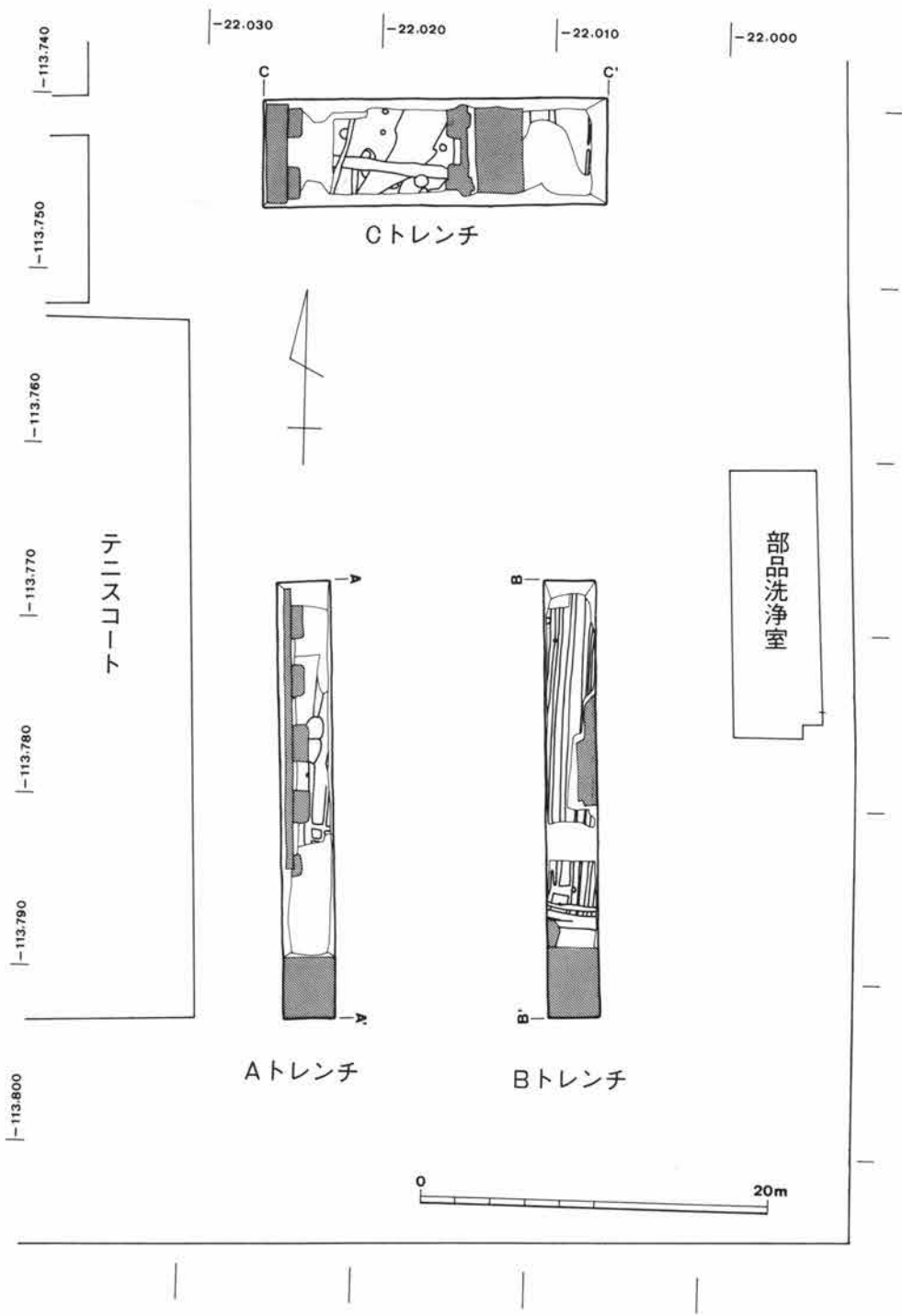


第49図 調査地位置図(1/25,000)

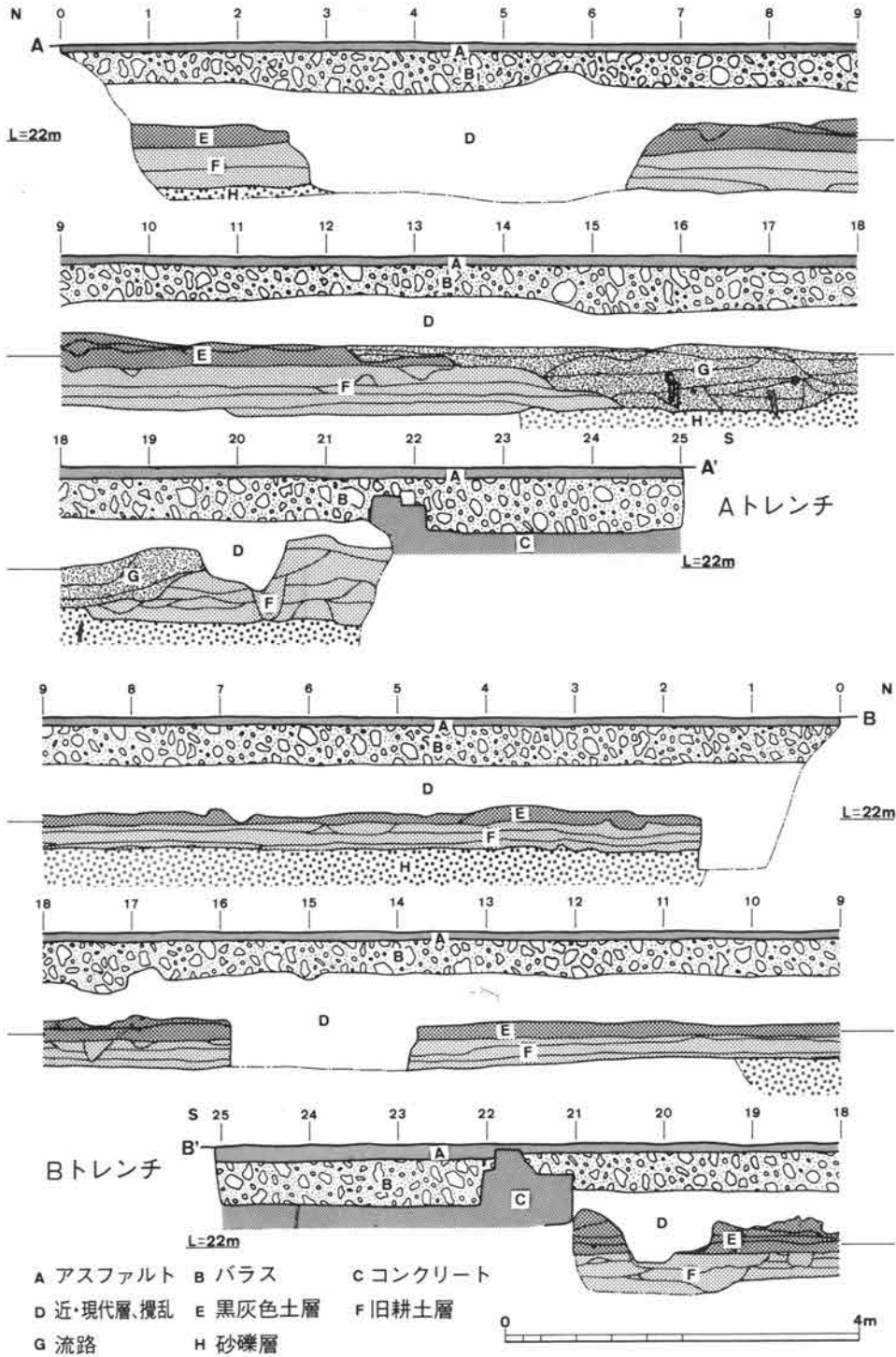
今回の調査は、勤労者総合福祉センター建設に伴うもので、京都府労働部の依頼を受け、遺構・遺物の有無を確認する試掘調査として実施した。調査面積は約270m<sup>2</sup>である。調査にかかわる経費は、すべて京都府労働部が負担した。調査にあたっては、京都府労働部・教育庁指導部文化財保護課をはじめ、京都市交通局・京都市埋蔵文化財調査センター・(財)京都市埋蔵文化財研究所などから協力していただいた。現地調査においては、有志の方々に協力していただいた。<sup>(注1)</sup>記して感謝したい。



第50図 平安京条坊図



第51図 トレンチ配置図

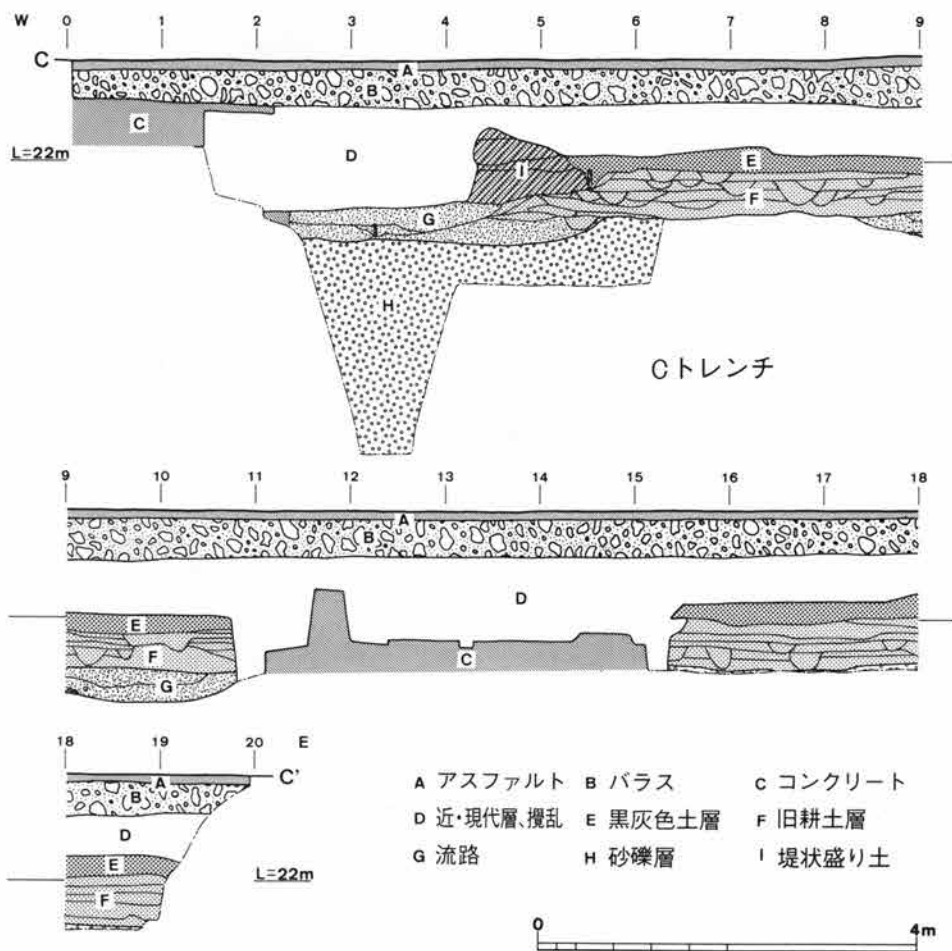


第52図 A・Bトレンチ断面図

## 2. 調査内容

調査は、京都市交通局の市バス駐車場確保のため、対象地を南北に二分して行うことになった。平成3年8月19日から、南半部にA・Bトレンチを設定して掘削を開始した。黒灰色土まで重機で除去し、その後、人力により掘削・精査を行った。9月27日までにA・Bトレンチの調査を終了し、埋め戻しの後、10月1日から北半部にCトレンチを設定し掘削を開始した。同様に、黒灰色土まで重機で除去し、その後、人力で掘削・精査を行った。11月15日までにCトレンチの埋め戻しまで終了し、調査を完了した。この間、11月11日に関係者説明会を行った。

調査地の地下には、市電車庫に伴うコンクリート基礎がところどころに残る。3か所のトレンチの基本的な層序は、次のとおりである。現地表面約1mまでは、アスファルトや



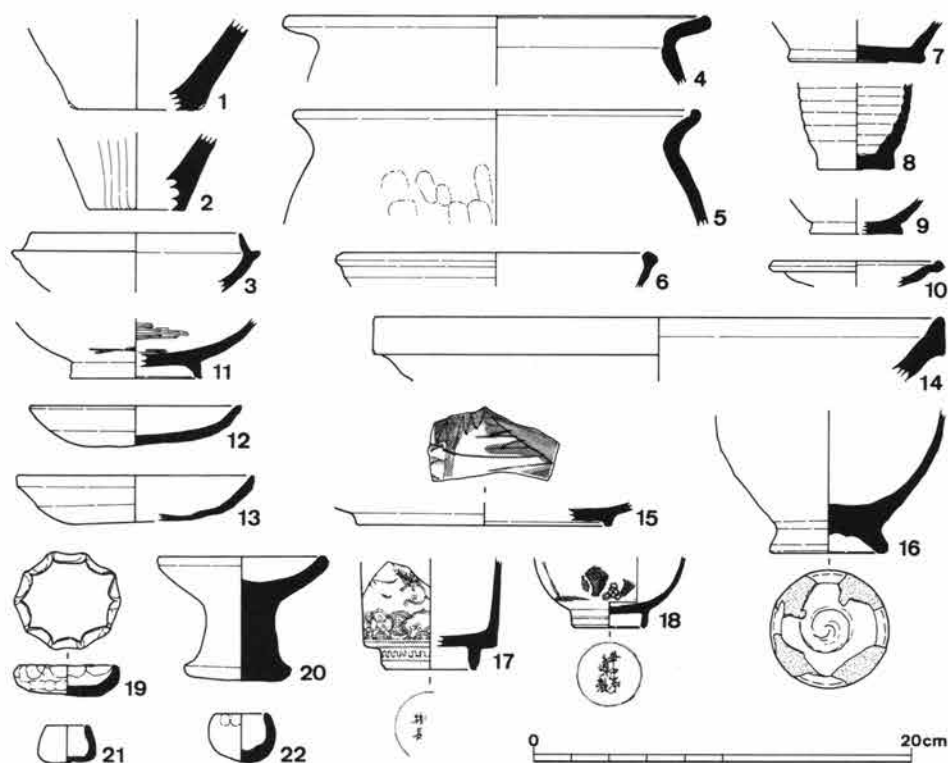
第53図 Cトレンチ断面図



バラスなどの現代の整地層や、市電車庫当時の盛り土及びその解体に伴う攪乱層などである。その下に層厚約20cmの黒灰色土層がある。市電車庫以前には蓮根が栽培されていたという話もあり、それに伴うものか。Cトレンチ西側では、堤状の盛り土とそれに伴う杭列を確認している。その下層に、層厚約50cmの旧耕土層がある。この層は数層に分かれ、それぞれに畑の畝・細い溝・流路などが検出できた。近世の土師器皿小片が含まれており、この層は江戸時代初期以降のものと考えられる。旧耕土層の下は砂礫層である。Cトレンチで確認した限りでは、現地表下約5mまで砂礫層が続く。さらに深くまで及ぶものとみられるが、湧水のため確認できなかった。この層からは、弥生時代から中世にかけての遺物が出土した。

### 3. 出土遺物 (第54図)

弥生土器1・2は、小片であり、かなり摩滅しているため、調整は不明である。須恵器杯身3は、古墳時代後期のもので、陶邑TK43型式並行の6世紀後半頃か。



第54図 出土遺物実測図

- 1・14.Cトレンチ砂礫層 2・6・7・9.Aトレンチ砂礫層 3・5・8.Bトレンチ砂礫層  
 4・10・12.Cトレンチ旧耕土層 11・13・15~17・18~22.Cトレンチ近世流路 18.攪乱

平安時代中期までの遺物としては、土師器甕4・5、須恵器鉢6、須恵器壺7・8、緑釉陶器椀9などがある。須恵器鉢6は、10世紀後葉頃の篠窯の製品とみられる<sup>(注2)</sup>。

土師器皿10は、11世紀末頃のものともみられる。土師器椀11は、11～12世紀頃の瀬戸内系のものともみられる。土師器皿12は、11世紀頃のものともみられる。土師器皿13は、12世紀後半頃のものともみられる。鉢14は、13世紀頃の東播系の製品ともみられる。青花磁器15は、中国製である。

近世の遺物は、多数出土している。椀16は、高麗茶椀を模した肥前陶器ともみられる。17世紀中葉頃か。高台に砂目の目跡が残る。染付磁器17は、「祥瑞」を模した肥前磁器ともみられる。高台内に「……精製」銘がある。椀18は、色絵磁器である。高台内に「華中亭道八」銘がある。京焼か。土師器19は、京都木野産の焼塩壺で口縁部を輪花形に折り込む<sup>(注3)</sup>。土師器20は、燈明皿の台か。ミニチュア土師器21・22は、玩具か。

#### 4. 小 結

今回の調査では、近世から近代にかけての耕作地の遺構を検出したのみで、平安京及び烏丸町遺跡に関連する遺構は存在しなかった。旧耕土層下の砂礫層は、鴨川などの氾濫によって堆積したものと考えられる。中世以前の遺構については、過去に存在した可能性は否定できないが、仮に過去に存在していたとしても、近世以前の河川の氾濫により流出したものとも考えられる。砂礫層からの出土遺物は、上流からの流れ込みともみられる。

(引原茂治)

注1 塚本映子・田中あゆみ・岩佐聖子・前田暁宏・山本紀子・久保田拓磨・田井丈士・丹新千晶

注2 伊野近富「篠窯原型と陶邑窯原型の須恵器について」(『京都府埋蔵文化財情報』第37号 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 1990

注3 渡辺 誠・南 博史ほか「平安京土御門烏丸内裏跡-左京一条三坊九町-」(『平安京跡研究調査報告』第10輯 (財)古代学協会) 1983

## 6. 燈籠寺遺跡第5次発掘調査概要

### 1. はじめに

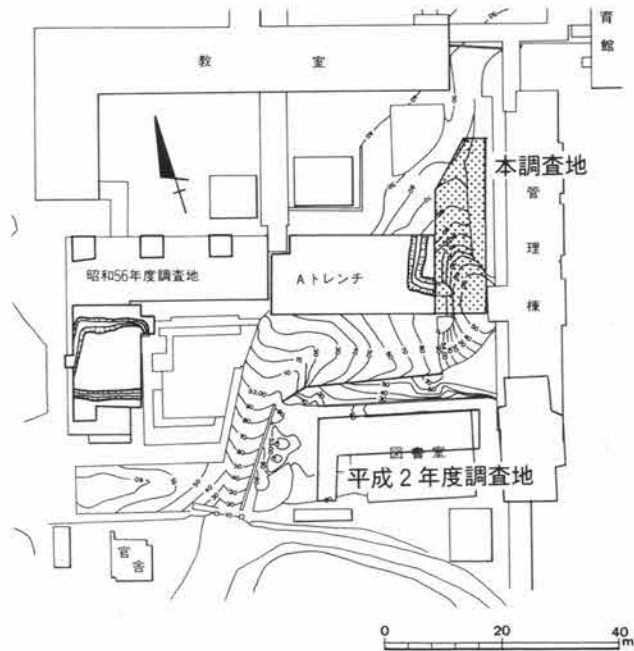
今回の調査は、京都府相楽郡木津町大字燈籠寺小字内田山に所在する燈籠寺遺跡のうち、内田山A-3号墳を中心とした発掘調査である。調査地は京都府立木津高等学校の校地内にあり、埋設管敷設工事に先立って、約230㎡の面積を調査した。調査期間は、平成3年6月4日から平成3年7月20日までである。現調査地は、京都府教育委員会の依頼を受けて、当調査研究センター調査第2課調査第3係長小山雅人・同調査員竹井治雄が担当した。調査に係る経費は、京都府教育委員会が負担した。なお、京都府立木津高等学校、京都府教育委員会、木津町教育委員会、京都府立山城郷土資料館など関係諸機関から御協力・御教示をいただいた。また、現地作業には、作業員・整理員・学生諸氏の協力があった<sup>(注1)</sup>。

### 2. 調査経過

燈籠寺遺跡・内田山古墳群では過去の調査で、弥生時代から近世の遺構・遺物がみつかった。そのうち内田山A3号墳は、燈籠寺遺跡第2次<sup>(注2)</sup>発掘調査で西辺・南辺溝の一部がみつかり、今回の調査は墳丘及び主体部の規模等を明らかにすることを目的とした。

今回の調査地は、管理棟の正面にあり、標高は53～54mを測る。トレンチの設定は、埋設管工事の範囲内にとどめ、昭和59年度調査の溝の続きが検出できるようにした。

掘削は、まず厚さ0.2



第55図 トレンチ配置図

～0.3mのアスファルト及びコンクリート敷きを重機で除去した。以下、旧表土、遺物包含層、遺構等を手掘りで調査した。検出遺構は、現代攪乱層を除いた黄褐色上面で確認した。

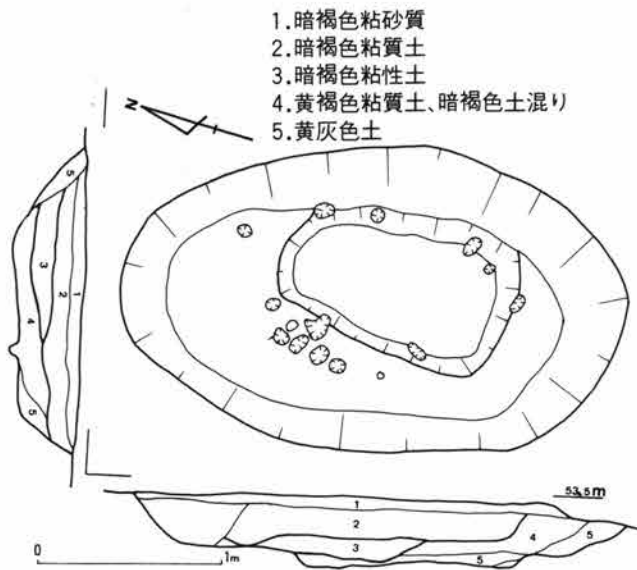
### 3. 検出遺構

今回の調査で検出した遺構は、上記の内田山A-3号墳の周濠、弥生時代の土坑、奈良時代の土坑、柱穴等である。古墳の周濠は2本検出したが、南側の濠(SD02)の残りがよいのに比べ、北側の濠(SD01)は、大きく攪乱されていた。

**土坑SK01** トレンチ南半部、濠SD02によって一部欠損しているが、長楕円形を呈している。長軸2.8m・短軸1.5m・深さ0.4mを測る。断面は浅い椀状を呈するが、中央部分で5cmほど深くなる。この付近では直径5～10cm・深さ5～10cmの小穴が10数個あった。堆積土は暗褐色土である。土坑の堆積土は主に暗褐色土で、部位によっては粘質土と砂質土に分かれ、焼土、炭化物、腐植質が混在する。第4層は黄褐色粘質土が主になり、やはり焼土、炭化物が混じる。出土遺物には、弥生時代の甕・壺の細片がある。

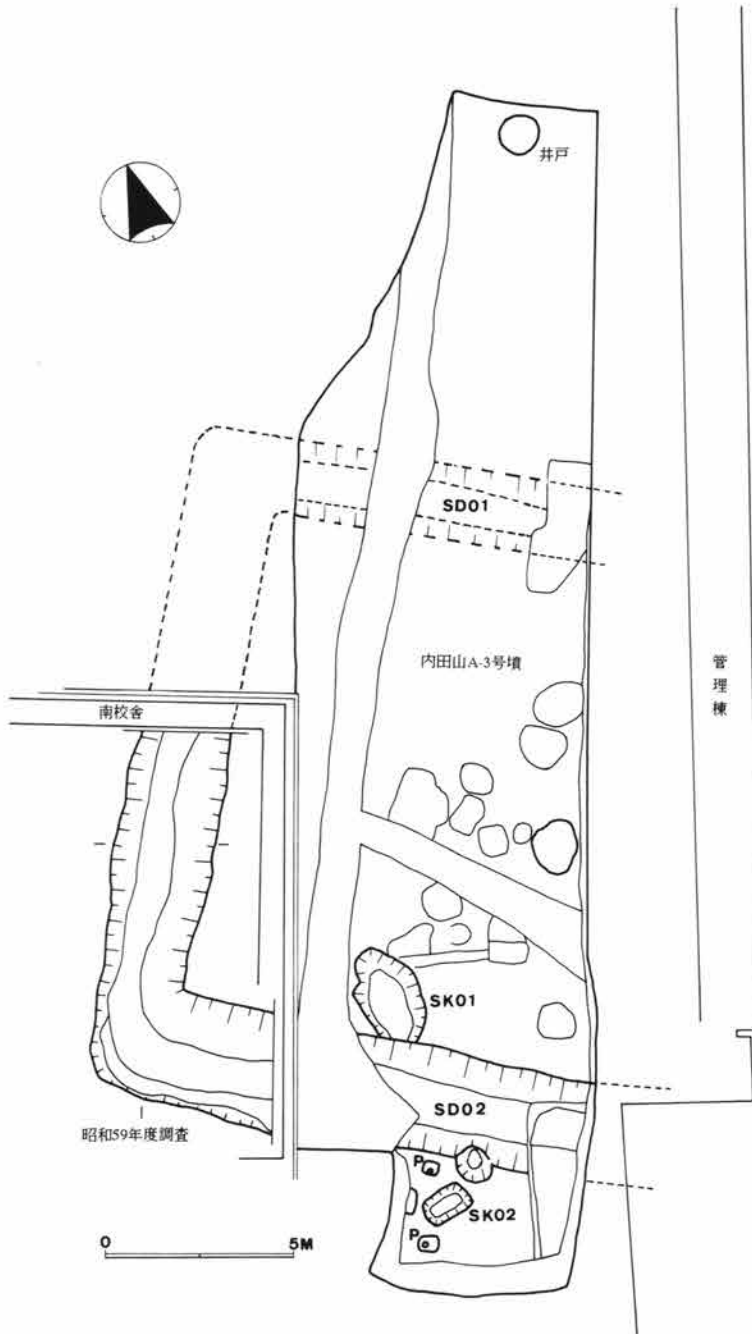
**濠SD01** トレンチ北半部よりに位置するが、明瞭な平面形態を検出できなかった。堆積層は、暗褐色がわずかに残るが、茶褐色粘質土、灰色泥土、パラスが混在し、廃材、番線等があった。このように現代攪乱のため周濠本来の土層は失われ、周濠の規模・位置等は不明瞭である。出土遺物には、須恵器・土師器・埴輪等があった。

**濠SD02** トレンチ南半部、東西方向の溝である。溝幅2.8～3m・深さ0.6mを測り、断面「U」字形を呈する。溝内の堆積土層は大きく3層に分かれる。上層は灰褐色粘性砂質土(第59図1・2)で、



第56図 土坑SK01

須恵器が含まれる。2では下層の暗褐色土も混在しており、人為的な堆積土を示している。中層は、暗褐色粘質土(3・4)が主となり、4では茶褐色土が入る。出土遺物には円筒埴輪、奈良時代の土馬が出土した。特に4に集中している。下層は茶褐色粘質土6で黄



第57図 遺構配置図

褐色土、炭化物が含まれる。出土遺物には埴輪がある。第59図7・8層は墳丘及び外周の崩落土である。9は、固くしまった地山である。

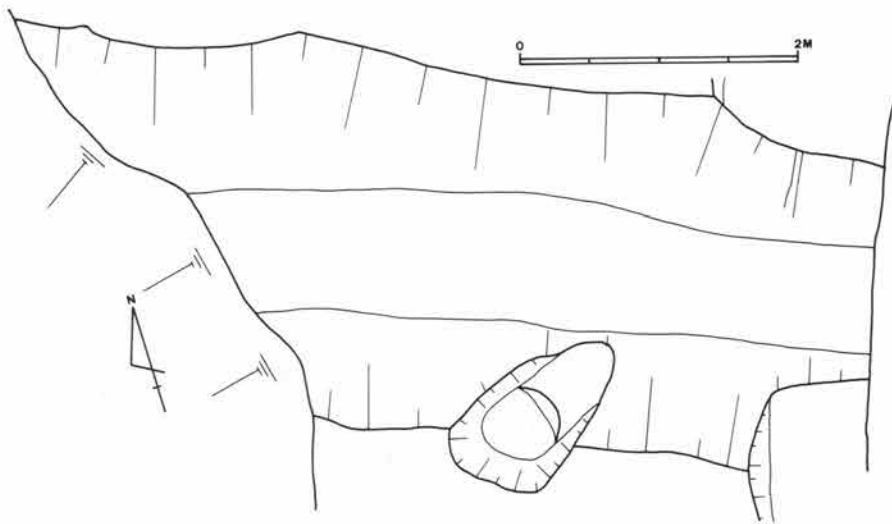
S D01とS D02の溝心々間は16~17mを測る。出土した埴輪は、5世紀前半に属し、その種類には円筒埴輪、朝顔形埴輪がある。

土坑S K02 周濠S D02の南側で検出した隅丸方形を呈する土坑である。長辺1.2m・短辺0.8m・深さ0.15mを測る。断面逆台形で、堆積土は灰褐色砂質土を呈し、S D02の上層と似る。時期は不明。

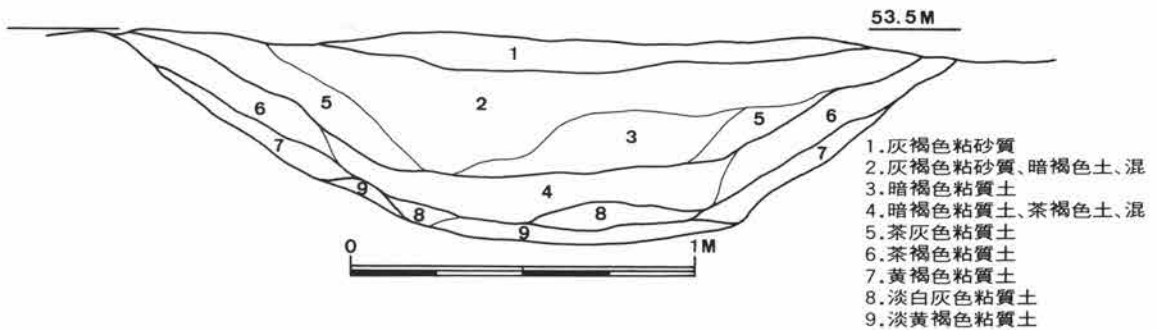
柱穴 トレンチ南端部で南北2個の柱穴を検出した。柱穴は、隅丸方形を呈し一辺0.4~0.5mを測る。柱間寸法は2.1m(7尺)である。出土遺物には、土師器の細片があった。

#### その他の遺構

トレンチ内各所に近・現代の井戸、電柱の掘形、木の根等の痕跡が多くあって、内田山



第58図 濠S D02平面実測図



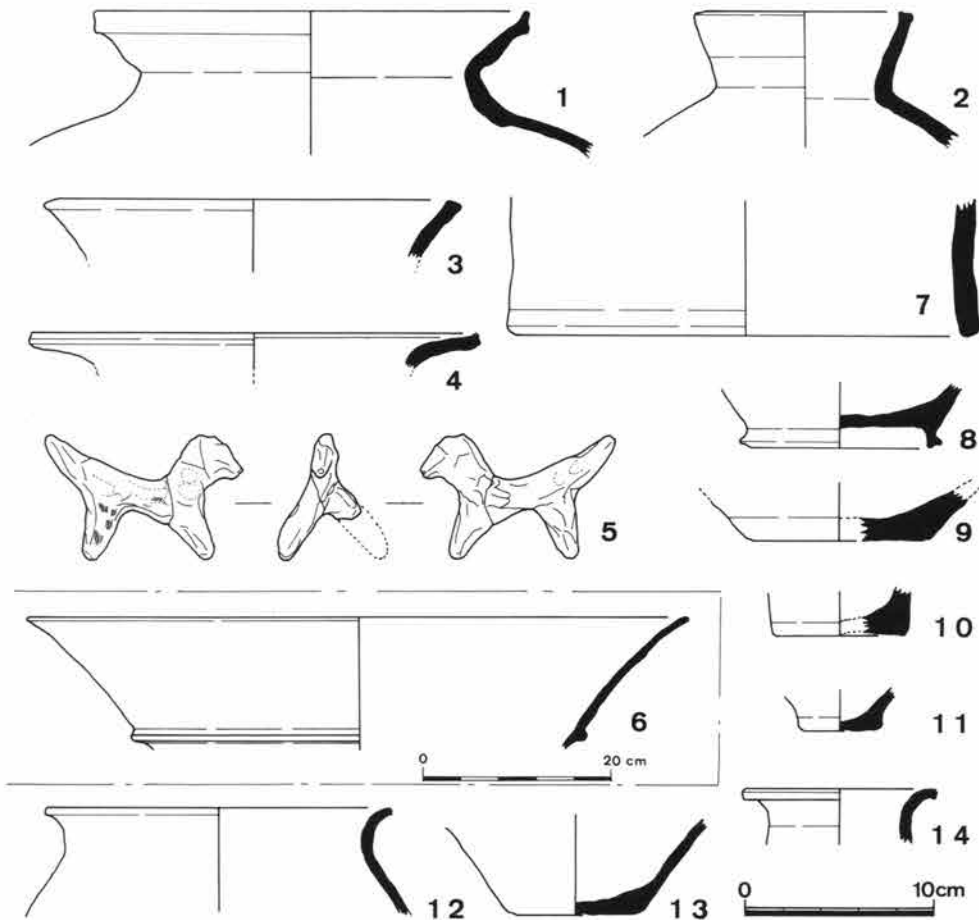
第59図 濠S D02断面実測図

A-3号墳の墳丘及び周濠を大きく攪乱している。そのため、墳丘部の高さは明らかではなく、主体部等は検出することができなかった。

4. 出土遺物(第60図1~14)

溝SD01(第60図1~3)

1は、須恵器の甕である。口径23.0cmを測り、口縁部は斜め上方に開き、端部は直上のびて丸くおさまる。体部外面は平行叩き痕、内面には青海波文が残る。2は、須恵器の壺である。口径11.6cmを測り、口縁部は直上ぎみに立ち上がる。端部は内側に若干肥厚する。口縁部の内外面はヨコナデ調整を施し、体部内面は青海波文が消されている。3は、2に似た須恵器の壺である。端部は平坦面をもつ。1~3は、奈良時代のものである。



第60図 出土遺物実測図

溝S D02(第60図4～8)

4は、土師器の甕である。口径23.8cmを測り、口縁部は横方向に大きく開き、端部は上方で丸くおさまる。口縁部内側には横方向の粗いハケ目の痕跡を残す。5は、赤褐色を呈する土馬である。体長10.5cm・馬高6.3cmを測る。調整は、指押さえとナデによる。8は、須恵器の壺の高台である。口径10.8cmを測る。内外面ともナデ調整である。4・5・8は、奈良時代のものである。

6・7は、埴輪である。6は、口径70cmを測る朝顔形埴輪である。端部は斜め上方に丸くおさまる。外部下段の突帯は断面台形状を呈し、きれいに1周する。色調は白味がかった褐色である。7は、口径25.2cmを測る円筒埴輪の基部である。端部は若干平坦面をもつが丸くおさまる。色調は褐色を呈する。

土坑S K01(9～13)

9～11・13は、弥生土器の壺・甕の底部である。甕の底径4.5～9.8cmを測る。12は、弥生土器の壺である。口径18.3cmを測り、口縁部は外傾しながら開き、端部は平坦ぎみにおさまる。調整は、頸部外面はハケの後ナデ、体部外面はタテハケ目が残る。14は、弥生土器の広口壺である。口径10.4cmを測る。口縁部は横方向に外傾し、端部は垂下しておさまる。これらの土器は、弥生時代中期に比定される。

5. ま と め

内田山A-3号墳の南辺と北辺の溝を検出したことにより、墳丘の大きさが一辺16m前後であることを確認できた。古墳の築造時期は出土した埴輪から5世紀前半で、墳丘を含めた濠が最終的に埋まった時期は奈良時代と考えられた。これは、第2次調査の結果を追認するものであった。この濠の埋没は、南半にある奈良時代の土坑、柱穴等を考慮すると人為的なものであると考えられる。

弥生時代の土坑は、前年度調査の方形周溝墓<sup>(註3)</sup>と考え合わせ、墓域の広がりを知る上で貴重な資料である。

(竹井治雄)

注1 小野紀男・岩本 貴・小田栄子

注2 「燈籠寺遺跡第2次発掘調査概要」(『京都府遺跡調査概報』第16冊 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 1985

注3 「燈籠寺遺跡第4次発掘調査概要」(『京都府遺跡調査概報』第16冊 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 1991



## 7. 樋ノ口遺跡発掘調査概要

### 1. はじめに

本報告は、平成2年度・3年度に実施した、京奈バイパス道路建設事業に伴う発掘調査の概要である。

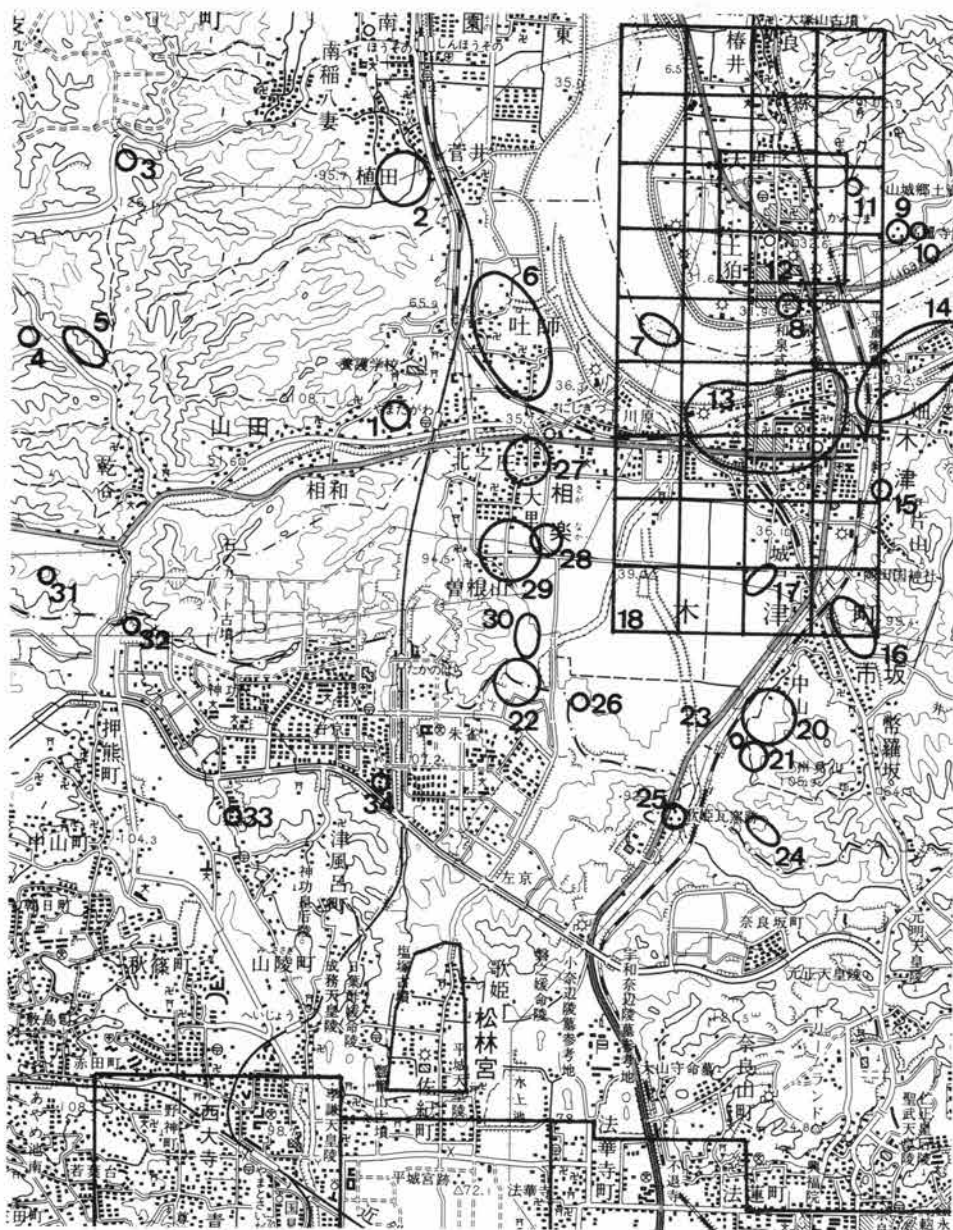
調査対象となった樋ノ口遺跡は、本来は京都府相楽郡木津町大字山田小字樋ノ口他に所在する。しかし、河岸段丘上の遺物散布地であり、遺跡の広がりが予想されたため、日本道路公団大阪建設局の依頼を受け、当調査研究センターが試掘調査及び本格調査を実施した。試掘調査トレンチの内、第1・2・4～6トレンチが大字山田小字下河原に、第3トレンチは相楽郡木津町大字相楽小字城西にそれぞれ設定した。その結果、第3トレンチで遺構の存在が確認され、本格調査を実施した。トレンチを拡張したため、調査地は相楽郡精華町大字山田小字心蓮寺にも及んだ。その後、第3トレンチの北方にも遺跡の広がりが予想されたので、精華町大字山田小字心蓮寺に第7トレンチを設定した。これらの調査を担当したのは、平成2年度は当調査研究センター調査第2課調査第2係長辻本和美と同主任調査員伊野近富で、平成3年度は調査第2係長奥村清一郎と伊野である。

調査対象範囲は、約5,400㎡であったが、試掘調査面積は約332㎡で、本格調査は約1,100㎡である。現地調査は、平成3年3月4日から7日までと、同年4月15日から8月8日まで(第3トレンチ)、及び9月18日から26日(第7トレンチ)までである。その後、平成4年3月末日まで整理作業を実施した。現地説明会は7月20日に実施した。

調査中は、奈良国立文化財研究所、木津町教育委員会や精華町教育委員会、日本道路公団、京都府教育委員会をはじめ、関係諸機関に大変お世話になった。また、調査補助員や整理員、作業員に多大な労苦をかけた。記して感謝したい。<sup>(注1)</sup>なお、発掘調査にかかる費用は、全額日本道路公団が負担した。

### 2. 位置と環境

調査地は、奈良県境に近いところにあり、約300m東側には近鉄山田川駅がある。立地は、木津川に注ぐ山田川によって開析された、幅約400mの谷の北東端にある。そこは、幅約40mの河岸段丘が東西方向にのびており、その東端に近いところにトレンチを設定した。また、段丘下にも設定した。



第61図 調査地周辺遺跡分布図(1/50,000)

- |           |           |                |             |              |             |
|-----------|-----------|----------------|-------------|--------------|-------------|
| 1. 樋ノ口遺跡  | 2. 畑ノ前東遺跡 | 3. 煤谷川窯跡       | 4. 西出合遺跡    | 5. 金前遺跡      | 6. 吐師遺跡     |
| 7. 木津北遺跡  | 8. 泉橋寺    | 9. 高麗寺跡        | 10. 高麗寺瓦窯跡  | 11. 高井出窯跡    | 12. 山城国府推定地 |
| 13. 木津遺跡  | 14. 上津遺跡  | 15. 片山遺跡       | 16. 文廻池遺跡   | 17. 八後遺跡     | 18. 恭仁京     |
| 19. 古川遺跡  | 20. 瓦谷遺跡  | 21. 上人ヶ平遺跡     | 22. 音如ヶ谷遺跡  | 23. 市坂瓦窯跡    | 24. 瀬後谷遺跡   |
| 25. 歌姫瓦窯跡 | 26. 辰ヶ坪遺跡 | 27. 相楽遺跡       | 28. 八ヶ坪遺跡   | 29. 曾根山遺跡    | 30. 大島遺跡    |
| 31. 西ノ宮古墳 | 32. 押熊窯跡  | 33. 奈良山51・52号墳 | 34. 奈良山53号墳 | 35. 音如ヶ谷瓦窯跡群 |             |

奈良時代は山背<sup>やましろ</sup>国相楽郡に位置した。環境としては、平城宮から北へ約4.8kmの地点に相当し、歴史地理学の足利健亮<sup>(註2)</sup>氏による古山陰道と古山陽道併用の道が、調査地の東方約300mに想定されている。また、恭仁宮から西へ7kmの地点でもあり、同氏によって、恭仁宮段階の山陽道として推測されている道は、この開析谷を通ったとされている。

以上のように、古代の環境としては、2つの道の交差点にはほぼ相当しており、抜群であったと想定できる。

### 3. 調査概要

#### (1) トレンチ別概要

各トレンチごとに説明したい。調査方法は表土を重機で掘削した後、人力掘削した。

第1トレンチ 調査対象地のもっとも南に設定したもので、南北20m×東西5mの約100㎡を掘削した。現代の耕作土(深さ約30cm)の下に約10cmの床土があり、この下には砂層が少なくとも約40cmほど続く。この砂層の上部で江戸時代前期の遺物を確認した。地山は不確定である。

第2トレンチ 面積100㎡(南北20m×東西5m)。現代の耕土と床土が約30cmほどある。その下では、灰褐色砂質土層がところどころで確認できた。この土層は、溝の埋土と思われる。中・近世の土師器等が出土した。地山は不確定である。

第3トレンチ 面積100㎡(南北20m×東西5m)。但し、これは試掘段階である。他の調査地とは異なり、ここでは比較的多くの遺物が出土し、はっきりとした地山が確認できた。

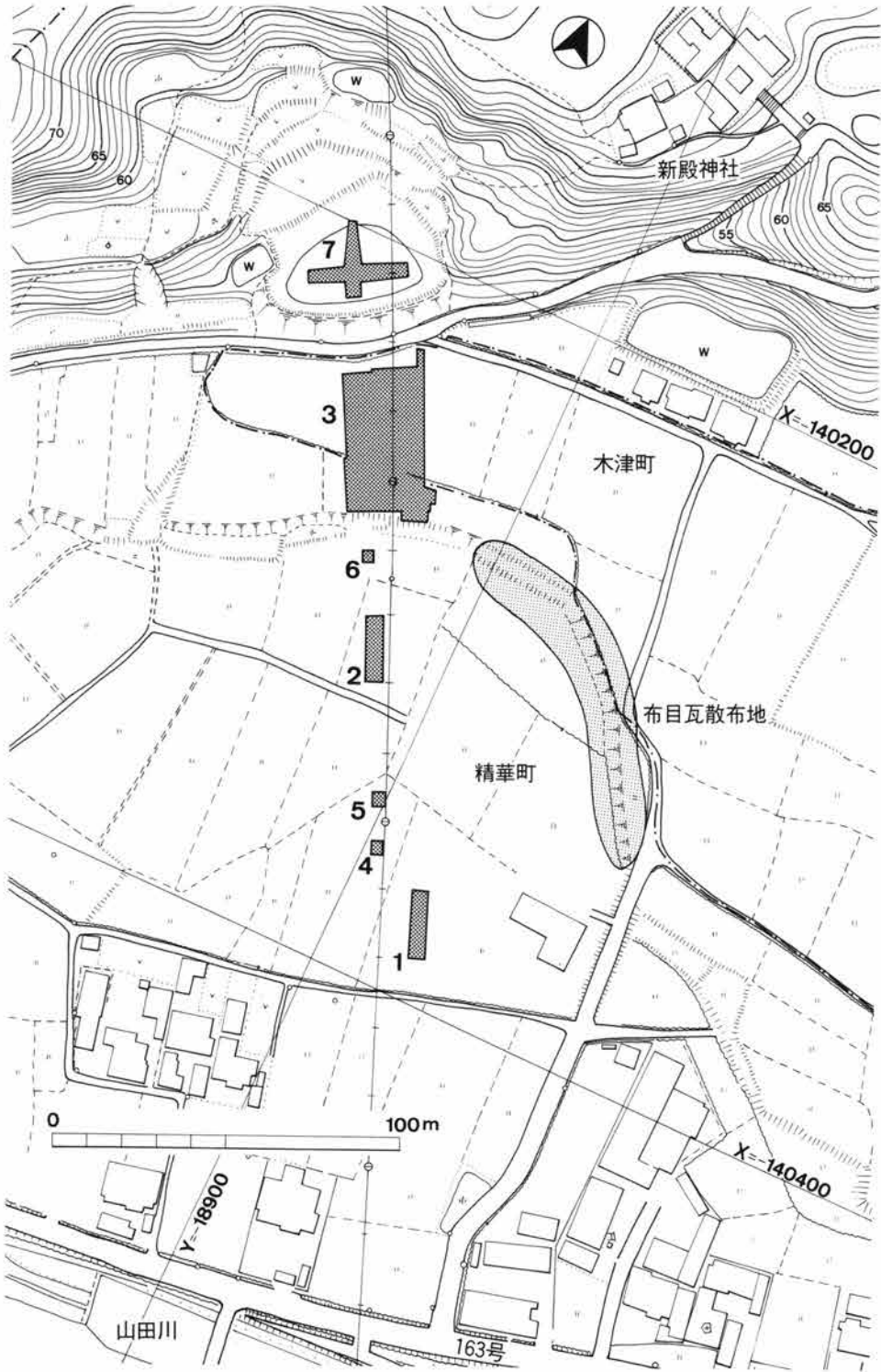
現代の耕作土と床土が30cmほどあり、この下に中・近世時期に相当する灰褐色粘性砂質土層(厚さ約10cm)がある。更にこの下には、灰色粘性砂質土層(厚さ10cm)が認められ、この土層が古代に相当するものと考えられた。この土層の下に黄色粘土の地山がある。

第4・5トレンチ いずれも4m方格(面積16㎡)のトレンチである。現代の耕作土と床土(厚さ約10cm)の下は砂層である。地山は不確定である。

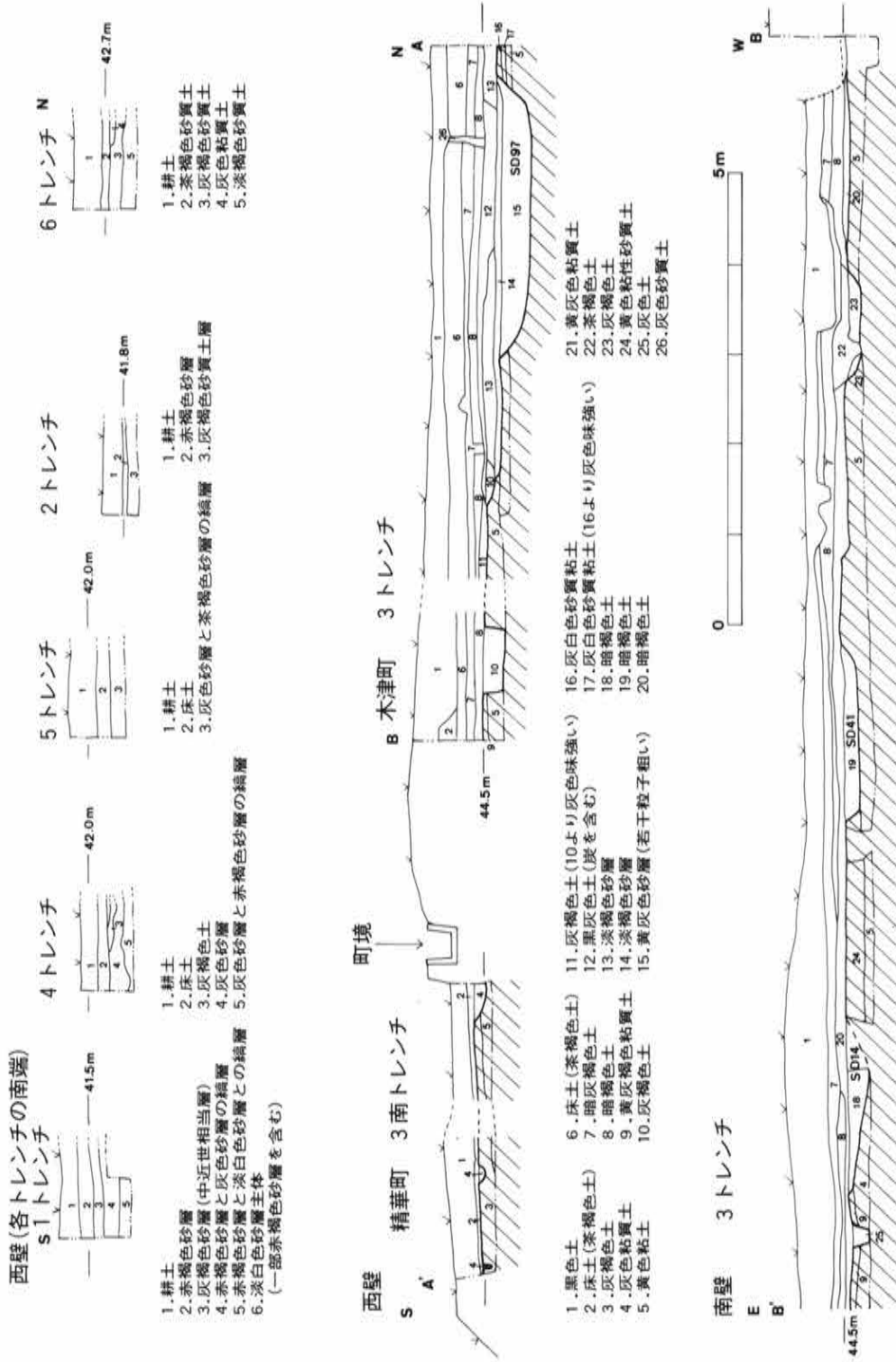
第6トレンチ もっとも段丘に近いところに4m方格のトレンチを設定した。現代の耕作土と床土が約40cmほどある。その下に中・近世に相当する灰褐色粘質土が約15cmほどあり、その下に淡褐色砂質土がある。これが洪水層である。

第7トレンチ 第3トレンチの北方の池、及びその周辺に「十」字形のトレンチを設定した。面積は約300㎡である。また、池の周辺は約60㎡である。池の中ではヘドロの下が地山であり、遺構はなかった。周辺も同様である。この池は、大正時代頃に造成されたもので、この時点で削平されたと思われる。

では、第3トレンチの本格調査の概要を以下で述べたい。



第62図 トレンチ配置図



第63図 第1～6トレンチ土層断面図

第3トレンチ(本格調査) 現代は水田と畑として使用されていた。行政区は、段丘上で分割されている。北の道から南部の水路までが木津町、それ以外が精華町(第63図)である。調査用の方格は道路中心線に沿って設定した。4m方格で東西軸を数字、南北軸をアルファベットで表示し、北東隅がその地区を示す。第VI座標系とはN23°19'Wを示す。

現代層を土木機械で除去した後、人力で掘り下げた。その結果、地表下約40cmで中世頃の耕作跡が検出された。方向は真南北に近い溝状遺構で、おそらく畑の畝跡と思われる。その更に下で奈良時代から平安時代初期の遺構を確認した。包含層は暗褐色系である。なお、水路をはさんだ南部は古代・中世相当層はなく、削平されたらしい。ただ、古代面自体のレベルは北方のそれと同じであり、遺構は確認された。

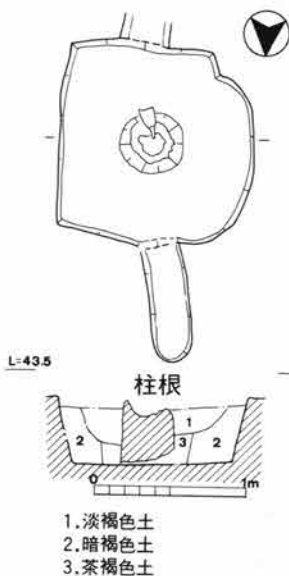
古代の遺構の種類は、溝や土坑や柱穴等である。これらを層位的にみると、整地層の上で2時期に分けられる。ここでは仮りに古い方をA期、新しい方をB期として説明する。

## (2)検出遺構

### ①A期の遺構

この期に確実に属するのは、SB12、SA37、SD41、SB49、SB71、SD93である。後述するSB8とこの期のSA37とは重複関係があり、確実に古いことがわかる。なお、埋土は灰色土である。

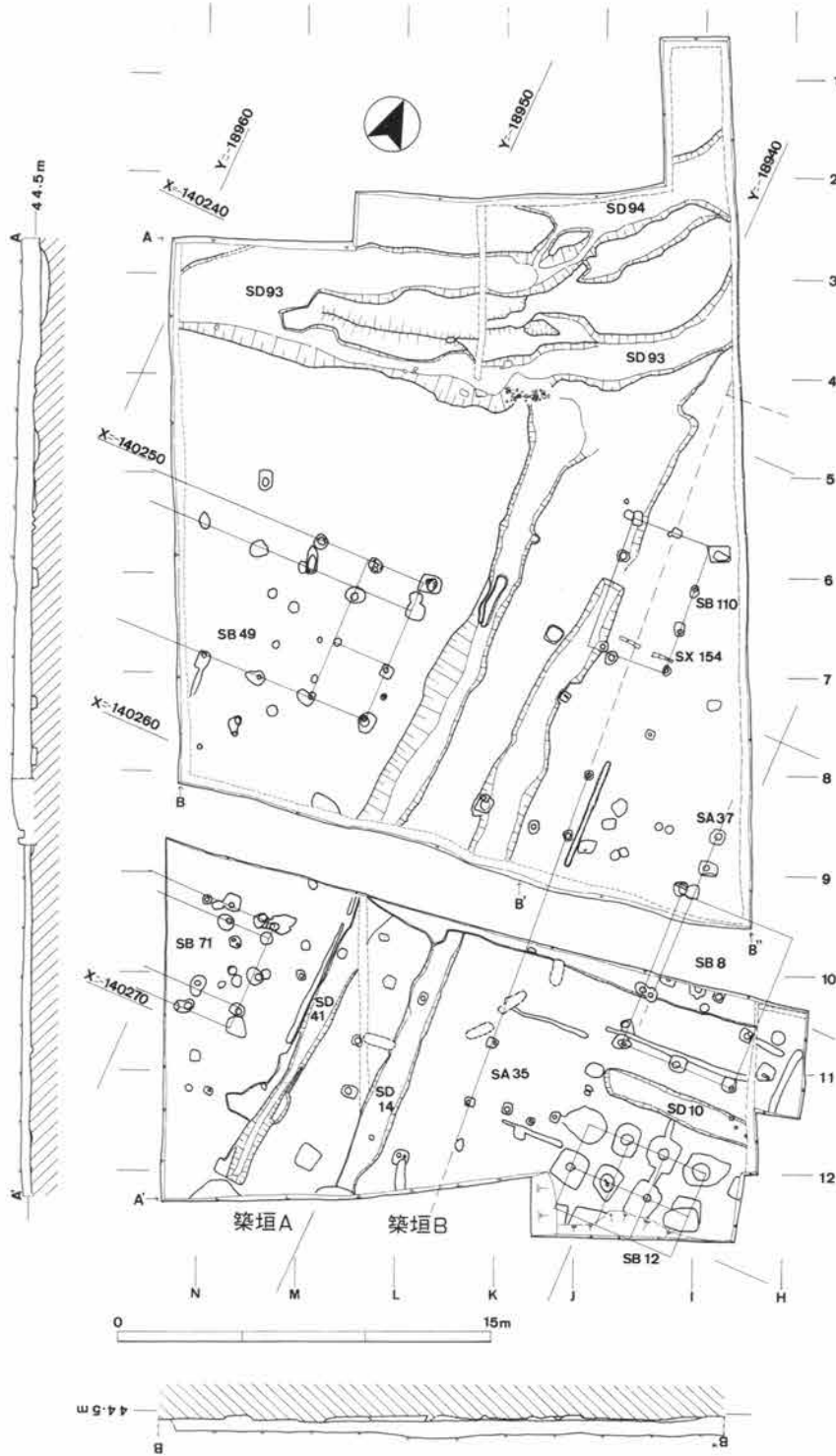
SB12は、調査地南東隅で検出した総柱の掘立柱建物跡である。東西3間(西から1.8m、



第64図 SB12実測図(部分)

1.5m、1.8m)×南北2間(1.8m等間)以上ある。柱の下部がそのまま残ったものもあり、直径は約30cmと大きい。掘形は、一辺1m・深さ0.45mである。第64図は北柱列東から2列目のピットである。掘形の上層は淡褐色土、下層は暗褐色土で、柱付近は茶褐色土である。柱材はヒノキ様である。この建物跡は、柱を抜き取った痕跡がなく、次のB期にも使用されたらしい。N1°20'W。

SD41は、南北方向(N0°30'W)の溝である。幅1～2m・深さ0.15mである。南端はトレンチ内で検出した。また、北端はSD93と接した地点であり、これも検出した。最長35mである。底面はほぼ平坦であるが、北流するようにゆるやかに傾斜している。この溝の東側には平坦面があり、築垣があったと想定した。埋土は暗褐色で、下面は灰白色土である。



第65図 第3・第3南トレンチ平面・断面図



S B49は、東西棟(W1°S)で、柱を抜いた後で瓦を多数、掘形内に廃棄していた。東西3間以上(2.4m等間)×南北2間(2.4m等間)で、北に1間(1.2m)の廂をつけていた。掘形の一辺は、約0.4~0.7m・深さ0.2mである。東西棟の建物跡はもう1棟(S B71)ある。東西1間以上(1.7m等間)×南北2間(1.6m等間)で、北に1間(0.65m)と、南に1間(0.6m)の廂をつけていた。掘形の一辺は0.65m、深さは0.3mである。

S D93は、東西方向の溝である。西流するように掘られていた。西端では一本であるが中央から東は南北2流あり、その一部はS D94と接続している。南側のそれはW9°Sである。幅は1.4~5m、深さは0.3mである。

### ②B期の遺構

この期に確実に属するのはS B8・S D10・S D14である。埋土は黒褐色土である。

S B8は、現地説明会当時南北5間程度と考えていたが、北部の柱穴は柱筋が通らず、柵S A37と把握した。その結果、南北3間程度(2.4m等間)×東西2間(2.4m等間)となった。掘形は、一辺0.55m・深さ0.4mである。柱跡は0.3mである。方位はN2°20'W。S D10は、これの雨落ち溝と考えている。幅1m・深さ0.1mである。

S D14は、南北方向(N0°W)の溝である。幅1m・深さ0.1mである。当初は、S D41とあわせて築垣の両側溝のひとつと考えていたが、S D14の北部で丸瓦を並べて置いた暗渠と思われる施設(S X154)が検出されたため、そのうえに築垣を想定する必要ができた。したがって、現段階ではA期の側溝(S D41)とその東に築垣A、B期の側溝(S D14)とその東に築垣Bを想定している。但し、築垣BのところにはS A35や、門と思われるS B110があるので、柵であった可能性が高い。

S D93とS D41との接点に、瓦などで固めた地点があり、これによってB期の段階にはS D41を埋めたと判断した。すなわち、崩落を防ぐ施設として理解した。これは、S D93がB期にも使用されたことが前提であるが、埋没した状況によれば、中層は砂層で構成され、上層は粘質土であるので、一時期洪水にあい、その後修復しないままにされていたと理解できる。なお、上層にはB期の終末の遺物が包含されていた。

S D94は、S D93の北側を流れる東西溝で、一部でS D93と接続している。この溝の北側は、黄色粘土層が比較的高く遺存しており、削平されなかったことを示している。現段階では通路=道として理解している。

### (3)出土遺物

出土遺物は、整理箱で約240箱に達した。種類は、瓦・須恵器・土師器が多く、次いで緑釉陶器116点、二彩・三彩98点(内、瓦2点)、白磁5点、灰釉39点である。金属製品な



どは数点出土したにすぎず、木製品も柱根の他はなかった。A期とB期に属するものがほとんどで、他の時期のものは石鏃2点・埴輪1点、古墳時代後期の須恵器数点、中世の陶器や中国製磁器が10数点である。但し、整理途中であり数値は絶対的ではない。

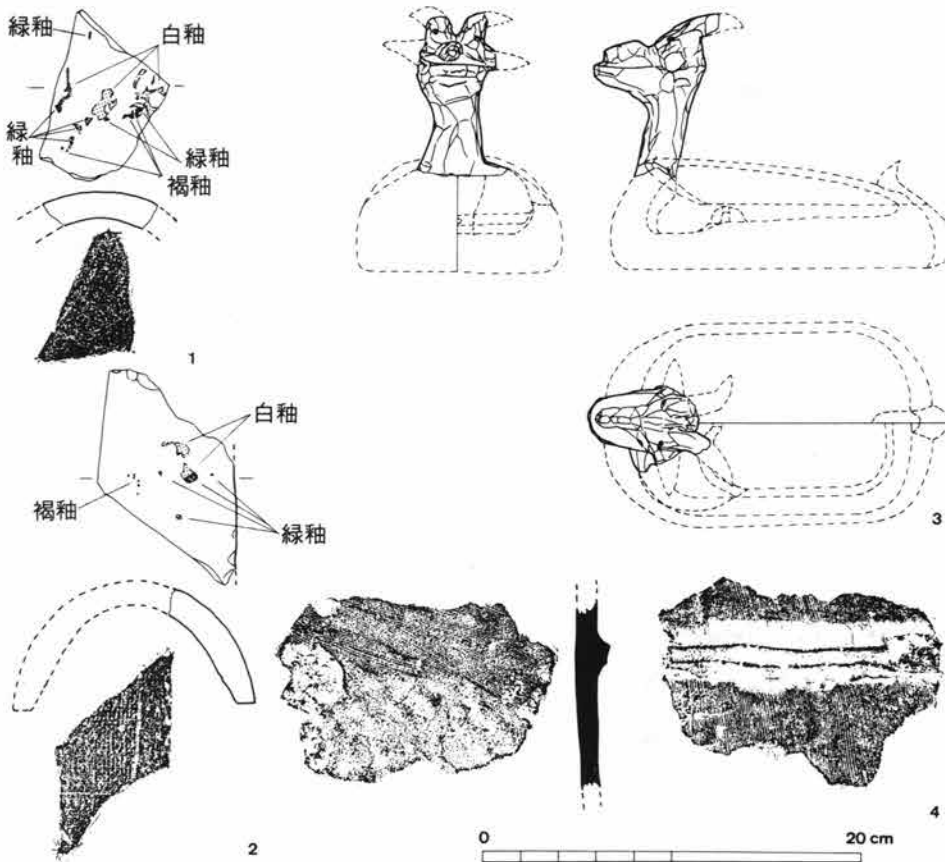
図示したのはごく一部にすぎない。ここではおおまかな傾向を指摘するにとどめる。それでは、各期に即して説明したい。

①中世の遺物(5・8・10~12)

10の白磁皿は、中国明代のものである。高台をヘラで刻み込んでおり、内外面に目痕がある。ややザラついた胎土である。

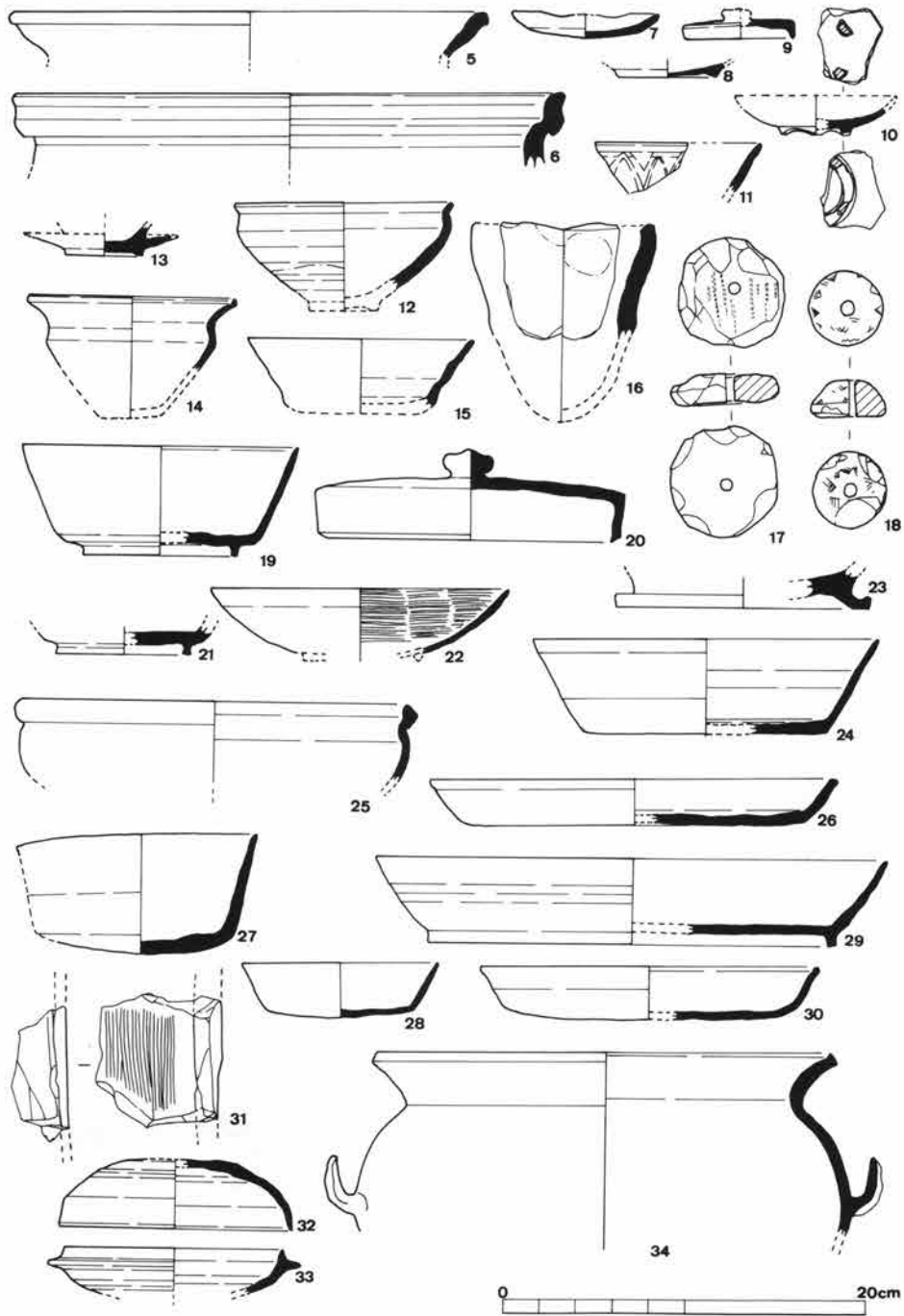
②古墳時代以前の遺物(4・32・33)

4の円筒埴輪片は、外面タテハケにし、内面にユビオサエが明瞭に残る。タガの断面は台形よりやや退化しており、土師質であるが川西編年の<sup>(注3)</sup>V期に相当しよう。18の滑石製紡錘車は、國下多美樹氏<sup>(注4)</sup>分類のIc類に属し、古墳時代から飛鳥時代とされている。17は、



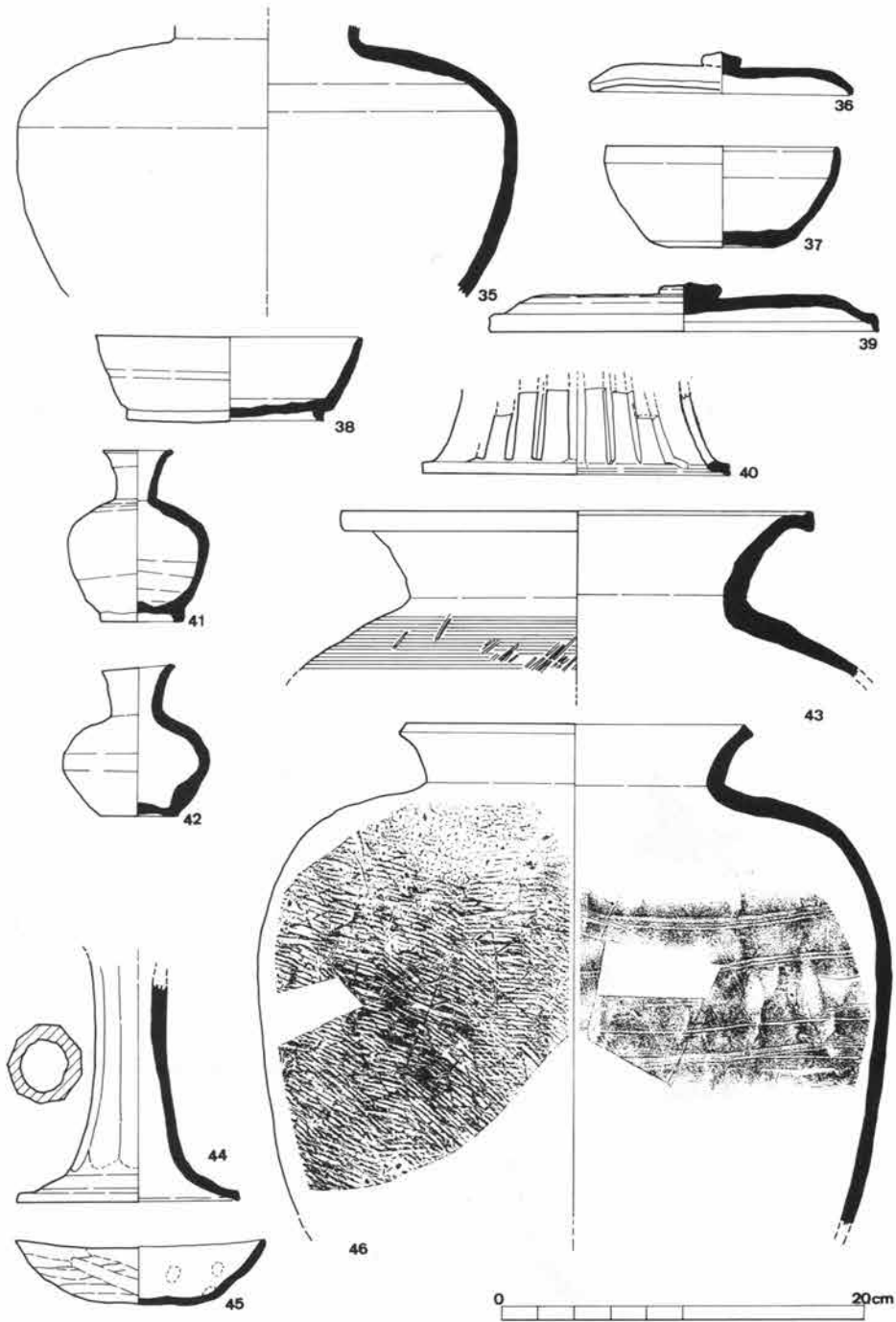
第66図 出土遺物実測図

1・2.施釉瓦 3.灰釉龍形硯 4.円筒埴輪

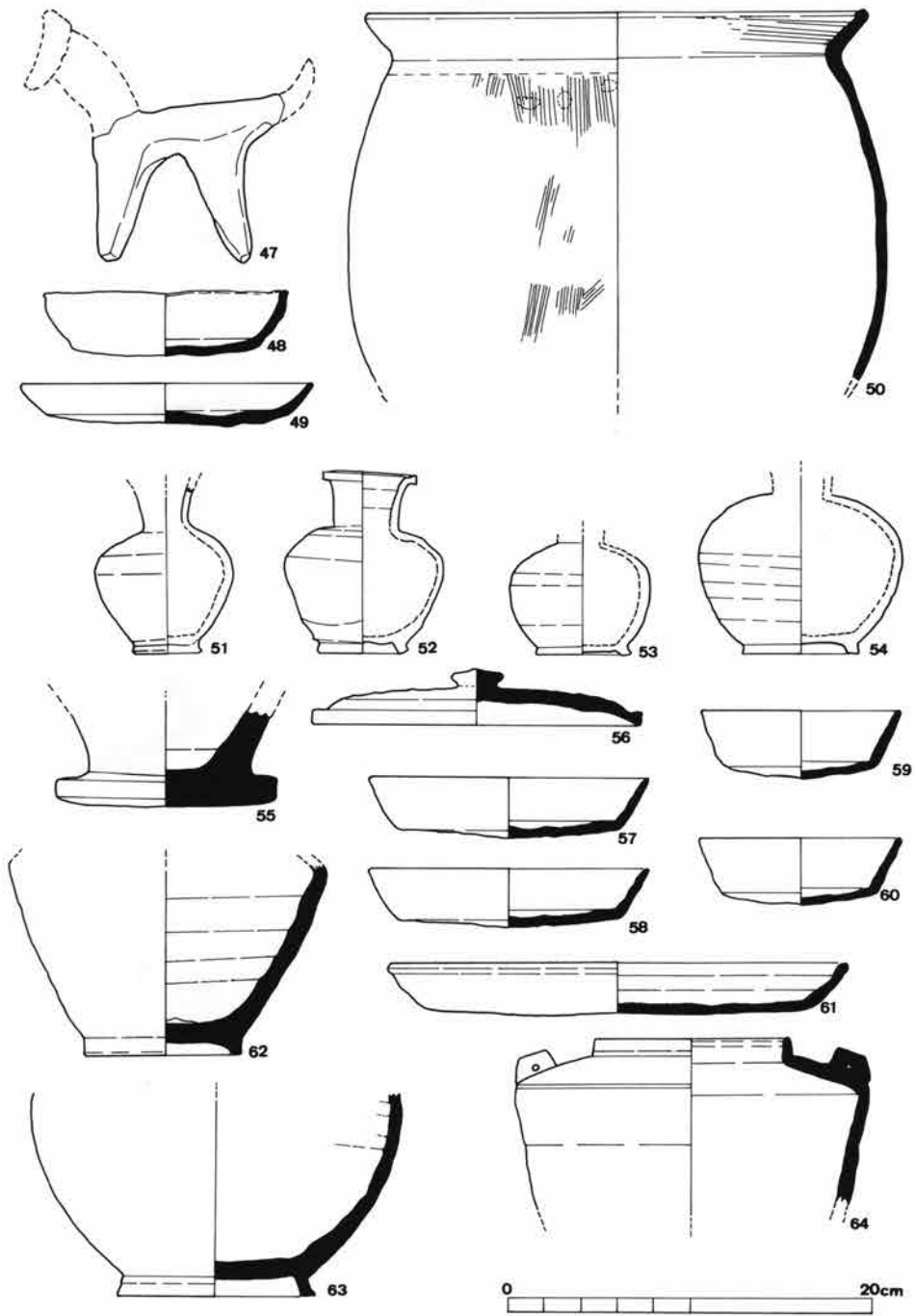


第67図 出土遺物実測図(第1トレンチ・第2トレンチ・第3トレンチ)

5・6.信楽 7・30・31・34.土師器 8.瓦器 9・13~15・19~21・23~29・32・33.須恵器  
10.白磁 11.青磁 12.美濃・瀬戸 16.製塩土器 17.瓦製紡錘車 18.石製紡錘車

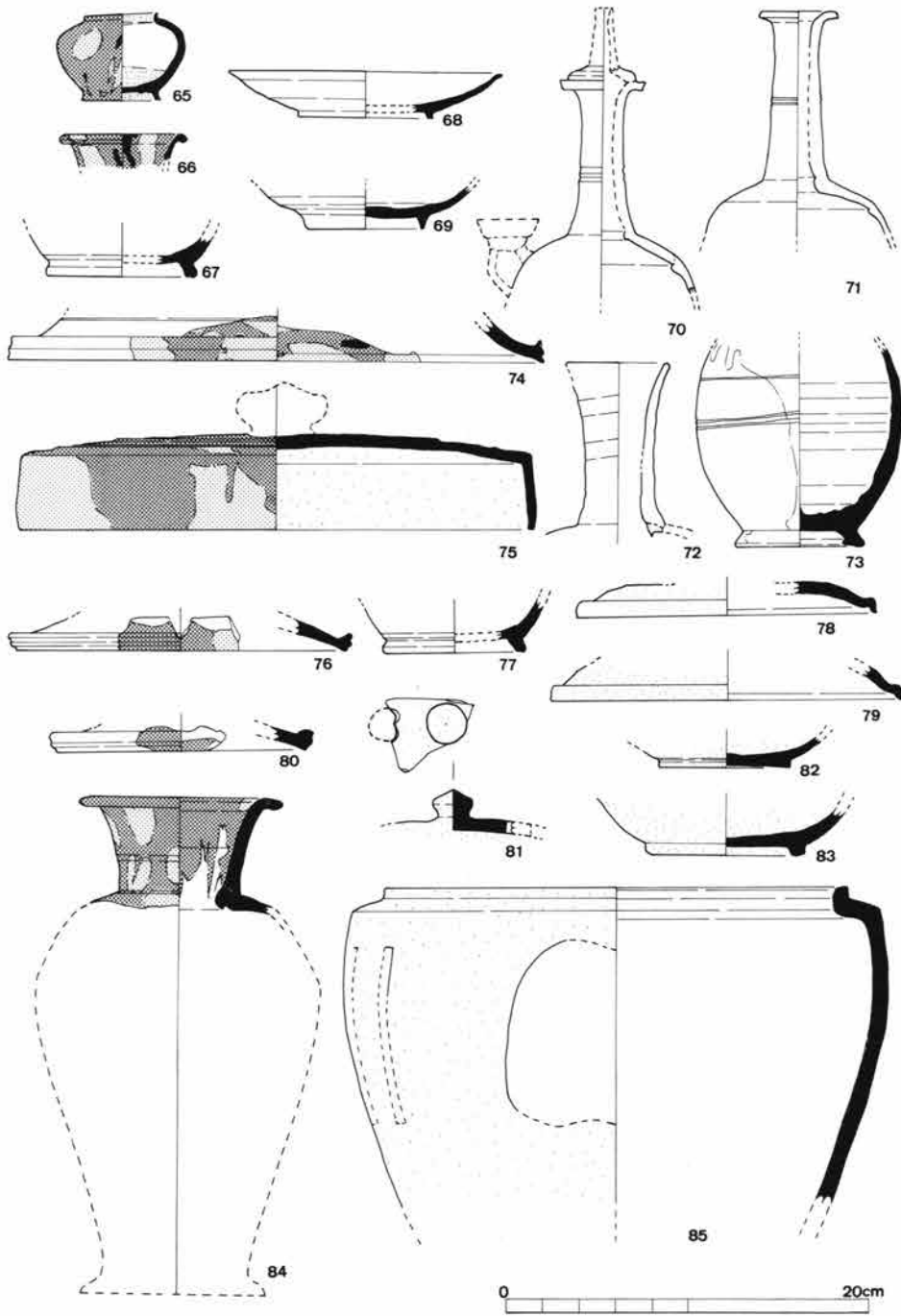


第68図 出土遺物実測図(第13トレンチS D14・41、S D93とS D41との境、S D93)  
 35～43・46.須恵器 44・45.土師器  
 36・37.S D14 35・38・39・41・42・44・45.S D41 40・43.S D39とS D41の境  
 40・46.S D93



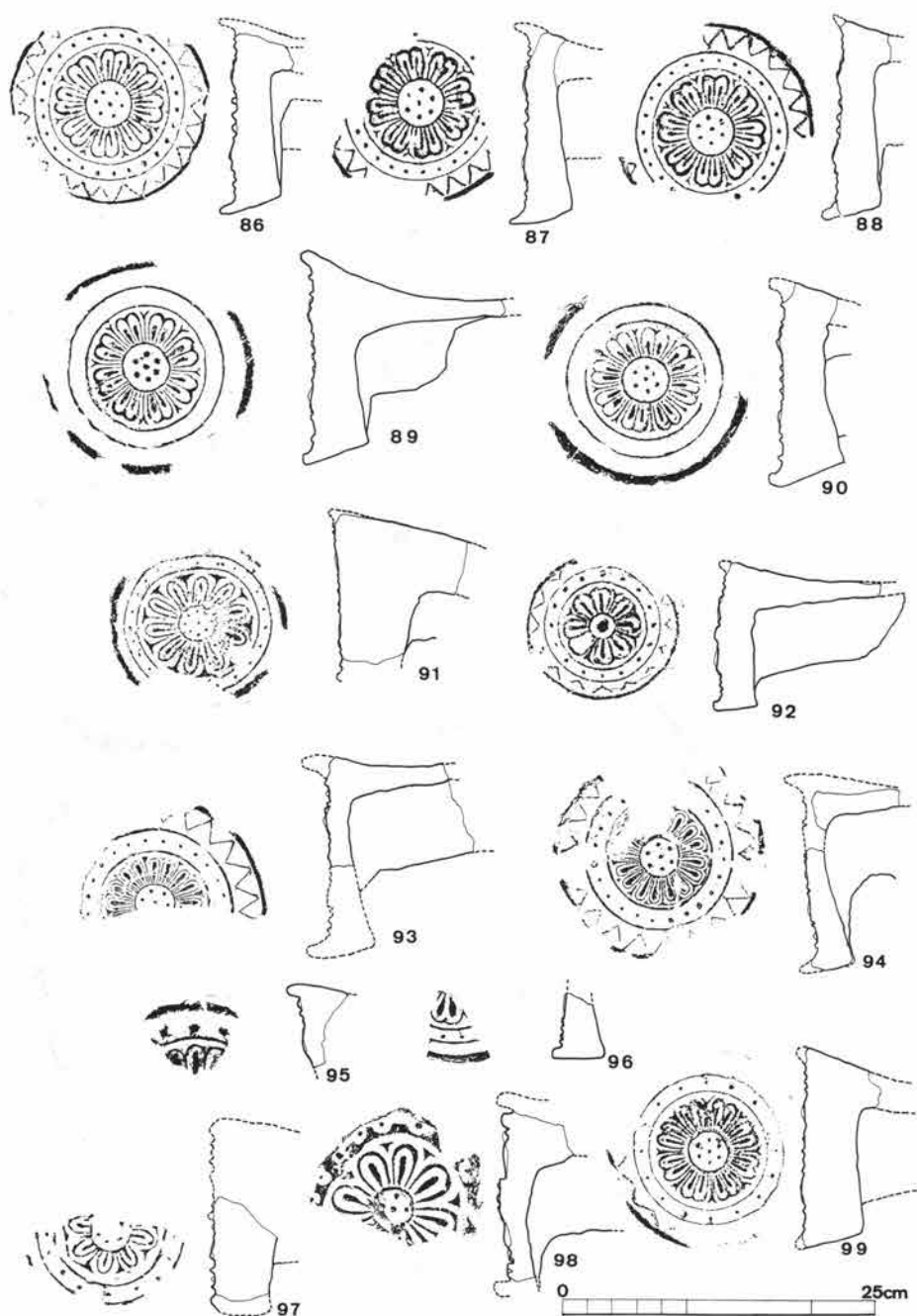
第69図 出土遺物実測図(第3トレンチ・包含層など)

47.土馬 48~50.土師器 51~64.須恵器

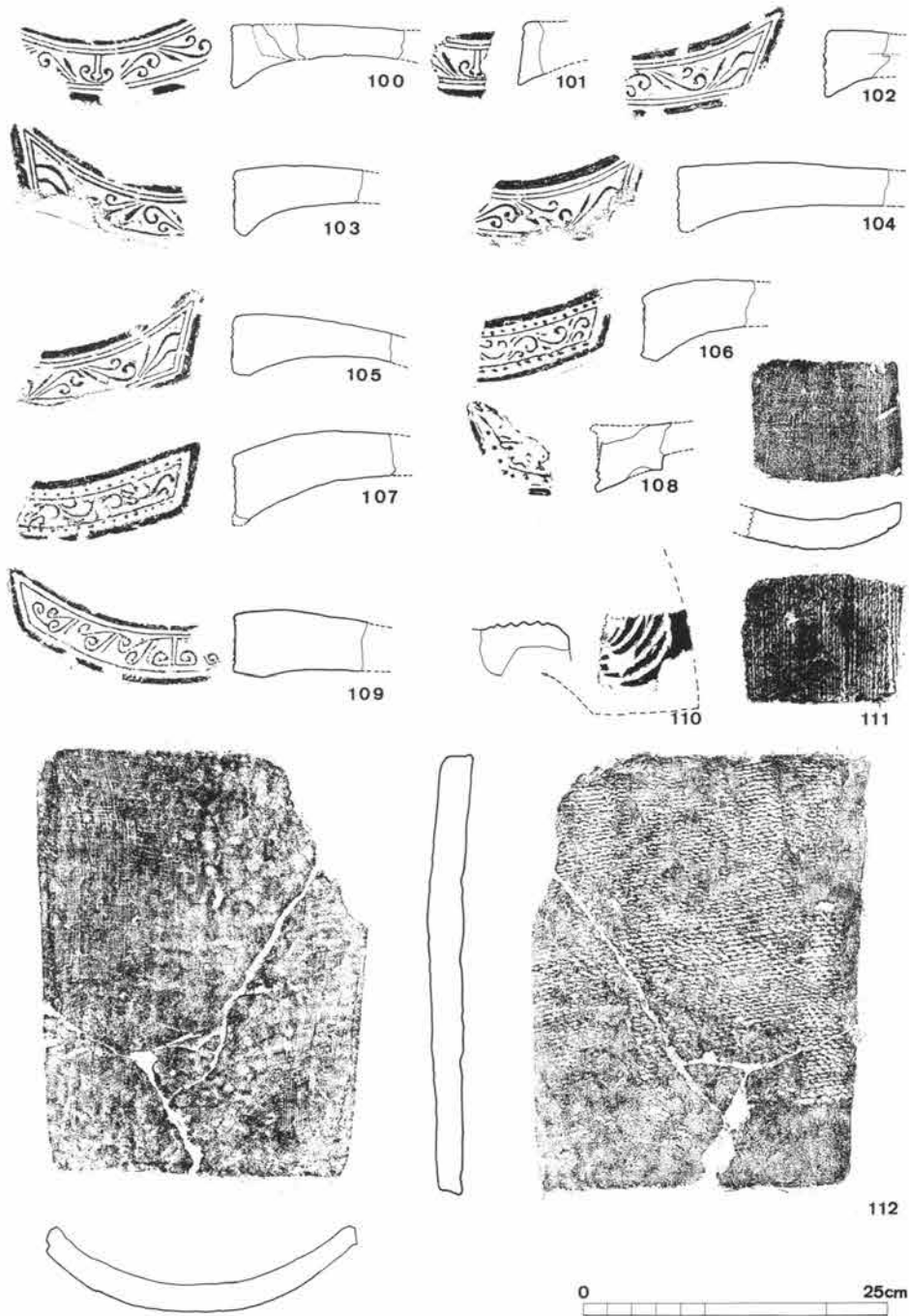


第70図 出土遺物実測図(彩釉陶器)

- 65・66・74・84.三彩陶器 67・75~77・80.二彩陶器 68~73.灰釉陶器  
 78・79・81~83・85.緑釉陶器  
 72.S D14 81.S K30 76・79.S D41 65・67・78・82~85.S D93  
 66・68~71・73~75・77・80.包含層



第71図 出土遺物実測図(軒丸瓦)



第72図 出土遺物実測図(軒平瓦・鬼瓦・平瓦)

付表3 主要遺物観察表

番号	器種	口径(cm)	色調	胎土	調整・手法	備考
1・2	施釉瓦		白色(釉は褐・緑・白)	きめ細かい	内面は布目	点状に施釉
3	灰釉龍形硯		灰色(釉は灰緑色)	良	ヘラ	頭部片のみ
13	須恵器托	底径4.4	暗灰色	良	回転ナデ	
16	製塩土器	9.6	橙褐色	白色・灰色砂多い	ユビオサエ	
17・18	紡錘車	18(底径4.2、高さ2)	17は淡褐色 18は暗青色			1は瓦転用 2は滑石製
22	黒色土器杯	16.8	外面茶褐色		内面ミガキ	内黒
25	須恵器鉢	23.4	乳白色、23と同じ	軟	ロクロナデ	
40	須恵器円面硯	底径17	青灰色	良(黒色粒子含)	ロクロナデ	自然釉あり
44	土師器高杯	底径12.2	赤褐色45と同じ	良	ヘラケズリ	
46	須恵器甕	18.6	黒灰色	砂粒多い	タタキ	猿投産
47	土馬		橙褐色	良	ユビオサエ	
52	須恵器壺	5(器高10)	青灰色	良	ロクロナデ	陶邑タイプ
55	須恵器鉢	底径12.2	青灰色	良(白色砂含む)	ロクロナデ	内面マメツ
65	三彩小壺	4(器高4.6)	外面は濃緑色、黄と茶褐色の釉	軟、黄白色	ロクロナデ	
66	三彩多口瓶	6.2	釉は緑、白色、茶褐色	軟、乳白色		
67・77	二彩椀		釉は緑と白	灰白色(やや黄)	ロクロナデ	マメツ
68・69	灰釉陶器皿	68は30.4	釉は淡緑灰色	灰白色	ロクロナデ	内面施釉
70	灰釉浄瓶		釉は灰緑色	灰白色、良	ロクロナデ	
71・73	灰釉水瓶	71は4	釉は淡紫灰色	粗、黒色粒子含む	ロクロナデ	
72	灰釉壺	5.4	釉は淡緑色	良、灰白色	ロクロナデ	自然釉か
74	三彩壺	底径29.4	釉は緑、乳白色、黄褐色	軟、白色	ロクロナデ	高台
75	二彩葉壺蓋	29	釉は外面濃緑色と淡黄色、内面黄緑	軟、灰白色	ロクロナデ	外周に溝状のくぼみあり
76・80	二彩壺	底径18.6	釉は濃緑色と白色	軟(粗)、灰白色	ロクロナデ	高台
78・79	緑釉蓋	78は16.6	釉は淡黄緑色	軟(粗)、淡黄色	ロクロナデ	外面施釉
81	緑釉香炉蓋		釉は淡黄緑色	良、淡黄褐色	ケズリ後ナデ	透しあり
82	緑釉皿	底径7.4	釉は緑色	軟、灰白色	内面ミガキ	全面施釉
83	緑釉椀	底径7.8	釉は淡黄緑色	良、黄白色	ロクロナデ	全面施釉
84	三彩壺	9.6	釉は緑、白、褐色	良、黄白色	ロクロナデ	全面施釉
85	緑釉かまど	25	釉は淡黄緑色	良、黄白色	ロクロナデ	外面施釉
113	須恵器甕		青灰色	良	車輪文タタキ	
114	土師器皿	13.4、器高2.6	淡褐色	良	ナデ	外底面ヘラ描き
115	白磁椀	13.4	白色	きめ細かい	ロクロナデ	定窯か
116	石鉢	長3.1、幅1.3、厚さ0.4	灰色	サスカイト		一部欠損



奈良時代の瓦の転用である。

### ③奈良時代～平安時代

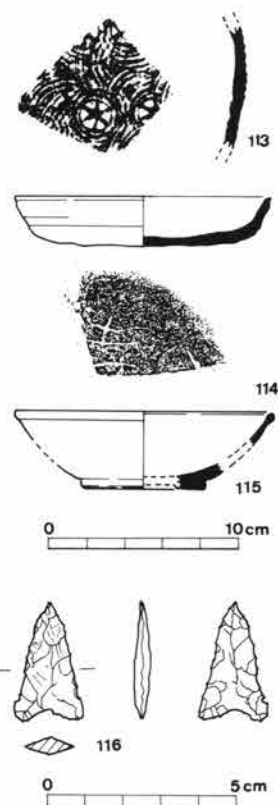
遺構に伴う遺物はそれほど多くはない。唯一、S D93が例外であるが、それも最上層以外はA期・B期の遺物が混在していた。遺物のほとんどは、包含層から出土した。

#### A期の遺物

S D41は、A期の遺構と考えているが、上層にはB期段階(41・42)のものが多く含まれており、あるいはS D14と対となり、その間が道などの空地になっていた可能性がある。その他、38や40などのように8世紀中葉を示すものが多い。81は、B期の遺構(S B8南西隅柱穴)により削平されたS K30の掘形から出土した。このような軟質の緑釉製品はS D41の79でも類例があり、A期の下限を示すものといえよう。76のような二彩も出土したが、これらの彩釉陶器は包含層からもたくさん出土しており、B期にも継続して使用された可能性が高い。なお、S D41の中層までで、ヘラ描きの土師器皿が出土した。「土」は明瞭だが、その下はやや右寄りに「十」とあり、左側が欠損しているため、全体的な字体は不明である。

一般的な遺物の年代観は、三彩が8世紀中葉(65・66・74など)で、後葉になると二彩が中心(75・76・80など)となり、それと重複しながら緑釉のような単彩(81・83・85など)が、8世紀末に中心となると考えている。器形としては、三彩は小壺(65)や多口瓶(66)、壺(84)など壺関係が多い。二彩は、直径29cmの薬壺蓋(75)や壺の高台(76・80)などで、これも壺関係が多い。緑釉になると碗(83)や杯の蓋(78・79)を主体として、他に香炉蓋(81)やかまど(85)などの特殊器形がある。また、二彩あるいは三彩の瓦(1・2)もある。この胎土はきめ細かく、粘り気のあるもので白色である。釉は、ほとんど点状にしか施されていない。無施釉の同胎土の瓦は、他に5点ほど出土している。彩釉陶器の胎土は、大別3群ある。Ⅰ群は灰白色でサラサラとした感じのもの(65・66・75など)、Ⅱ群は淡褐色系で土師質のもの(83・85など緑釉に多い)、Ⅲ群は灰色で須恵質のもの(B期)である。図示した緑釉陶器の釉の表現はアミが濃い方が緑色で、やや薄い方が透明釉である。そして、もっとも小さく点状であるのが褐色釉である。

灰釉陶器は釉の発色が悪く、いわゆる原始灰釉陶器に属するものである。70・71・73が



第73図 出土遺物実測図

これに相当する。3は、龍形硯(あるいは羊形)である。須恵器は青灰色であり、あまり砂粒を多く含まないものが主体である。46は、色調黒灰色で砂粒が多い。体部外面に斜めのタタキ目、内面には同心円のタタキ目が残る。<sup>(注6)</sup>猿投産である。

瓦は多数出土した。ここでは軒瓦に注目しておきたい。軒瓦は、96点確認できた。詳細は次項で説明するが、平城宮所用瓦の占める割合が高い点が注目される。

軒瓦の内訳は、軒丸瓦67点(11種類、A～K型式と呼称)、軒平瓦29点(5種類、A～E型式と呼称)である。胎土は8群ある。軒丸瓦A型式(86～88)は、平城宮6311Aa型式で平城Ⅱ期に属する。胎土は灰色で、あまり白色砂を含まない(Ⅳ群)。同B型式(89・90)は、A型式の外区文様を省略し同心円にしたもので、その他の造りは6311Aと同じである。胎土は灰色でザラザラとしたもので、白色砂を少し含んでいる(Ⅰ群)。なお、一部焼成の関係で淡褐色の土師質のもの(Ⅱ群)もある。同C型式(97)は、平城宮6143A型式である。胎土は淡褐色で茶褐色の粒子を多量に含んでいる(Ⅷ群)。なお、範の違うものは須恵質の黒灰色で、白色砂を少し含む(Ⅲ群)。D型式(91)は、歪みのあるもので、胎土は、Ⅰ群とⅡ群が半々である。平城宮6134新型式である。E型式(92)は、平城宮6313Aa型式で平城Ⅲ期に属する。胎土は、灰色でザラザラとしたもの(Ⅵ群)である。F型式(95)は、平城宮6133系で、胎土はⅡ群である。G型式(93・94)は、平城宮6285A型式で、平城Ⅱ期に属する。胎土はⅢ群が3点、Ⅰ群が1点である。H型式(98)は、歪みのひどいものである。胎土は完全な須恵質で、白色砂を多く含む(Ⅴ群)。少し焼成不良のⅡ群がある。I型式(96)は、平城宮6316系で、胎土はⅠ群である。J型式(99)は、平城宮6308B型式である。平城Ⅱ期。胎土はⅣ群である。K型式は、平城宮6282B型式である。平城Ⅲ期。胎土は灰色で黒色粒子や灰色チャートを含み、ザラザラとしている(Ⅶ群)。

軒平瓦A型式(100～105)は、平城宮6663新型式で、6663A型式より文様幅が広いが近似している。胎土はⅠ群である。同B型式(108)は、平城宮6664D型式で胎土はⅣ群である。同C型式(106・107)は、平城宮6721系で胎土はⅡ群(6721C)とⅦ群(6721F)である。平城Ⅲ期。D型式(109)は、稚拙な範である。胎土は、灰白色でザラザラとしたⅠ群と、焼成不良のⅡ群がある。朱が横長に付着したものがある。なお、A型式の2点も下面に横長く朱が付着している。E型式は平城宮6688系である。鬼瓦(110)は鬼面のもので、同様のものが3点ほどある。胎土は黒灰色で軟質である。Ⅲ期に属する。

#### B期の遺物

S D 14の下層から出土した灰釉系の壺(72)が、この時期の開始を示している。平城宮分類の壺Gで、平城Ⅴ期以降のものである。但し、S D 93の埋没層の主体は9世紀前半(51～54など)で、その後、9世紀後半の中国製白磁碗(115)や、10世紀初頭の須恵器四耳壺

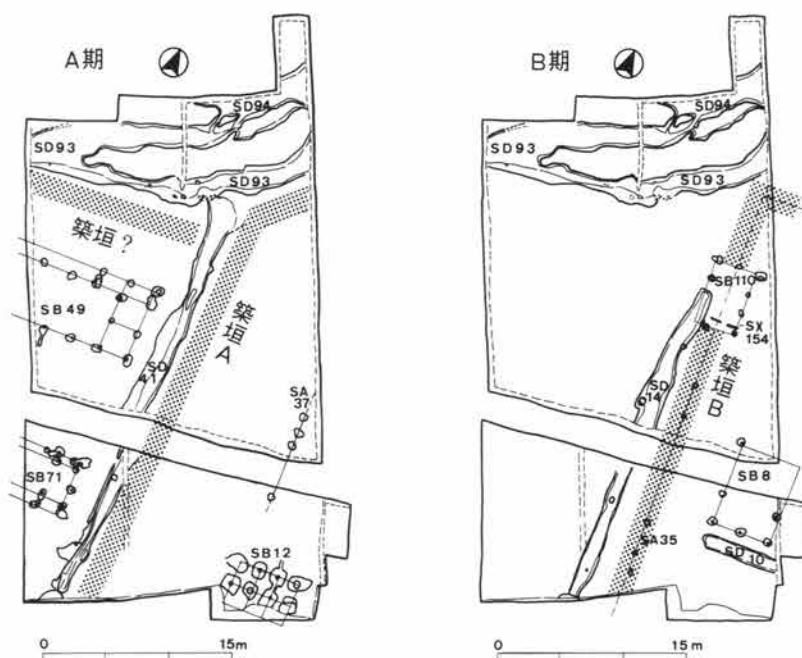
(64)がある。土馬は長岡京段階のものである。結局、遺物から知られることはB期の開始は8世紀末までさかのぼり、10世紀始め頃まで継続したことになる。軟質の緑釉陶器は胎土が土師質のもので、長岡京段階から目立つものである。硬質のものは2点にすぎず、9世紀前半に主体がある。土器組成は都城のそれと同様である。

#### 4. 考察

##### a. 遺構的特質

A期については、瓦葺きと思われる築垣Aを中心として、西にSB49・SB71の東西棟を配置し、東にSB12をおく。特に、後者は直径30cm以上の大きな柱を使用(第64図)し、柱間も狭いことから倉や楼のような頑丈な構造物と目される。

遺物の出土状況からすれば、第75図のように軒瓦は築垣Aの想定地に集中している。また、SB49からSD93の間にも集中しており、あるいはここに東西方向の築垣(Cと仮称)を想定できるかもしれない。彩釉陶器の分布状況や、出土の主体を占める土師器・須恵器の分布状況からすれば、築垣Aの東方が中心部分と考えられる。とすれば、これを境に東方が内郭、西方が外郭というように、二重の区画施設が想定できる。築垣Aの西に側溝SD41が機能したことは確かだが、この溝は12ライン付近で終息しているので、築垣もここ



第74図 遺構変遷図

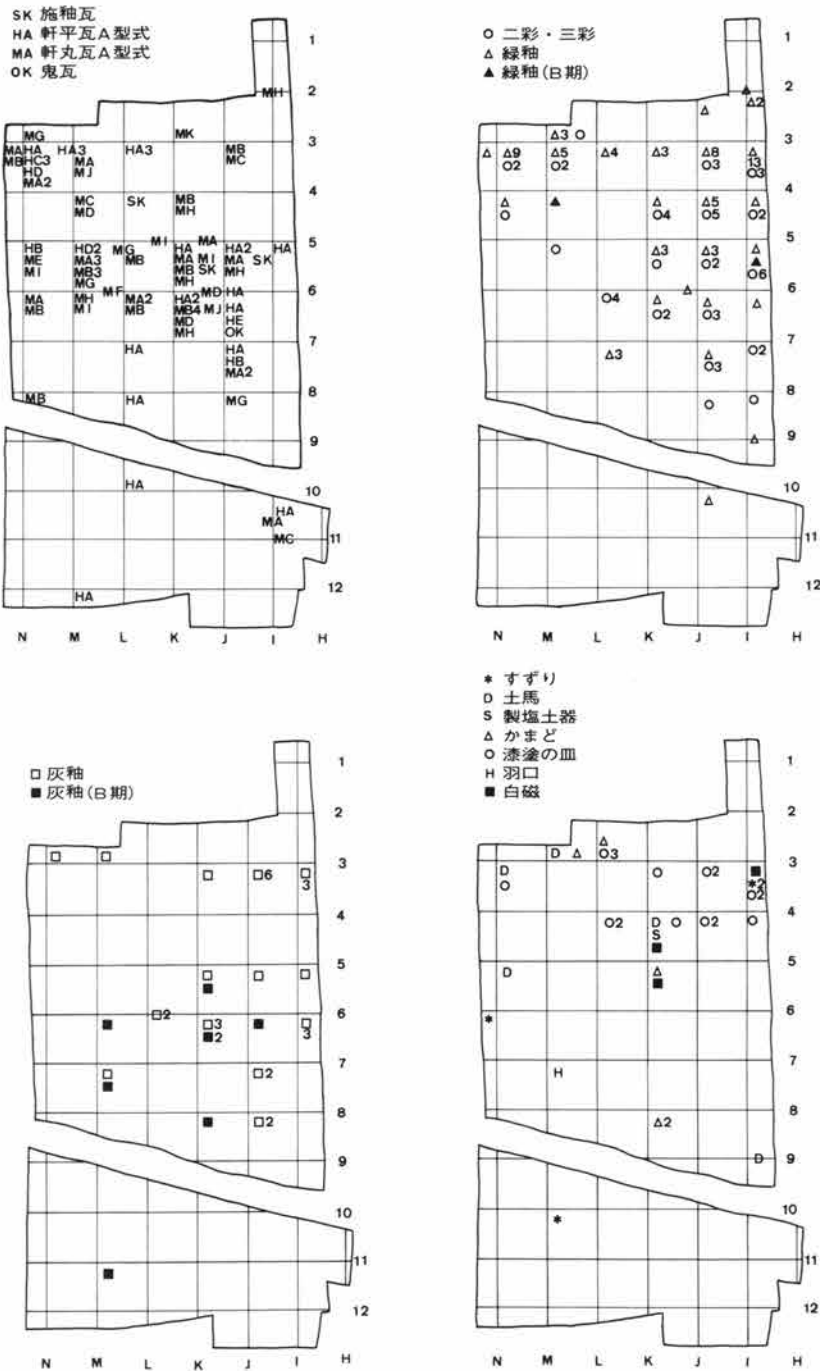
で終息した可能性がある。この数m南は、現在段丘の端となり崖となっている。山田川の侵蝕作用によって形成された地形が、奈良時代も同様であった確証はない。しかし、段丘下で設定した第6トレンチの土層によれば、中世相当層(灰色粘質土)が確認できたので、少なくとも中世以降は同様の地形であったことがわかる。ここでは、奈良時代でも同様であった可能性が高いことを指摘しておきたい。なお、溝の北端はSD93と接続している。トレンチの東北隅、SD94の北には黄色粘土層が高く残っており、道路=道として理解している。その北側には現在でも道があり、山裾を通過して大阪方面へ通じている。調査地の東端あたりで道は屈折し、それより東方はほぼ東西方向である。あるいは、古代以来の道を踏襲しているのかもしれない。

B期の以降としては築垣Bが、同Aより5～6m東へ平行移動して設置された。但し、SA35がこの期に属するとすれば、柵に変更されたことになる。そして、小規模な建物跡SB110が柵に敷設され、門として使用されたい。柵SA35の西にはSD14が側溝として設けられた。SB12は継続して使用され、その北隣りにSB8が建設された。築垣Bの西方には建物跡はなく、閑散とした状況である。東方に2棟の建物跡があるが、新造されたSB8は小規模で、全体的な状況としては、規模が縮小したといえようか。A期に使用されたSD41は、その北端に瓦片や須恵器片を置き、SD93から水が入り込まないようにしていた。この点からB期にSD41を埋没させたと考えている。但し、上層の遺物はB期に属するものが多く、通有のA期の遺構は灰色土を埋土とするのに対して、これは暗褐色土であり、B期の様相を示している。したがって、B期にも機能した可能性が高い。とすれば、SD41とSD14との空闲地はどう解釈すればよいのだろうか。築垣B想定地には、暗渠排水施設と思われる丸瓦を縦長に4枚並べた遺構(SX154)が存在する。したがって、この上に構造物があったことは確実であり、それを築垣B、あるいは柵SA35と想定している。とすれば、前述の空闲地に築垣は必要でなく、通路のような施設を想定したい。

以上、A期・B期のいずれにしろ、築垣を設置した官衙あるいは寺院的な遺構であることは明白で、相当な有力者の造営にかかわるものといえよう。

#### b. 遺物の特質

A期の年代観は、土師器・須恵器によれば平城Ⅲ期・Ⅳ期に主体があり、8世紀中葉である。二彩・三彩などの多彩陶器や原始灰釉陶器の年代もこれ以降である。これらと同様の例が正倉院三彩である。正倉院には現在57点の三彩(二彩も含める)<sup>(註1)</sup>・緑釉陶器が伝わっている。これらは、天平勝宝8(756)年6月21日、聖武天皇の崩御後49日の忌日に当たり、光明皇太后が先帝遺愛の品、「国家の珍宝」を集めて、東大寺盧遮那仏(大仏)に献じたものである。しかし、それには三彩等は含まれていない。正倉院の南倉に納められているこ



第75図 出土遺物ドット図

これらの彩釉陶器は、もと東大寺羅索院にあった儀式用の調度品であった。それが、天暦4(950)年7月に羅索院の倉庫が暴風のため破損したので正倉院の南倉に移したという。これらの製品がどのような儀式に使用されたのかを列挙すると、天平勝宝4(752)年の大仏開眼会に始まって、仁王会、聖武天皇の葬儀などや、天平神護3(767)年と神護景雲2(768)年の称徳天皇東大寺行幸などである。点数は、三彩5点、二彩35点、単彩は17点であり、8世紀中葉から後葉にかけこの割合を示している。これは、この遺跡の多彩陶器の割合とほぼ同様である。なお、全国の出土例によると祭祀に関する遺跡で、日常生活に用いられた形跡は認められないという。さて、多彩陶器は、1990年5月現在の数値では、全国で76か所での出土が確認されている。その内、33か所を占める奈良の例では、寺院跡が30%、宮殿や官衙、邸宅跡50%となっており、当該地の性格を充分示唆している。

軒瓦の年代観は、平城Ⅱ期に主体がある。付表4を参照すると軒丸瓦A型式(28.4%)・同B型式(25.4%)・同J型式(6%)などがⅡ期(計59.8%)で、同C型式(4.5%)・同E型式(1.5%)などがⅢ期(計6%)である。この点から、平城Ⅱ期(730年中心)にA期の始まりを考えることもできるが、生活用品である土師器・須恵器は平城Ⅲ期以降が主体であり、それ以前は10数点にも満たない。したがって、A期は平城Ⅲ期以降で、軒瓦に関しては、恭仁宮造営に伴って平城宮を解体した際に、その一部がこの遺跡で転用されたと考えたい。但し、平城宮新形式瓦が多いという点は、平城宮と密接な施設用とも考えられる。





遺物の分布を調べたのが第75図である。この図の見方は4m方格の中で、どのくらい出土したかを示したものである。例えば軒瓦についていえば、MAは軒丸瓦A型式が1点、MB3は同B型式が3点出土したことを示している。ただし、付表4の点数とは合致しておらず、おおまかな傾向を知るために作成した。これによれば、平城宮式の瓦は築垣想定域にまんべんなく出土している。施釉瓦が4～5ラインに集中し、鬼瓦も6I区であることから、この辺りを重要視したのであろうか。B期に門が造営されたのは示唆的である。

多彩陶器は瓦より東方に集中する。最大の薬壺蓋は4I区で散乱した状況で発見された。また、三彩小壺(65)は、SD93の南層、3L区の埋土中位で検出された。このあたりでは、土馬も集中し、水に関する祭祀が執行されたのかもしれない。

円面硯は調査地の西部で顕著であり、SB49やSB71あたりで使用されたかもしれない。さて、多彩陶器を分析することによって、祭祀に関する遺跡であるという性格の一端が明らかとなった。更に、軒瓦を分析することによって、その性格を特定できるのではないか。ここでは、平城宮所用瓦について考えてみたい。

この遺跡では特徴的な軒丸瓦A型式は、平城宮6311A型式と分類されているもので、平城宮での出土状況をみると第1次大極殿(恭仁宮へ移築)地域の内、内裏地域で14.2%

付表4 軒瓦点数表

型式	点数	%	備考	型式	点数	%	備考		
A		19	28.4	平城宮 (6311Aa)  平城宮 (所用瓦)	F		1	1.5	平城宮 (6133系)
B		17	25.4	平城宮 (6311系)	G		4	6.0	平城宮 (6285A)
C		3	4.5	平城宮 (6143A)	H		8	11.9	在地
D		4	6.0	平城宮 (6134新)	I		5	7.5	平城宮 (6316新)
E		1	1.5	平城宮 (6313Aa)	J		2	2.9	平城宮 (6308B)
				K		3	4.5	平城宮 (6282B)	
軒丸瓦 合計 67点				100.1%					
型式	点数	%	備考	型式	点数	%	備考		
A		20	69.0	平城宮 (6663新)	C		4	18.3	平城宮 (6721 <sub>C</sub> F)
B		2	6.9	平城宮 (6664D)	D		2	6.9	在地
				E		1	3.4	平城宮 (6688系)	
軒平瓦 合計 29点				100%					

付表5 平城薬師寺と同範関係

	城陽市		井手町	加茂町	木津町	奈良山			平城宮	その他
	平川廃寺	正運遺跡				久世廃寺	井田地瓦窯	高麗寺		
8(6133H)			○						○	
6225 A			○						○	
6282 A	○	○	○						○	
11(6282 B)	○		○						○	○
13(6282 H)	○			○	○				○	
16(6291 B)	○		○						○	
24(6314 A)	○		○						○	
6320 A a	○			○	○				○	
6285 斬	○									
212(6663 C)			○						○	
220(6667 B)	○	○		○					○	
225(6691 A)	○		○	○					○	
232(6702 G)	○	○							○	
6721 A				○					○	
231(6721 C)	○			○					○	
6721 D			○						○	
6761 A				○					○	
6284 C				○				○		
6285 A				○		○	○		○	○
6307 B					○					
20(6308 A)				○				○	○	
6311 B								○	○	
6311 D								○		
6313 A								○		○
6313 B								○		○
6313 C						○			○	
210(6663 A)					○			○		
6663 E					○			○		
6664 C				○				○		
6664 F				○				○	法華寺	
6664 H								○	○	平城京
6666 A								○		
221(6681 A)					○			○		
6685 B				○	○			○		阿弥陀淨土院
227(6694 A)								○	○	唐招提寺・平城京

(6311Bも含めると24.1%)、内裏北方官衙地区で13%(同24%)を占めている。

また、軒平瓦A型式は、平城宮6663A型式と分類されており、それは平城宮の第1次大極殿地域ではまんべんなく出土している。例えば、東面築地回廊Ⅲ区では、13.8%を占めている。すなわち、当該地で出土した軒瓦は、平城宮で一般的に使用された瓦といえる。

瓦の範は、寺院や官衙、邸宅それぞれに主体となるものがあって、別個の型式に属している。これを分析すれば、寺院系統やその他の系統の相違を知ることができる。

付表5は、『薬師寺』報告<sup>(注10)</sup>で紹介された薬師寺と南山城所在寺院出土の軒瓦との同範関係である。これに当該地の資料を付加した。一般的に、平城宮式の瓦は、平城宮のための瓦であって、他の施設に使用されることはないが、部分的に平城京や有力寺院、及び南山城所在寺院に限り使用された。したがって、この点から言えば、多彩陶器が示す遺跡の性格と合致する。しかし、より細かく分析すれば、より限定した結果が得られる。

薬師寺は、平城京造営開始とほぼ呼応して造営された官寺であるが、ここで出土する平城宮式の瓦で、南山城所在寺院でも出土するものは、平城宮Ⅱ期後半～Ⅲ期以降である。たとえば、南山城所在寺院の中核をなす城陽市平川廃寺の場合、主要な瓦は平城宮6291B型式(軒丸



瓦)で19.5%、平城宮6702G型式(軒平瓦)で23.5%である。これらは当遺跡の瓦と重複している。この点から言えば、南山城所在寺院と別系統であったといえる。樋ノ口遺跡の主体的な瓦である軒丸瓦A型式は、薬師寺にはない。また、軒平瓦A型式は、薬師寺にはない。また、軒平瓦A型式も同様である。現在のところ、樋ノ口遺跡の主体となる瓦(軒丸瓦A・B型式、軒平瓦A型式)は、他でも出土するが、その主体とはならず、基本的には平城宮所用瓦と捉えたほうがよさそうである。

すなわち、本遺跡のA期、二彩瓦や平城宮式瓦、多彩陶器などを使用した時期は、平城宮と密接なつながりが認められ、たとえ、薬師寺のような官寺といえども主体的に使用されていないことから、樋ノ口遺跡が寺であった可能性は極めて低い。したがって、平城宮と密接なつながりをもつ諸施設の中で、その候補を探すべきであろう。

さて、B期についてはどうであろうか。その始まりの年代観は遺物の項で指摘したとおり、8世紀末にさかのぼる。但し、これは長岡京期前後に比定される緑釉・灰釉系壺Gなどを根拠としたものである。図示はしていないが、SD41とSD14との間にある包含層の遺物の中に須恵器杯身があり、これが高台の形状から9世紀第1四半期に比定できる。この包含層(なお、龍形硯もこの層から出土した。地区は6J・K区である)はSD41と重複し、SD14設置時に整地した土層と考えている。すなわち、A期の最終段階かB期の直前の土層となる。ここから9世紀に入る遺物が確認されたことは、B期の開始を若干新しく考える必要があるかもしれない。すなわち、現状ではB期の開始を8世紀末～9世紀前葉と捉えておきたい。終わりは10世紀初頭で、須恵器小壺(平城分類の壺L・M)は高台付きが多く、糸切りがやや少ないことから、9世紀前半に主体がある。なお、中国製の白磁は定窯か邢窯の製品であり、平安京を中心として出土するものである。また、軟質緑釉も長岡京や平安京のような都城で出土するが多い。すなわち、A期のように宮と密接なつながりをもつ施設ではないが、宮(都城)とのつながりが深い施設であることは間違いない。

### C. 遺跡の特徴

調査地の周囲に目を向けると、広い面積を占有できる場所はほとんどない。遺跡の広がり、地形の制約によって、南北40mの段丘面を越えるものではない。道一本隔てた北方の池部分(第7トレンチ、大正時代に造成)を調査したが、古代の遺構はなかった。また、南に関しては、築垣が段丘南端ではほぼ終息するようであり、更に南にのびていた可能性は極めて低い。このように南北を限定された幅狭い地では、少なくとも1町以上の方格地割が必要な寺や国府、郡衙などはこの条件を満たさない。また、遺物の点からも、南山城所在寺院でもっとも多く多彩陶器が出土したのは城陽市久世<sup>(注11)</sup>で、ここでは10点ほどであり、当該地の約100点とは桁違いであり、同列に扱うことはできない。

方格地割を必要とせず、平城宮と関係が深いのは離宮であろう。聖武天皇の松林宮も自由な平面形を採用(第61図)しているのが示唆的である。

d. 文献の見地による樋ノ口遺跡

樋ノ口遺跡を考える上で注目される文献は次の3史料である。

『興福寺官務牒疏』の記事 嘉吉元(1441)年に作成されたといわれるこの史料の中に「山田寺 同郡(相楽郡一引用者)山田郷朝日荘。僧坊六宇。皇極帝大化二年。元興寺道昭大徳開基。宣教大師。本尊宝生仏。承元三年炎上、正応二年再建。」

とあり、この山田郷朝日荘が樋ノ口遺跡を含めた地であることは、大字山田という地名と『木津町史』所収の史料によって明らかである。この記事に従えば、山田寺と呼称された寺院が、646年に道昭によって開基され、宣教大師(天平年間に活躍、8世紀第2四半期)によって再建され、1209年に炎上し、1289年に再建され、1441年には僧坊六宇を擁した有力寺院であったことになる。

しかし、足利健亮氏<sup>(注12)</sup>がいうように、道昭は大化2年には18才であり、後に入唐して帰国してから活躍したので、開基としては疑問点が多い。そして、宣教大師再建も、A期の開始年代とは合わない。また、1207年に炎上したとされるが、その痕跡は認められず、10世紀初めに廃絶し、中世には耕作地となっていた発掘による知見とも合わない。

『続日本紀』 天平宝字7(763)年10月の記事

「冬十月癸酉。山背国に幸して、介外従五位下坂上忌寸老人に従五位上を、従五位下稲蜂間ノ連仲村女に従五位上を授く。」

これは、10月4日に淳仁天皇あるいは孝謙太上天皇が山背国に行幸したことと、この時山背国司<sup>いははちまのなかむらめ</sup>と稲蜂間仲村女に授位したことを記す。稲蜂間氏は、孝謙の側近<sup>(注13)</sup>であり、これは孝謙の行幸記事と考えて間違いない。当時、孝謙と淳仁とは不和であり、前年の6月には、「国家の大事と賞罰の決定を自ら行うことを宣言」した(『続日本紀』)のは孝謙である。

さて、稲蜂間氏の本拠地は精華町稲八妻<sup>いなやづま</sup>あたりで、畑ノ前遺跡が該当すると考えられている。ここから、樋ノ口遺跡までは約1.5kmしか離れていない。前記の史料が行幸に際しての功績に関わるものと考えられるので、稲蜂間氏がすでにあった離宮で行幸の準備をした功績とも考えられる。二彩・三彩を頻繁に使用したのは孝謙の段階であることは、檜崎彰一氏の研究<sup>(注15)</sup>で明らかであり、文献でも神護景雲元(767)年4月に「東院の玉殿成る、瑠璃瓦を葺く、時の人玉宮という」(『続日本紀』)とあり、彩釉瓦を使用したことがわかるが、これも孝謙(称徳)に関わる記事なのである。

なお、この行幸記事をもって樋ノ口遺跡=離宮と考えるのは間違いだという指摘が、足利健亮氏<sup>(注16)</sup>から出されている。要約すれば、「この記事に基づいて離宮を考えようとする説

には、離宮と行宮の混同がある。昼食などに行宮に立ち寄った可能性はあるが、行宮は常設である必要がなく、また、誰かの家を1日借用しても行宮となる。」となる。ここで注意しなければならないのは、樋ノ口遺跡のA期のはじまりは、恭仁宮造営頃であり、行幸はこの20年後なのである。すなわち、平城宮式の瓦で葺かれた施設があって、その後、多彩陶器を多量に使用する時期を想定しているのである。足利氏は行幸を契機に施設が作られたと解釈した上での指摘だが、それは調査成果とは合わない。

#### 『西宮記』齋王入京に関する天長4(827)年の記事

「齋王入京事<sup>天長四年、伊勢齋王、依病辞退、有宣命、</sup>吉事に依る入京は(中略)。凶事に依る入京は、(中略)伊賀道を用い、頓宮を造る官符を給う事、<sup>造山城相楽頓宮、大和都岐、伊賀河口、伊勢河口、或壹志等行宮「等」</sup>(中略)、大祓事(中略)摂津、河内、山城等は官符口給に依って、河陽に往く、一月官米百石を以て経廻に充てる<sup>離宮有故の時、作仮屋住、或住国府也、</sup>(以下省略)」

これは、伊勢齋王が病気のため平安京に帰還する際の記事である。これによれば、827年に山城国相楽に頓宮を造ることと、齋王に関する大祓は第一に離宮で、都合が悪い時には仮屋、あるいは国府で1か月住して行くことが記されている。帰京のルートは伊勢→伊賀道→大和都岐(都祁)→山城頓宮→難波→船で河陽(現大山崎町)→平安京である。このルートによれば、相楽頓宮は大和→難波の間となり、樋ノ口遺跡はこの条件に合う。なお、「山城相楽頓宮を造る」とは修造したと考えたい。B期に対応か。また、伊勢齋王が使う場所は、第一に離宮であり、樋ノ口遺跡で顕著な彩釉陶器が祭祀に関わるものとの所見は、離宮説を擁護するが矛盾はしない。

## 5. まとめ

以上の考察の結果、A期・B期とも離宮と考えるのがもっとも可能性の高いこととなった。今一度根拠を列举すると、以上のとおりとなる。①地形的制約から国府や寺院のような1町方格以上の施設は考えられない。②遺物の内、瓦については平城宮所用瓦を主体としており、薬師寺のような有力寺院でもあり得ない事象である。③彩釉陶器の多さは一般的な寺院とは桁違いであり、都城のパターンに属する。また、これらが祭祀に関わるものであるという見解は、齋王が使うべき場所が離宮であるという文献とも矛盾しない。

この離宮説には、しばしば述べたように足利健亮氏による寺院説が対峙している。詳細は『京都府埋蔵文化財情報』第42号を参照していただくとして、この足利説は地名の転化を想定し山田寺を復原したものであり、現在の山田の範囲かやや越える程度の中に山田寺があったことはほぼ確かである。しかし、それが奈良時代に存在したという説明は、やや疑問がある文献を多用しており、にわかには支持しがたい。仮に奈良時代に存在したとして

も宣教大師は河内百済寺に関係しており、この瓦が城陽市平川<sup>(注17)</sup>廃寺に通じていることからすれば、樋ノ口遺跡とは瓦のグループが別となる。

ともあれ、今回の調査は京都府南部の古代史を考える上で重要であり、1日も早く樋ノ口遺跡の性格が周辺調査で明らかとなることを期待したい。

(伊野近富)

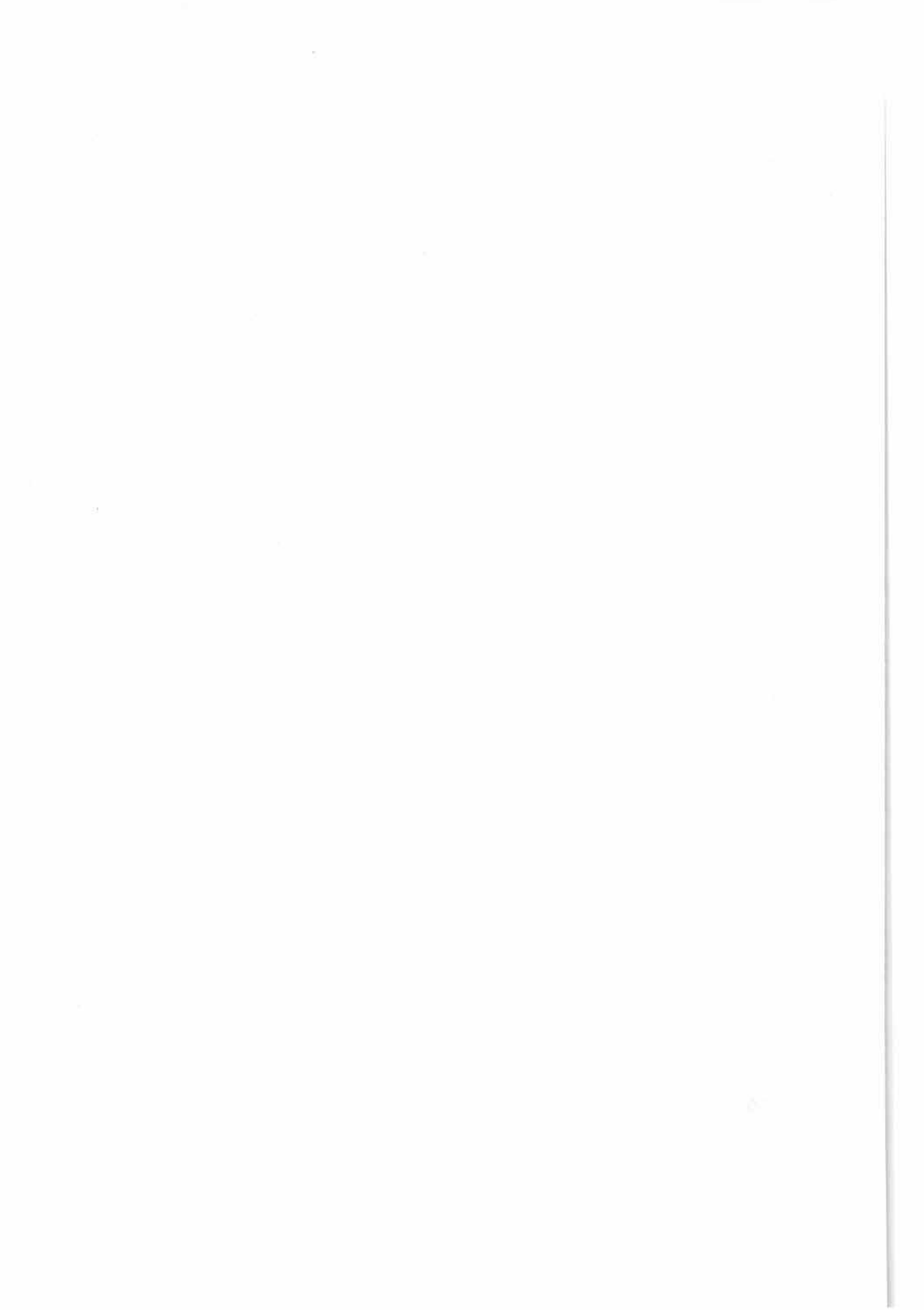
- 注1 栃木道代・村川 恵・清水紀子・古賀伸枝・福丸タエ子・波部 健・角南聡一郎・塚本見子・木坂葉香・内山明子・別所直美・堀 律子・兼松隆太・阿部秀基・岸本亜記・當麻公子
- 注2 足利健亮 『日本古代地理研究』 大明堂 1985
- 注3 川西宏幸 「円筒埴輪総論」(『考古学雑誌』64-2・4) 1977・1978
- 注4 國下多美樹 「京都府下の紡錘車について」(『京都考古』第50号) 1988
- 注5 榑崎彰一 『日本陶磁大系 三彩・緑釉・灰釉』 平凡社 1990
- 注6 文化庁 斎藤孝正氏御教示
- 注7 榑崎彰一 『日本のやきもの⑥ 三彩緑釉・瀬戸・常滑』 講談社 1992
- 注8 注5に同じ
- 注9 『平城宮発掘調査報告』X I 奈良国立文化財研究所 1982
- 注10 『薬師寺発掘調査報告』 奈良国立文化財研究所 1987
- 注11 近藤義行・梶本敏三・鷹野一太郎 「久津川遺跡群発掘調査概報」(『城陽市埋蔵文化財調査報告書』第9集 城陽市教育委員会) 1980、近藤義行「久津川遺跡群発掘調査概報」(『城陽市埋蔵文化財調査報告書』第11集 城陽市教育委員会) 1982
- 注12 足利健亮 「樋ノ口遺跡を山田寺にあてる考証」(『京都府埋蔵文化財情報』第42号 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 1991
- 注13 奥田裕之 「稲蜂間宿禰仲村女について」(『桃山歴史・地理』第16・17合併号 京都教育大学史学会) 1980
- 注14 藤本孝一 「畑ノ前遺跡の文献学的考察」(『(仮称)精華ニュータウン予定地内遺跡発掘調査報告書』(財)古代学協会) 1987
- 注15 注5文献及び、名古屋学院大学 榑崎彰一氏御教示
- 注16 注12に同じ
- 注17 森 郁夫 「奈良時代の政権と寺院造営」(『日本の古代瓦』考古学選書34 雄山閣) 1991

\*なお、調査中あるいは整理作業中に多くの方々のコメントを頂いた。すべてのコメントを受容するには至らず、報告者として叱正をまぬがれない。以下にその名を掲げておきたい。

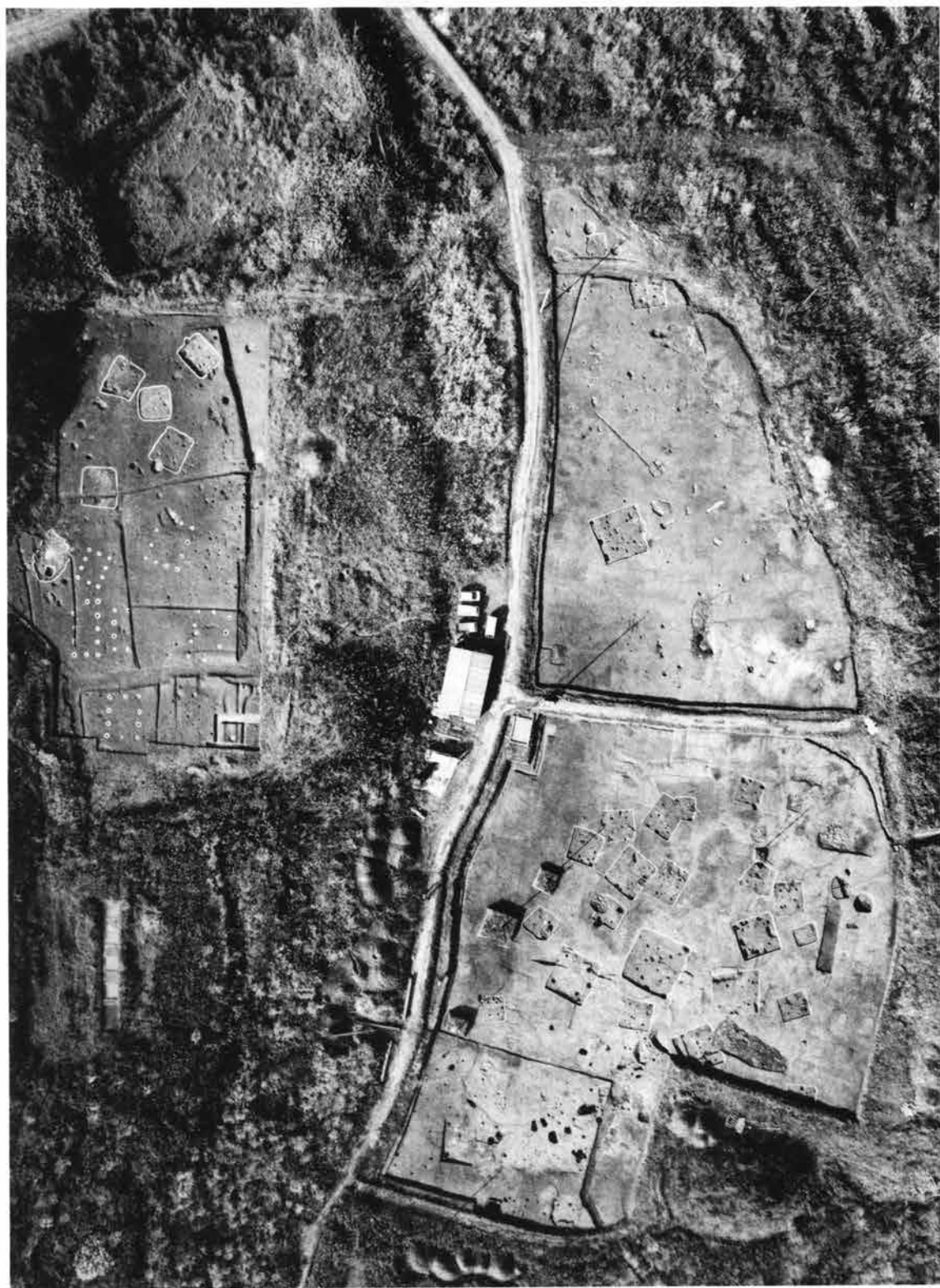
田中 琢・足利健亮・榑崎彰一・高橋美久二・毛利光俊彦・巽淳一郎・鈴木重治・上原真人・植山茂・鷹野一太郎・松本秀人・村川俊明・平良泰久(敬称略、順不同)

\*発掘調査終了後、日本道路公団の配慮により、橋脚設置場所を変更されたので掘立柱建物跡などの地点は保存されることになった。尽力された京都府教育委員会にも感謝したい。

# 圖 版



図版第1 天若遺跡



空中写真（右上が北方向）



図版第2 天若遺跡



(1) 調査地遠景（北から）



(2) 竪穴式住居跡SH9116（南東から）



図版第3 天若遺跡



(1) 竪穴式住居跡SH9106 (南西から)



(2) 竪穴式住居跡SH9106竈 (南西から)

図版第4 天若遺跡



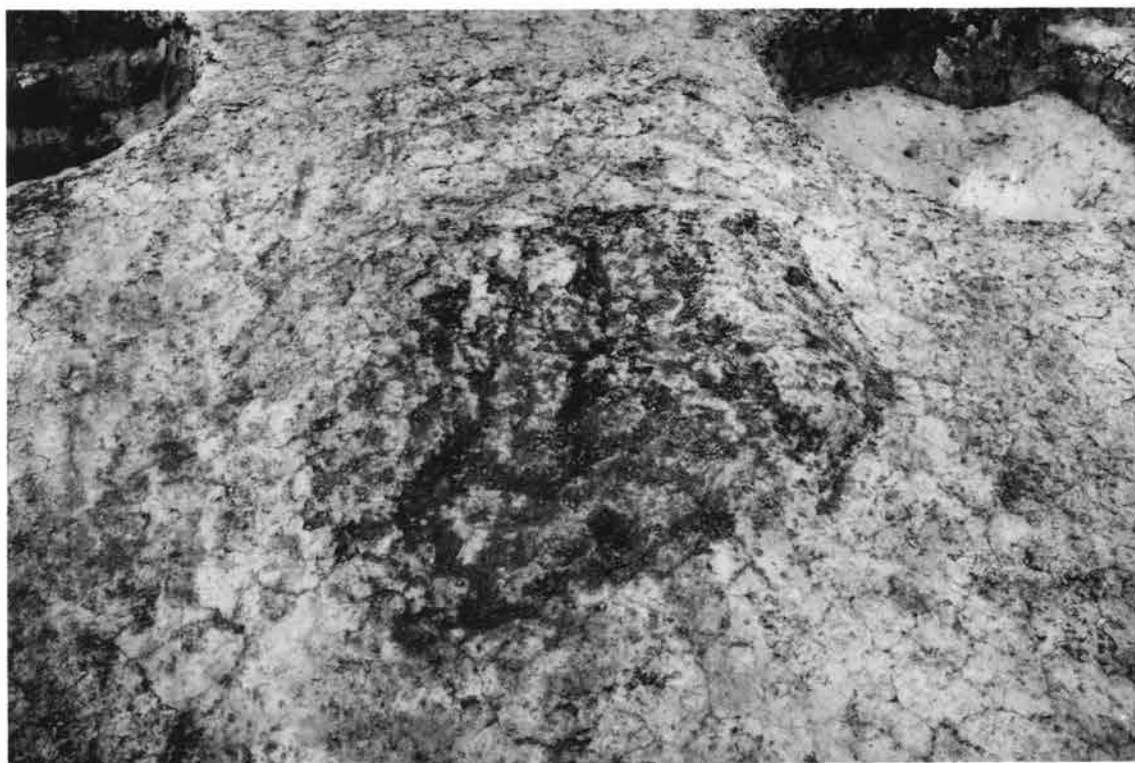
(1) 竪穴式住居跡SH9113・SH9115 (南西から)



(2) 竪穴式住居跡SH9115竈 (南から)



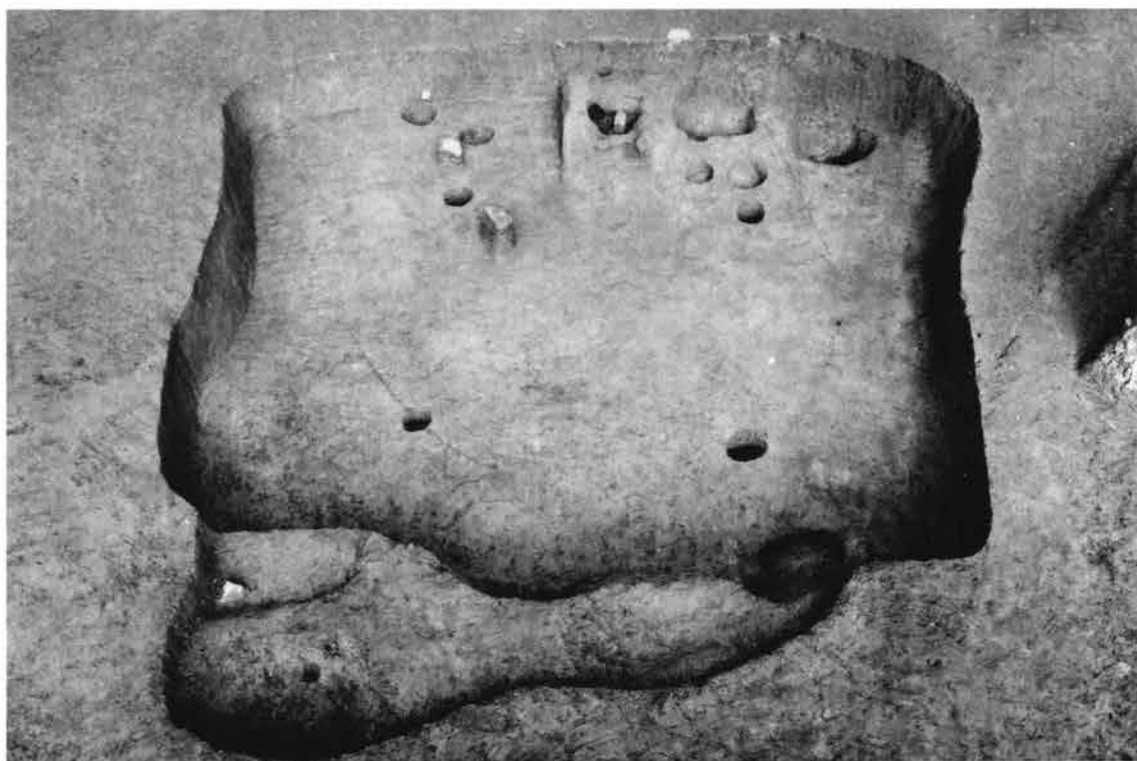
(1) 竪穴式住居跡SH9122 (南から)



(2) 竪穴式住居跡SH9122竈 (南から)



(1) 竪穴式住居跡SH9111竈（北西から）



(2) 竪穴式住居跡SH9140（南から）





5-3



5-1



5-4



5-2



5-5



5-25



5-6



6-35



I



7-40



7-38



7-39

図版第8 池尻遺跡



(1) 調査地近景



(2) 第1調査地区SD01検出状況

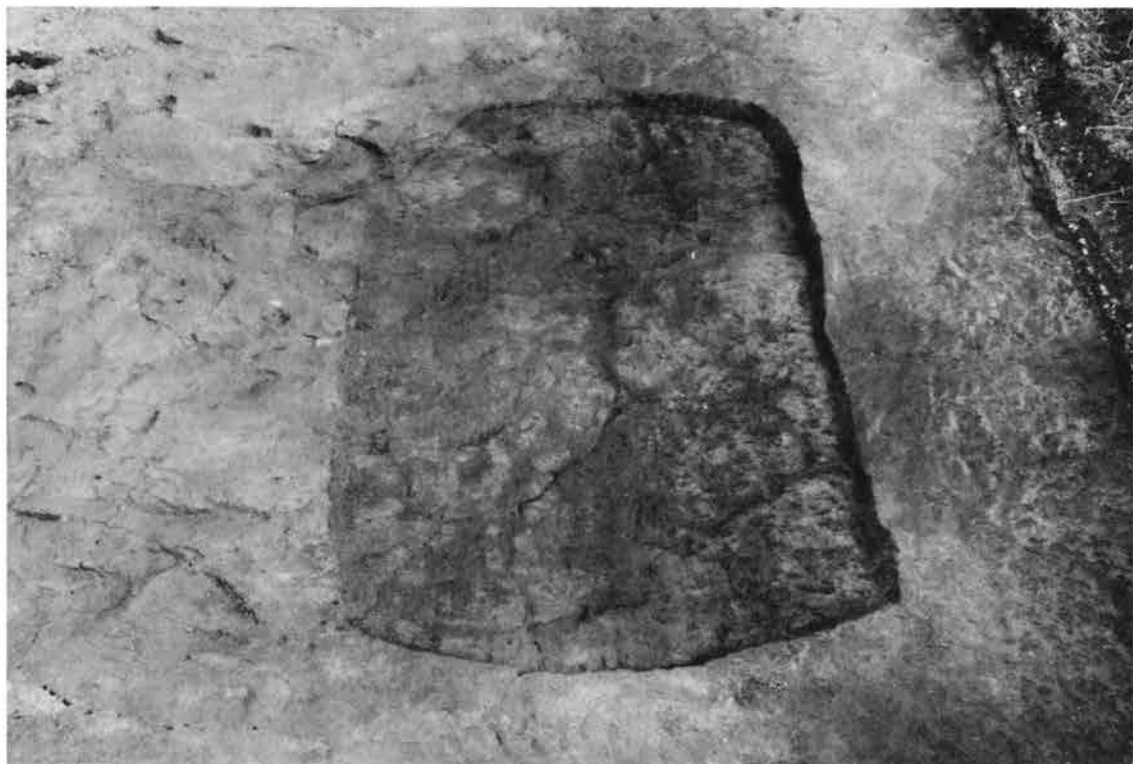
図版第9 池尻遺跡



(1) 第1調査地区SD02検出状況



(2) 第1調査地区SD01埋土の状況



(1) 第2調査地区SK01検出状況



(2) 第2調査地区SK03検出状況





(1) 第2調査地区SK01土器出土状況

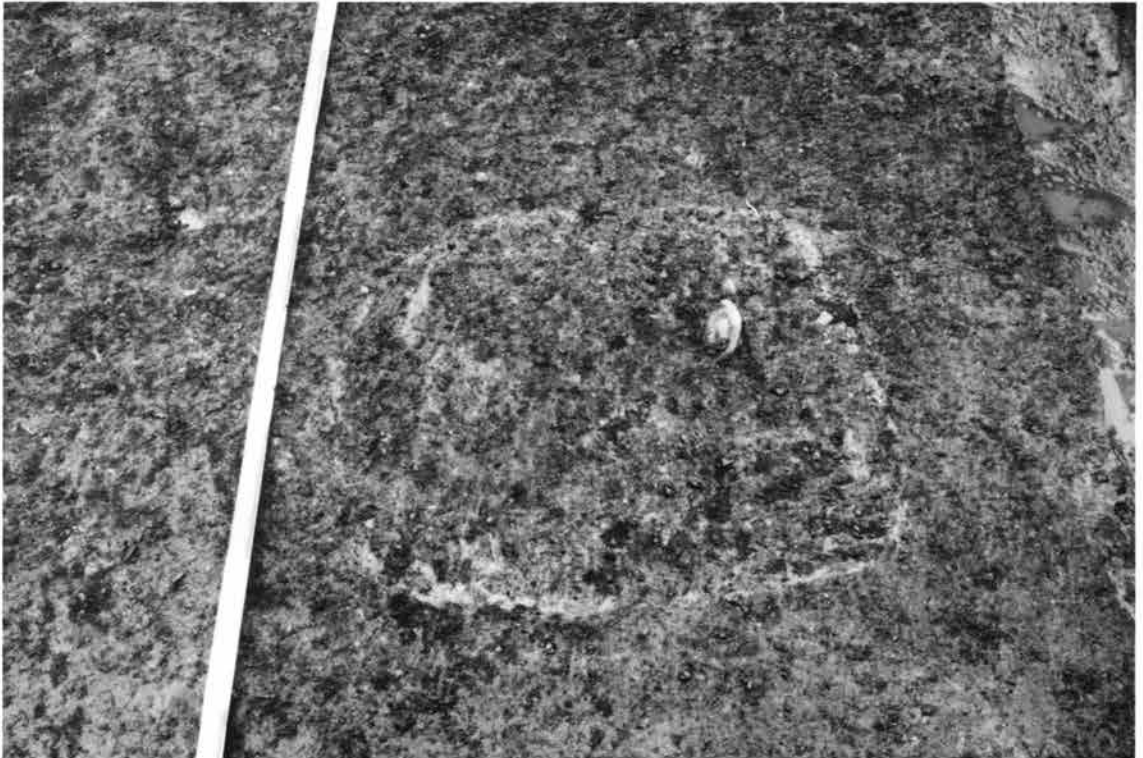


(2) 第3調査地区全景

図版第12 池尻遺跡



(1) 第3調査地区SB01検出状況



(2) 第3調査地区SB01柱穴検出状況



(1) 第3調査地区SX01遺物検出状況



(2) 同上(細部)



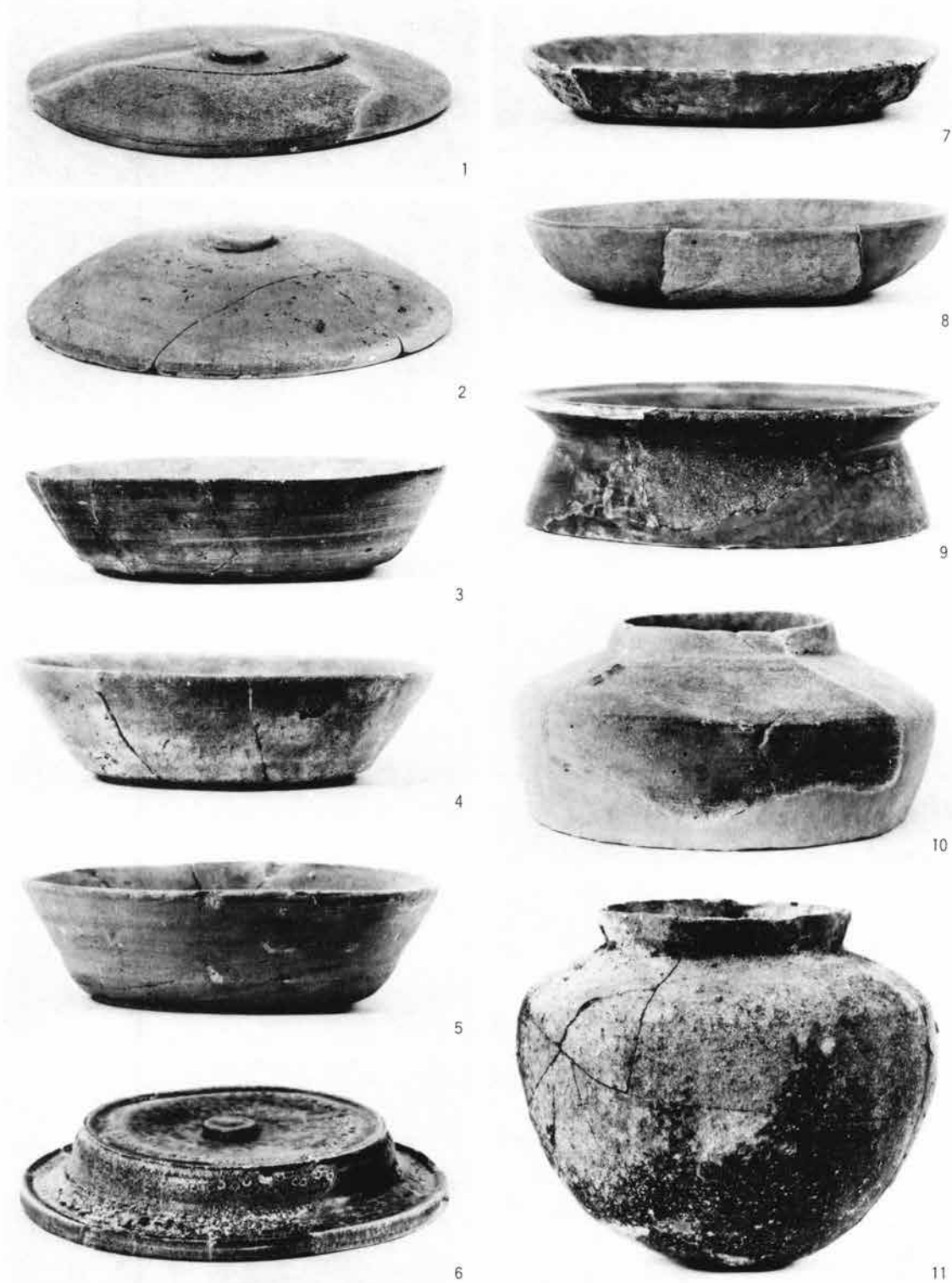
図版第14 池尻遺跡



(1) 第4調査地区全景



(2) 第22トレンチ平瓦出土状況



第3調査地区SX01出土遺物(1)

須恵器杯蓋；1・2 須恵器杯身；3～5 須恵器蓋形土器；6 土師器皿；7・8  
土師器甕；9 須恵器短頸壺；10 須恵器埴；11

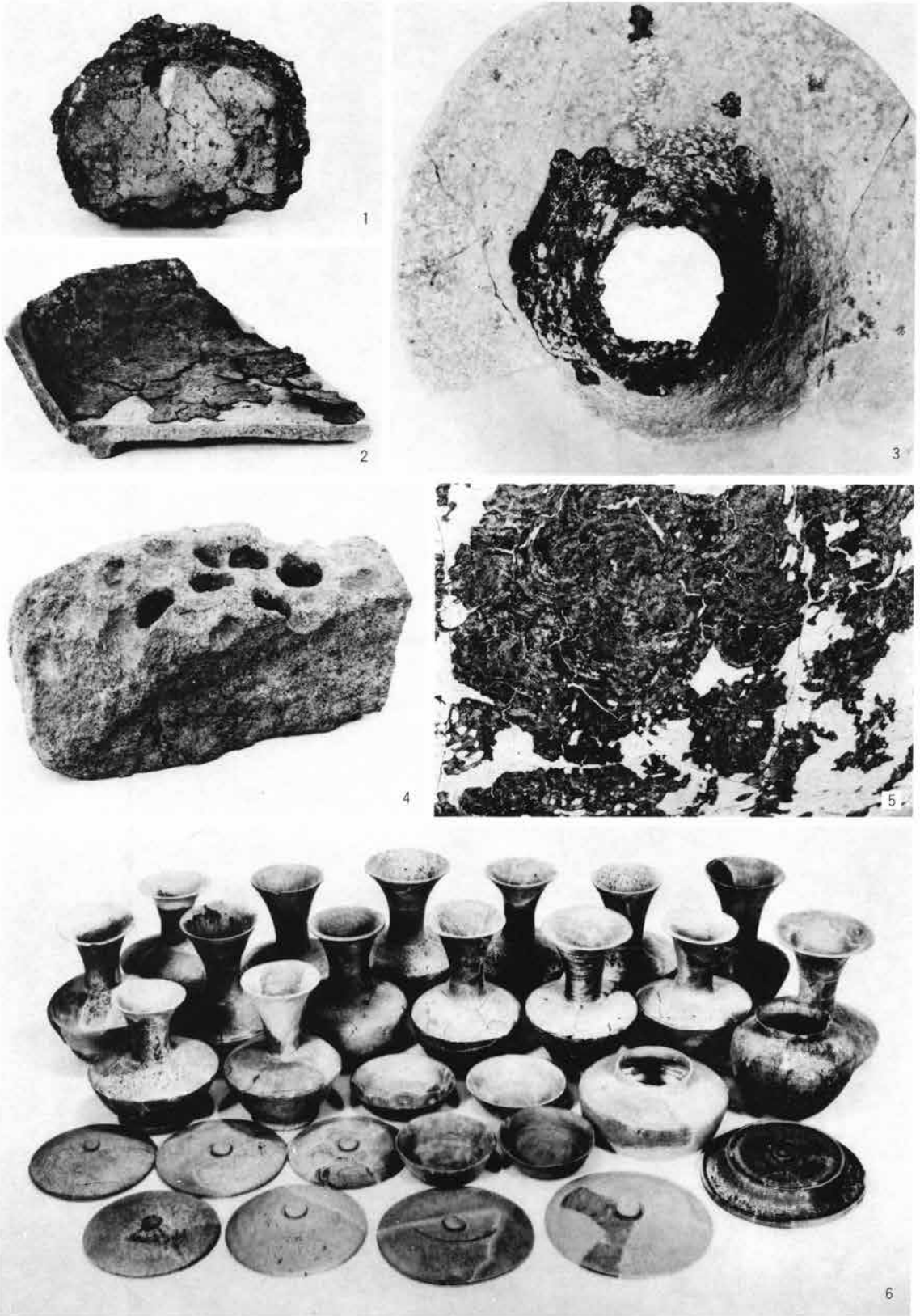


第3調査地区S X 01出土遺物 (2)

須恵器長頸瓶；1～4 須恵器杯蓋；5・6



第3調査地区S X 01出土遺物 (3)  
須恵器長頸瓶；1～6



第3調査地区S X 01出土遺物 (4)

第18トレンチ出土フイゴ; 1 長頸瓶漆附着状況; 3 不明石製品; 4

須恵器甕漆附着状況; 5 S X 01出土遺物集合写真; 6



図版第19 鹿谷遺跡

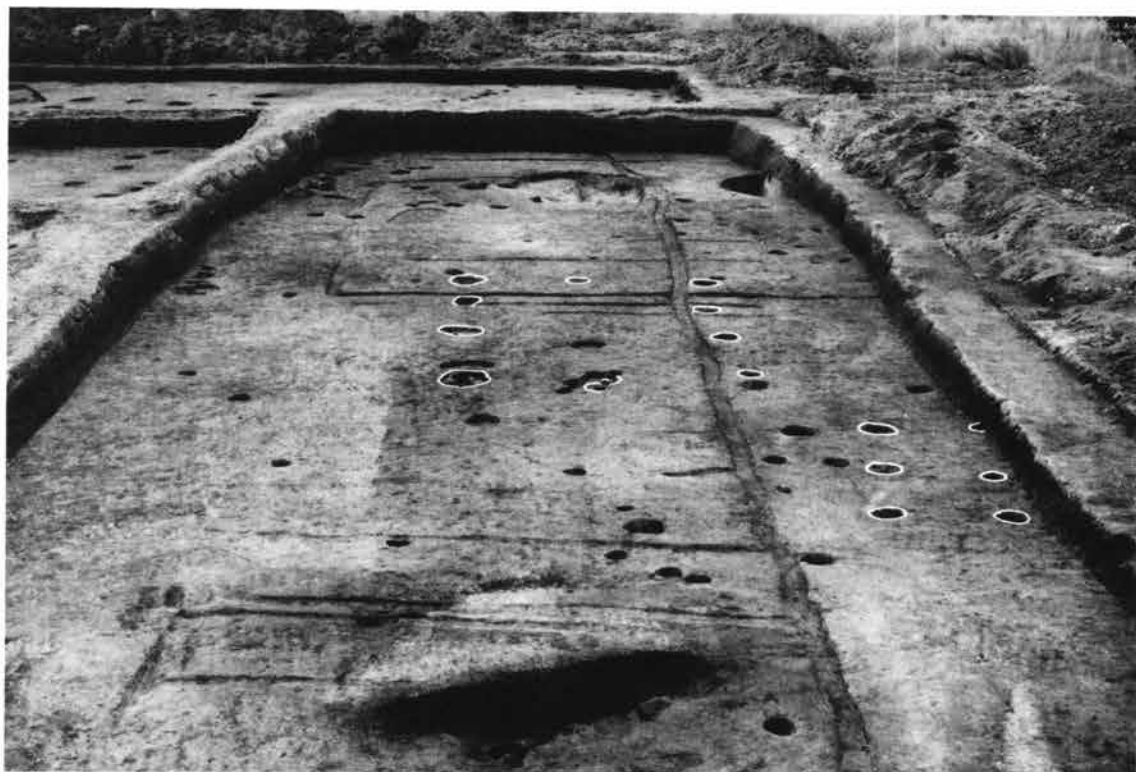


(1) 調査地遠景 (北から)



(2) 1区 調査風景 (北から)

図版第20 鹿谷遺跡



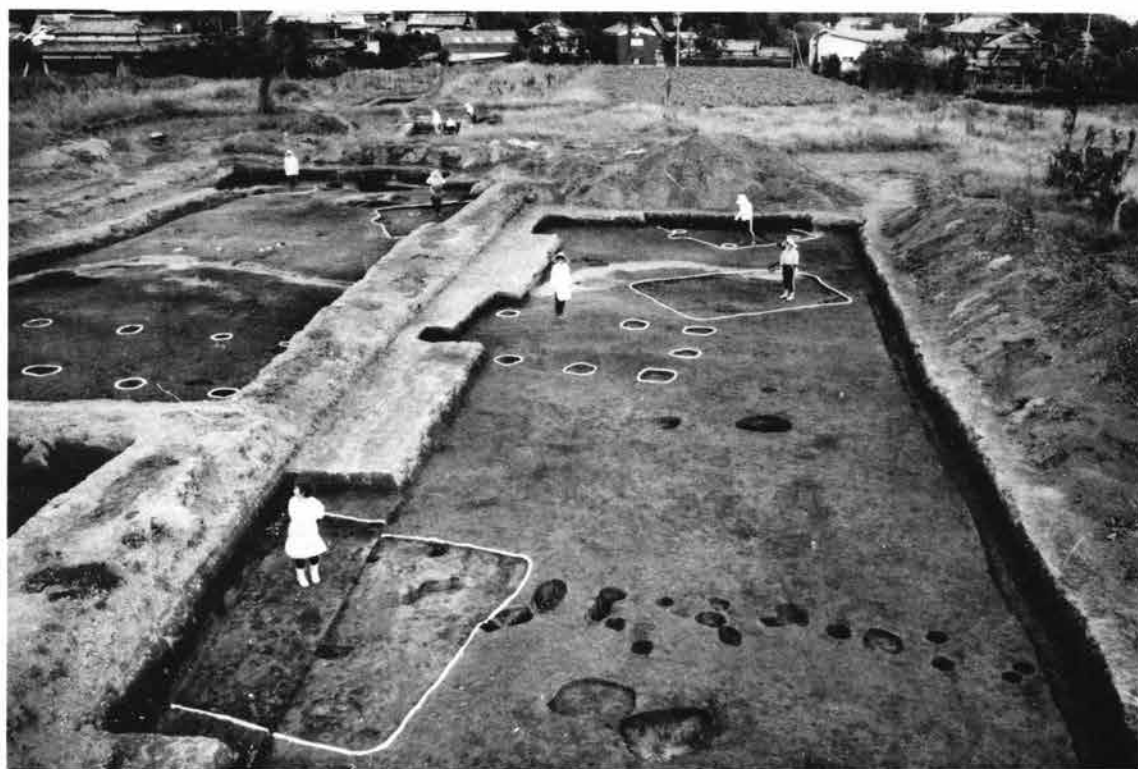
(1) 1区掘立柱建物跡SB01・02（北から）



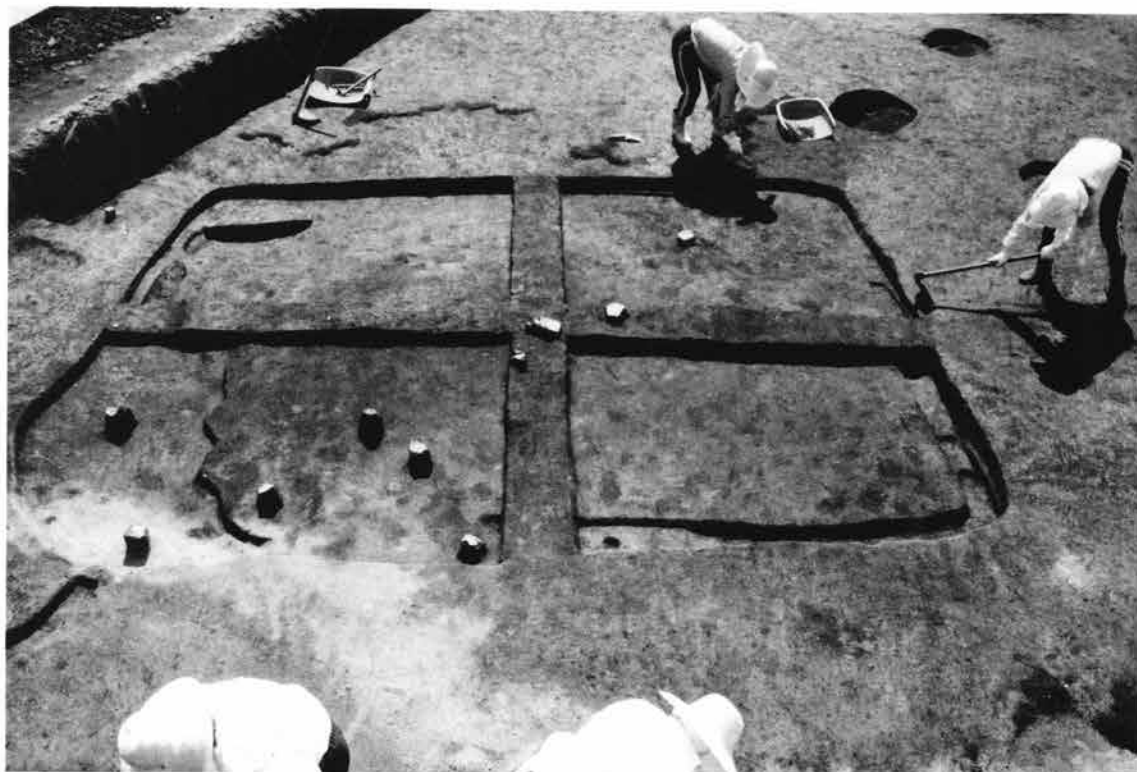
(2) 2区竪穴式住居跡SH06（北から）



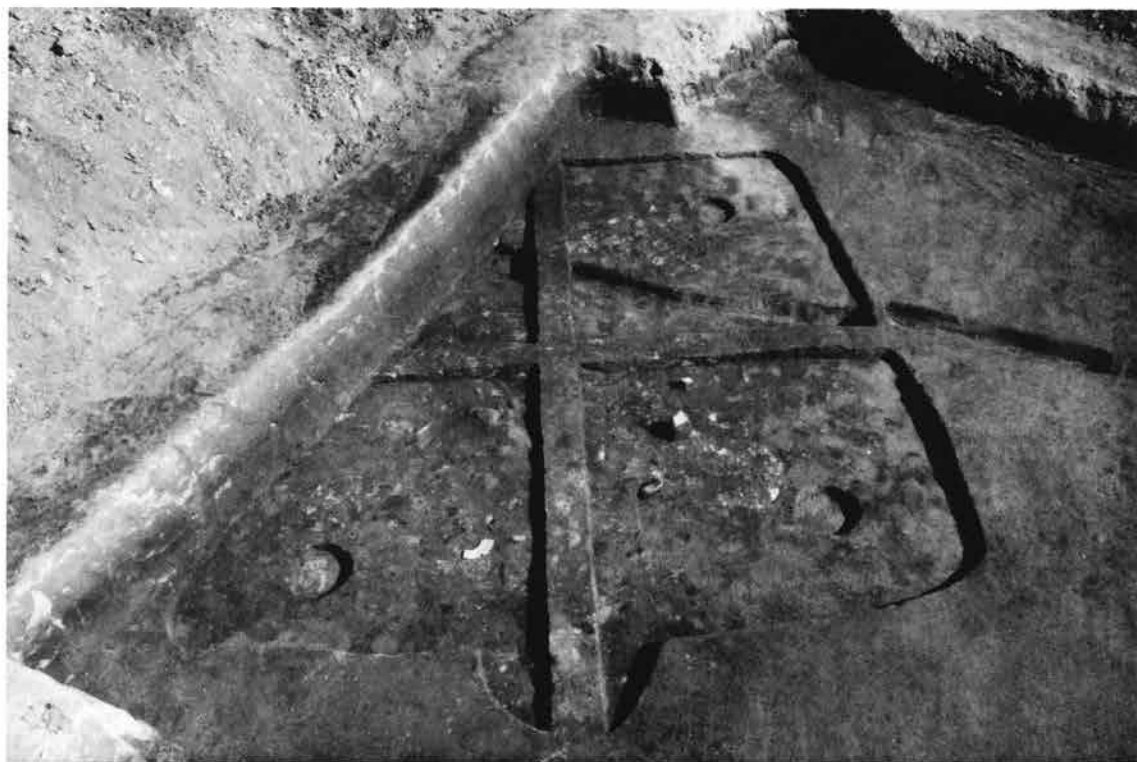
(1) 3区全景 (西から)



(2) 3・4区全景 (西から)



(1) 4区竪穴式住居跡SH10 (東から)



(2) 4区竪穴式住居跡SH11 (北から)





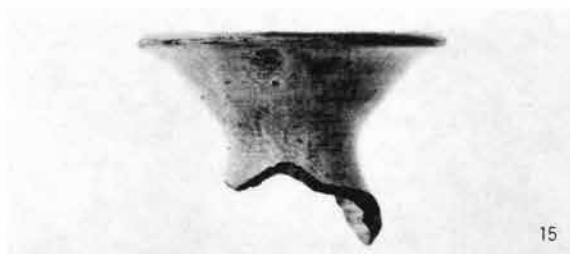
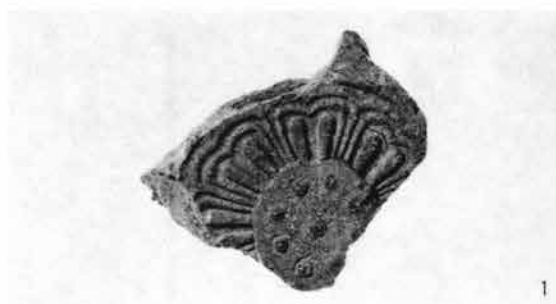
(1) 調査地全景 (北から)



(2) 溝SD3 (北から)



(1) 溝SD5・基壇状遺構SX6 (東から)



(2) 出土遺物



(1) Aトレンチ全景 (北から)



(2) Bトレンチ全景 (北から)



(1) Cトレンチ全景 (西から)



(2) Cトレンチ断面 (南から)

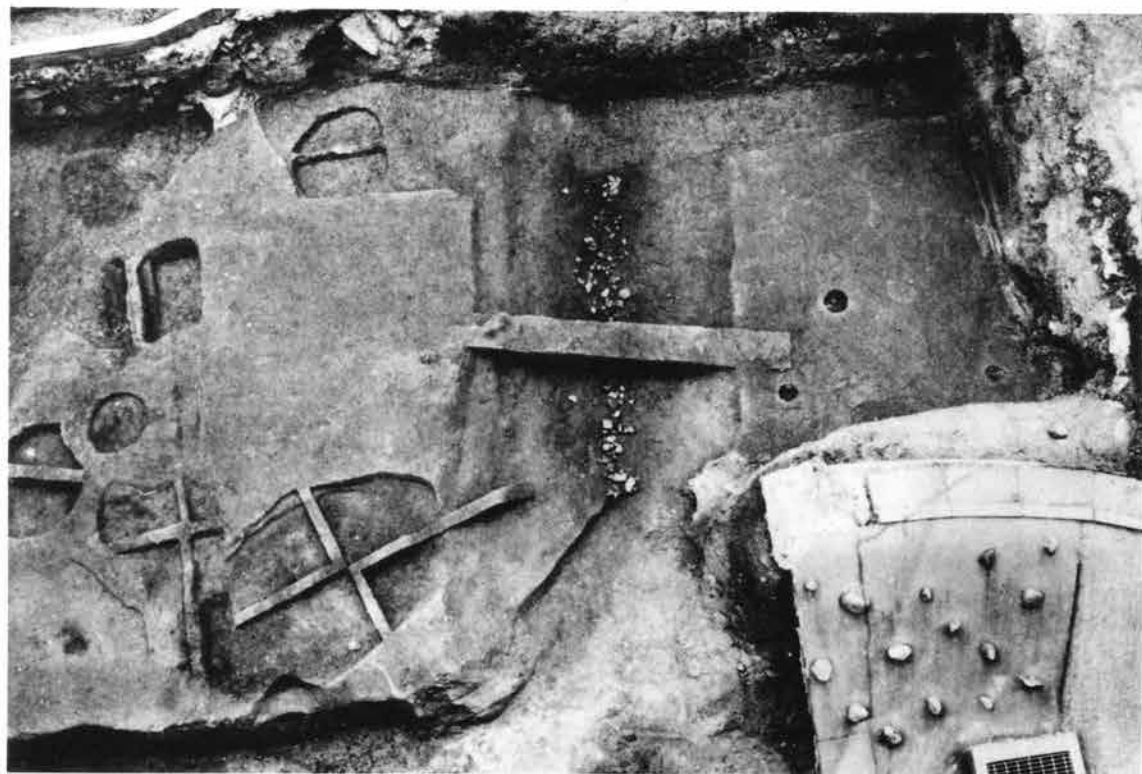




(1) 調査前風景 (北から)



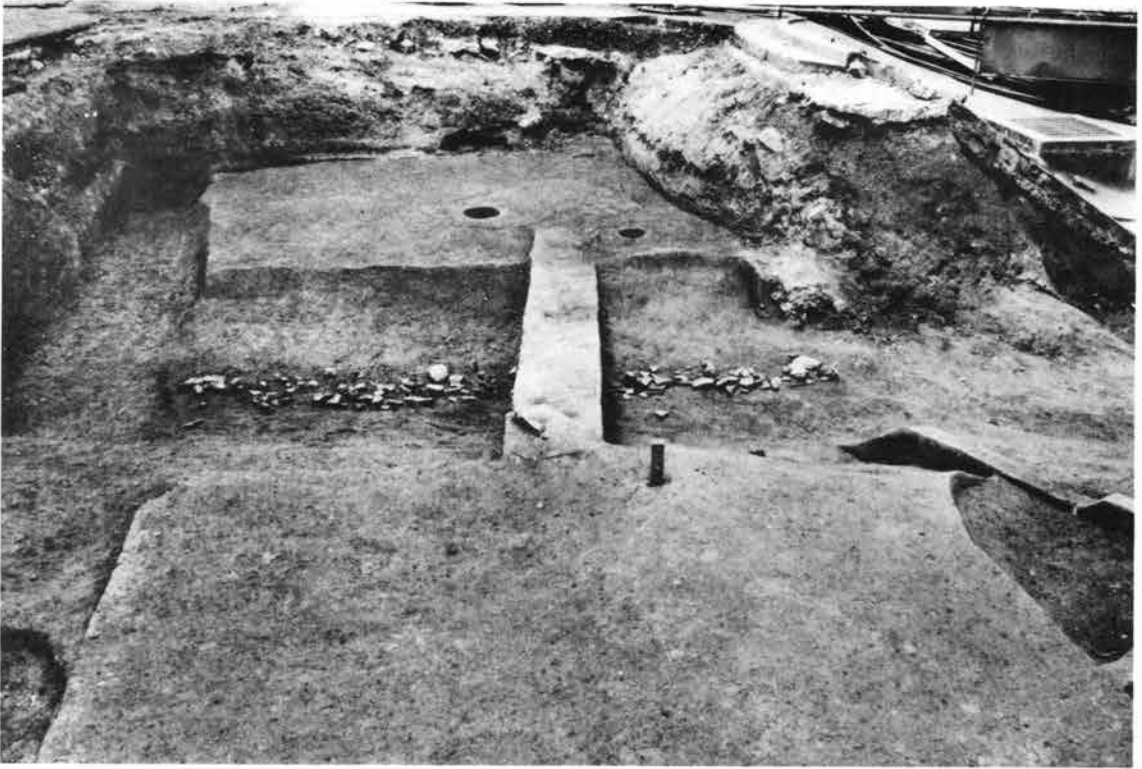
(2) トレンチ全景 (北から)



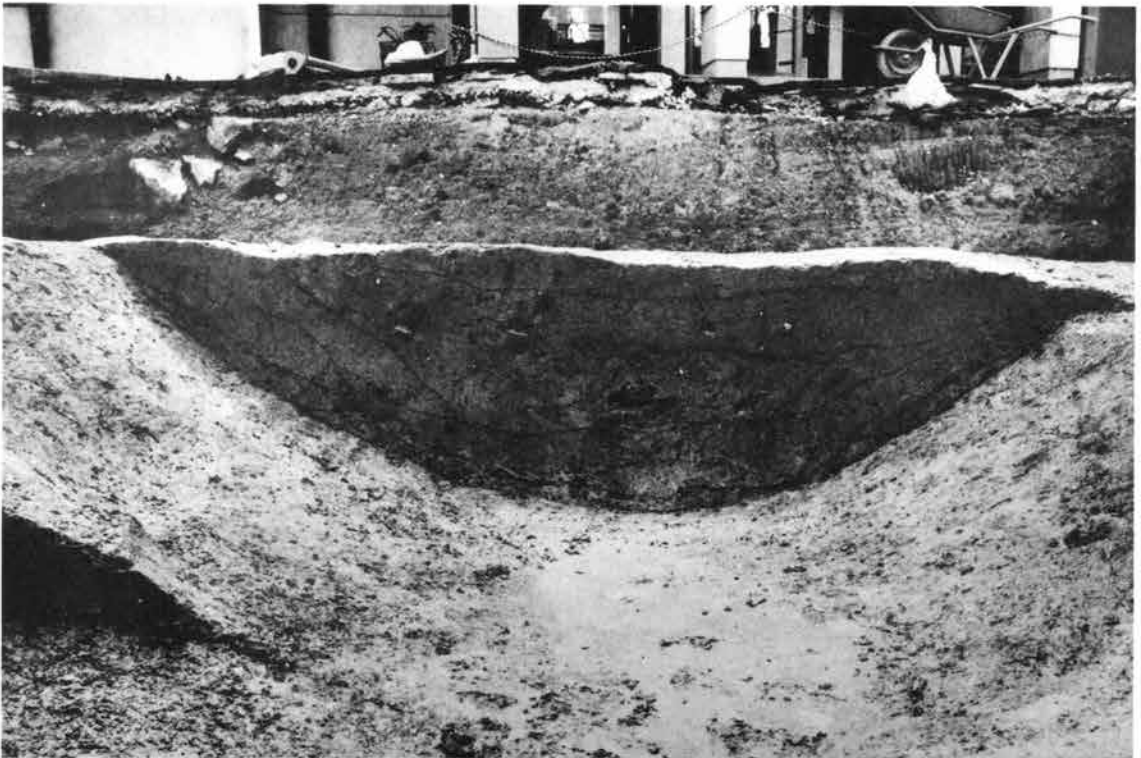
(1) 土坑SK01、濠SD02 (西から)



(2) 土坑SK01 (北から)



(1) 溝SD02 (北から)



(2) 溝SD02の断面 (西から)

図版第30 樋ノ口遺跡

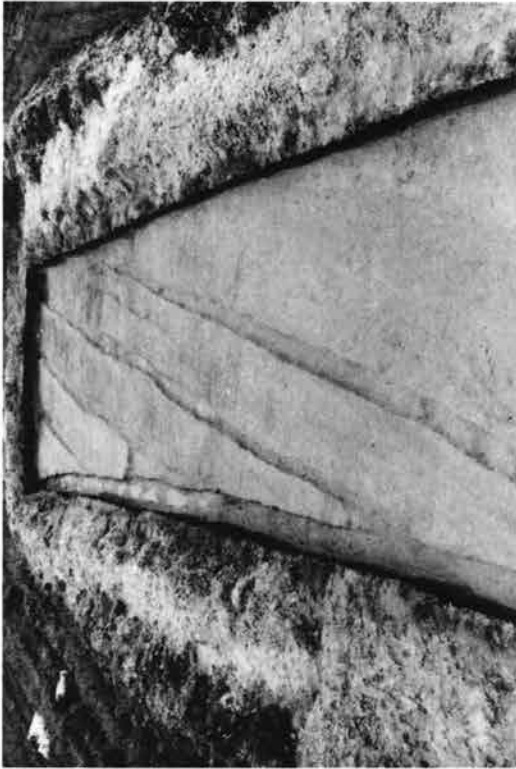


(1) 調査前風景 (南から)

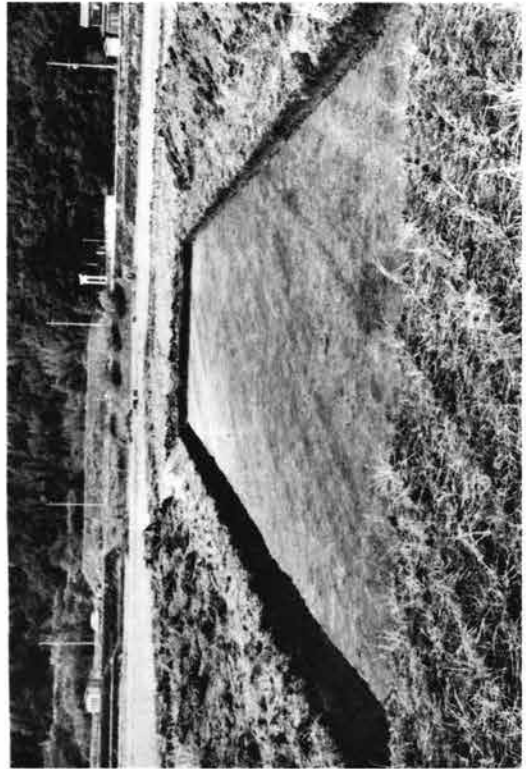


(2) 調査前風景 (南東から)

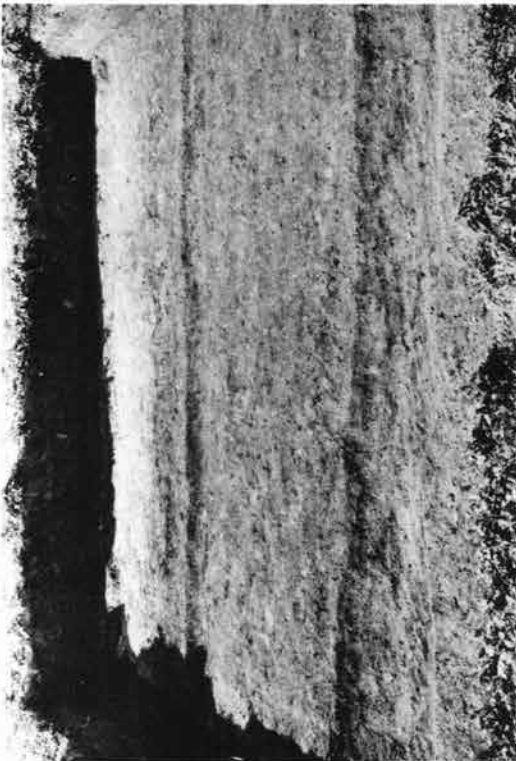




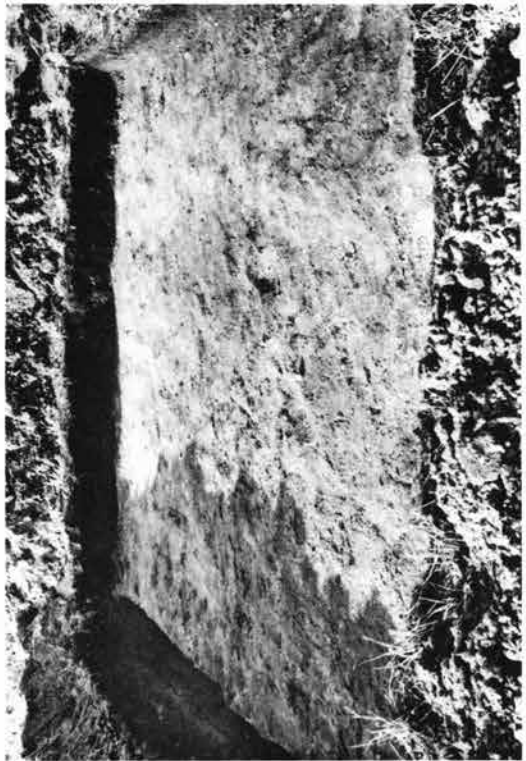
(1) 第1トレンチ試掘状況 (南東から)



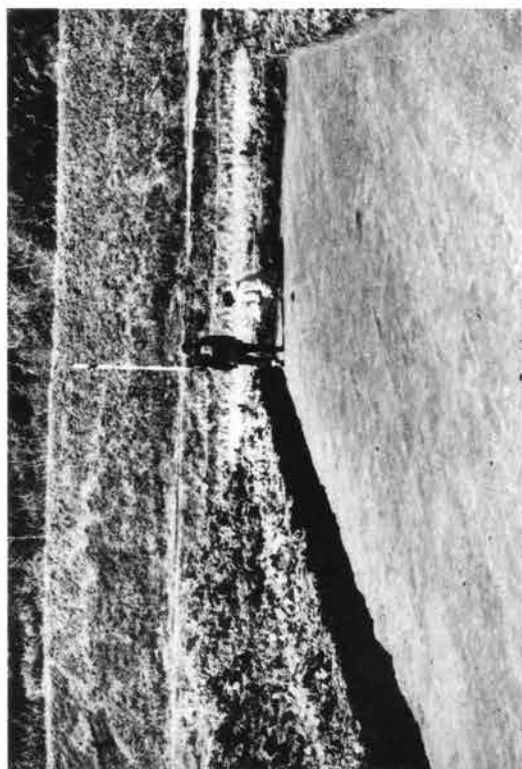
(2) 第2トレンチ試掘状況 (南東から)



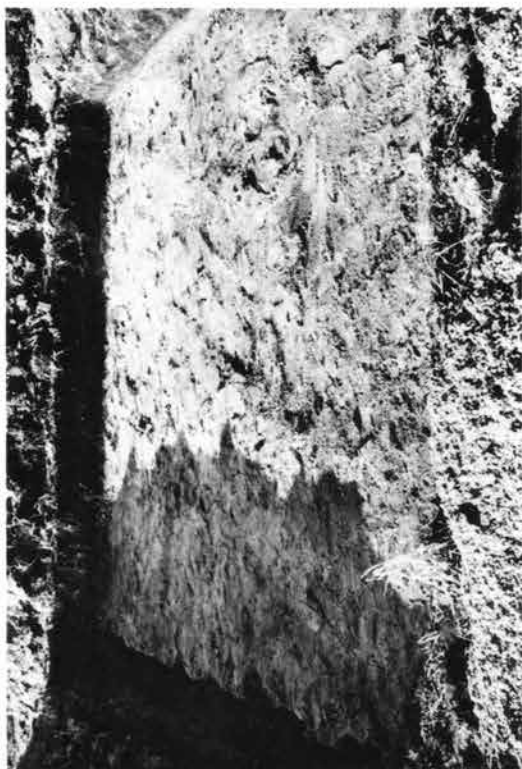
(3) 第4トレンチ試掘状況 (東から)



(4) 第5トレンチ試掘状況 (東から)



(1) 第3トレンチ試掘状況 (南東から)



(2) 第6トレンチ試掘状況 (東から)



(3) 第3トレンチ南部 (東から)



(4) SB8柱穴検出状況 (東から)



(1) 瓦・灰釉出土状況（東から）



(2) 三彩出土状況（東から）



(3) 三彩小壺出土状況（西から）



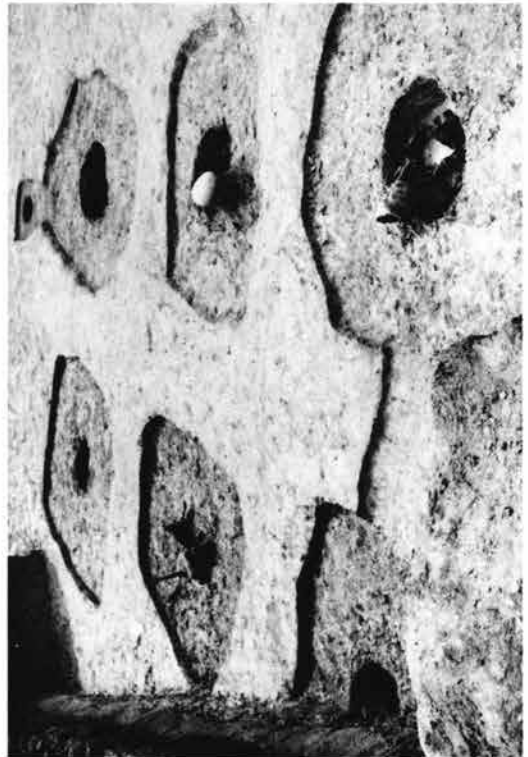
(4) 二彩蓋出土状況（南から）



(1) 第3トレンチ北部 (北から)



(2) 暗渠SX154検出状況 (東から)



(3) SH12検出状況 (東から)





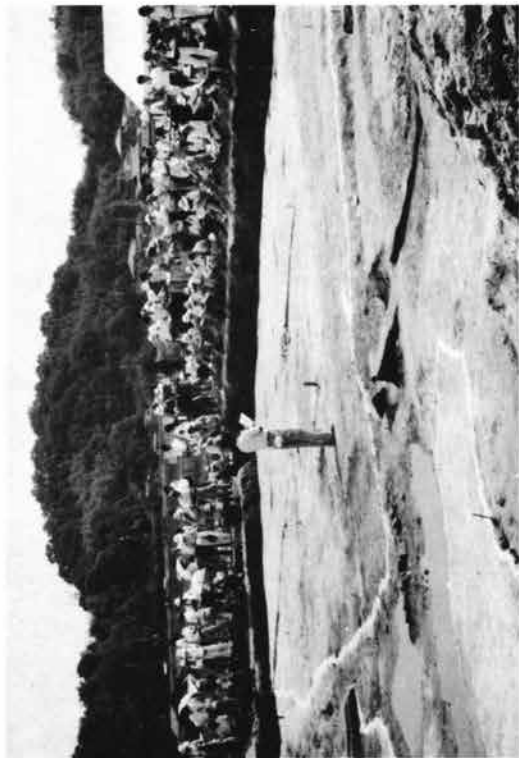
(1) 第7トレンチ発掘状況(北西から)



(2) 第7トレンチ山際発掘状況(西から)



(3) SB12柱痕検出状況(北西から)



(4) 現地説明会風景(北東から)



(1) 築地周辺検出状況（南から）



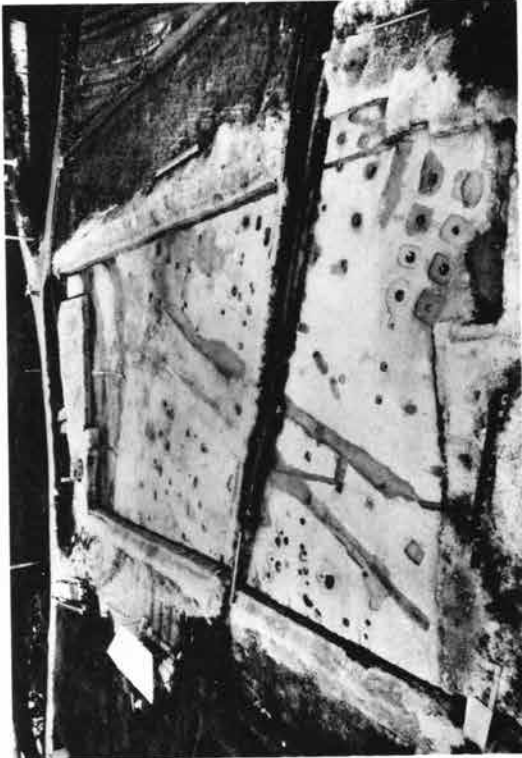
(2) 南部遺構検出状況（東から）



(1) 西壁土層断面 (南東から)



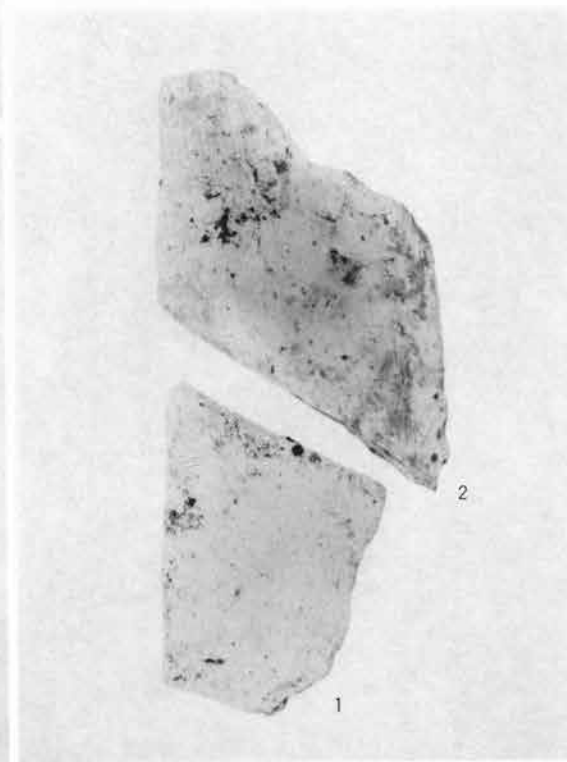
(2) 調査地全景 (東から)



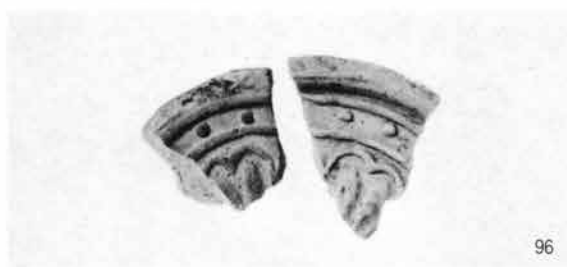
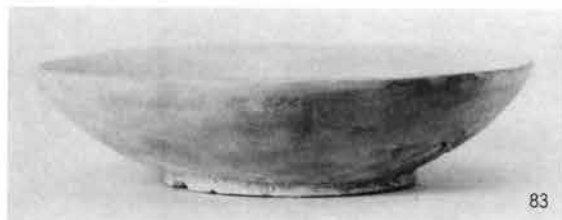
(3) 調査地全景 (南東から)



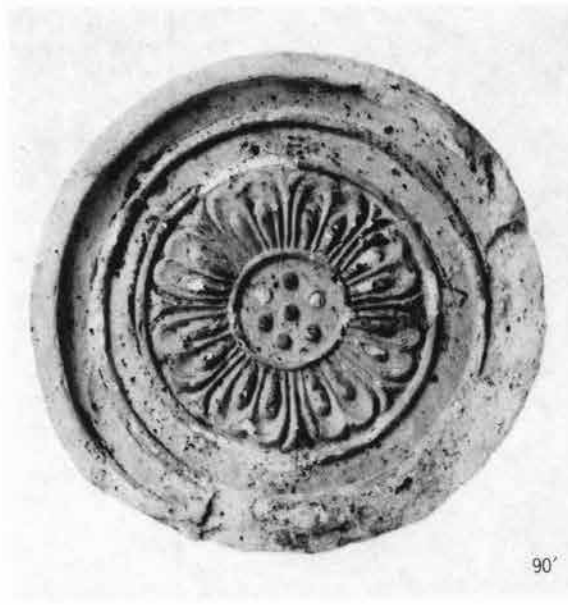
(4) 調査地全景 (北東から)



出土遺物 (1) 彩釉陶器・二彩瓦類









須恵器・土師器類



彩釉陶器類

出土遺物(4)



京都府遺跡調査概報 第48冊

平成4年3月19日

発行 (財) 京都府埋蔵文化財調査研究  
センター

〒617 向日市寺戸町南垣内40の3  
Tel(075)933-3877 (代)

印刷 中西印刷株式会社

〒602 京都市上京区下立売通小川東入  
Tel(075)441-3155 (代)